

# 清水ヶ丘からⅡ

～ 言いたいこと、伝えたいこと ～

諏訪清陵高等学校73回生「なみの会」古希記念誌

校是



清陵会館所蔵

1967年(昭和42年)入学 第73回生

## はじめに

2019年（令和元年）7月の卒後50年記念の集いに98名の73回生「なみの会」会員が集まり、懐かしい面々と顔を合わせ、旧交を温めることが出来ました。同時に、我々の足跡を形に残そうと卒後50年記念誌「清水ヶ丘から」を作成・発行しました。

「清陵と私」の共通テーマで、一番多感な、人間形成上、あるいは将来の自分に繋がっていく清陵との関わり合い、思い出を文集に残すことが出来ました。103人の仲間の投稿は我々製作委員会メンバーの予想をはるかに超え、皆さんの清陵に対する熱き思いが伝わってきました。

また、清陵生らしく「50年後の談論会」として、様々なカテゴリーでなんでも議論しようと「紙上談論会」も投稿してもらいました。50年の歩みを記録した資料編の3部構成で、とても立派な記念誌が出来ました。ご協力いただいた皆さんに感謝です。

その記念誌発行後、その時はそれぞれの事情で投稿できなかった人、まだまだ自分の思うことを仲間にも知ってもらいたい、伝えたいという人の要望が寄せられました。今回、「古希の集い」に合わせて、「清水ヶ丘からII」として続編を発行することになりました。前回は、多くの人の掲載と平等のボリュームを基本としていましたので、一人A4判1ページの制限を設けました。今回は、テーマを設けず伝えたいことを制限なく複数のテーマで自由に書いてもらうことにし、62名93件の投稿により完成することが出来ました。前回以上に様々な内容になっています。それぞれの思いが伝わることと思います。

コロナ禍で当初、2021（令和3）年に予定していた「古希の集い」を延期せざるえず、3度目の正直でイベントを開催できる運びになりました。

「古希」は唐の詩人・杜甫が詠んだ詩「人生七十古来稀なり」に由来しています。人生100年時代を迎え、「古希」は多くの人にとって通過点だと思います。高校時代に思い描いていた70歳は、「人生最終盤の老人」のイメージだったと思います。いざ自分が到達してみて、「ハートは青春の若者」と思い感じているのではないのでしょうか？ 事実、活動的な人が多いと思います。仕事、趣味、さらに地域貢献と、それぞれ活躍しています。この文集が仲間の思いを感じ「青春の火」を燃やし続けていける一助になって欲しいと思います。

2023年（令和5年）10月21日

諏訪清陵高等学校73回生「なみの会」会長  
古希記念誌「清水ヶ丘からII」製作委員会委員長  
松木 敏博（1部）

## 目次

### 1 部

格差社会と東京一極集中	1 部	杉田 隆俊
日本の競争力低下を憂う	1 部	武居 良明
断捨離を始めて	1 部	武居 良明
老いたら健康が一番大切	1 部	林 春幸
コロナ禍にフランスへ行く	1 部	林 春幸
「私の写真趣味」	1 部	松木 敏博
素晴らしき「早朝ウォーキング」	1 部	宮坂 和生
御柱祭に相応しい年明け (TV 番組出演 3 本)	1 部	宮坂 和生
渾名 (あだな)	1 部	宮坂 美千博

### 2 部

高校生科学コンテスト	2 部	岩本 光正
コロナ禍の著作活動からの回想	2 部	岩本 光正
大学での講義の回想：コロナ禍で思ったこと	2 部	岩本 光正
「ストレス社会を乗り切るために見つけた海釣りという趣味」	2 部	小池 忠男
長男・岳太の北京冬季パラリンピック	2 部	小池 忠男
目 土 袋	2 部	高橋 和成
中老年において覚醒は与えられるか	2 部	長瀬 潔
大学でのこと	2 部	原 大
「なみの会」メンバーとの縁 (えにし)	2 部	藤森 英幸
古希の心構え	2 部	山田 雄一
ニホン？ それとも、ニッポン？	2 部	山田 雄一
晴耕雨読の日々	2 部	柳田 恒男

### 3 部

「働くこと」雑感	3 部	伊藤 俊卷
自著評(抄)	3 部	遠藤 茂
百人一首考(抄)	3 部	遠藤 茂
タマムシの研究	3 部	遠藤 茂

お気楽3人組	3部	小川 素明、小林 千秋、林 重男
宇宙デブリ問題：宇宙開発を困難にする宇宙のくずの急激な増加	3部	帯川 利之
「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」か？	3部	河西 朝雄
これでいいのか日本のプログラミング教育	3部	河西 朝雄
二足のわらじを履いて	3部	河西 朝雄
少年法適用年齢引き下げ問題について	3部	北川 和彦
虐待等の暴力から子どもを守る	3部	北川 和彦
亡小林正和君の思い出	3部	北川 和彦
思うこと（杞憂）と近況	3部	古村 功
農に勤しむ	3部	津金 敏三
京都の話	3部	中島 毅
名札	3部	ニツ木（伊東）淳子
てんてこ舞いの毎日	3部	松田 光明
女の子、女子生徒学生、女性・・・、ジェンダーフリー、、、	3部	マディーン啓子
などなどイロイロ変わって女性進出めざましい今を振り返る	3部	マディーン啓子
余生と第二の人生	3部	矢ヶ崎 崇

## 4部

今の自分	4部	赤羽 博巳
「若さ」と「健康」を保つには	4部	和泉 桂子
湿原聖地（短歌）	4部	小口 信治
夜の諏訪湖	4部	小口 信治
霧ヶ峰とオオカミ	4部	小口 信治
岩森にアパートを借りて	4部	小口 信治
線路の上の傘	4部	小口 信治
古希を経て	4部	小澤 龍太郎
Beatles と Bob Dylan の名曲について	4部	小松 大蔵
これからを生きる	4部	小松 大蔵
最近はやりの「多様性の認証」と「勿体」について	4部	小松 大蔵
清陵と私	4部	小松 大蔵
出版インサイドからのレポート		
『ウィズ・エイジングー何歳になっても光り輝くために…』を読み解く	4部	清水 光昭
私と清陵 ー追加文ー	4部	瀧澤 伸介

歴史には if は無いと言うが	4部	瀧澤 伸介
私の徘徊癖	4部	瀧澤 伸介
私鉄沿線	4部	鳥羽 研二
仕事場通い	4部	原 聰
コロナで思う事 その1	4部	原 秀男
古希に寄せてー「かじまやー」	4部	原 秀男
古希に寄せて その3 2023年夏の風景	4部	原 秀男
今を精一杯生きる	4部	平林 重夫
70代を健康に過ごし、80代90代を元気に生きる秘訣?	4部	平林 重夫
「私と 清陵」	4部	本田 稔
諏訪の神 について	4部	本田 稔
古稀を迎えて	4部	矢島 健二
72才を前にして 晩夏酷暑・松戸市にて	4部	山田 文雄
清陵エピソード・アラカルト	4部	渡邊 博保
校 訓	4部	渡邊 博保
家と稲作農業	4部	渡邊 博保

## 5部

不滅の魂に導かれて	5部	朝倉 一善
近況(野菜作り)	5部	伊藤 正陽
市議会議員8年・9条の会	5部	伊藤 正陽
拙句披露を兼ねて	5部	窪田 敏
ヨコハマ猫歩き五七五	5部	窪田 敏
いい日	5部	小池 隆昭
Z世代は新聞を読まないか?	5部	小島 一彦
生徒たちと・・・	5部	小松 宏昭
象を撃つ政治指導者たち	5部	細田 俊彰
再び「その独りを慎む」	5部	細田 俊彰

## 6部

かつて実家は映画館だった	6部	飯田 夏来
様々な理想を追いモーレツ時代を生き抜いた昭和と一旦手の平に収まった		
鯉に逃げられた鯉を追い続ける令和	6部	板花 哲夫
諏訪清陵高校時代の思い出と今	6部	熊谷 靖樹

「清水ヶ丘からⅡ」に寄せて  
コロナと農作業  
テレビで見る日本の歴史

6部 五味 亮寛  
6部 山崎 和彦  
6部 山崎 和彦

## 7部

ジャズ喫茶開店顛末記  
“赤秋”を謳歌する  
“生きている”実感  
雑感(18年ぶりの ARE 達成に寄せて)  
この歳になって思うこと  
65歳から日本百名山踏破に挑戦中  
四国霊場八十八カ所歩き遍路「結願」

7部 川島 弘  
7部 田中 俊廣  
7部 林 元夫  
7部 原 恵二  
7部 山田 思鶴  
7部 横内 孝文  
7部 横内 孝文

## 格差社会と東京一極集中

1部 杉田 隆俊 (2020年11月3日)

これは私(杉田)のグチとボヤキである、独り言を書く。

日本は戦争に負け足腰も立たない状態の中、GHQの指導?のもと資本主義を進めてきた。負けた悔しさもあり”欧米に追いつけ追い越せ”と経済第一主義で国民全員がモーレツに頑張ってきた。そしたらいつの間にか欧米に追い付き、やがて追い越してしまい一時期は世界一の経済大国になった。

物質的には豊かになったが そのぶん幸せになれたのだろうか? 人間にとって一番大事なのが幸福であって物質的な豊かさではないはず。ここが肝心なところ。私の小中学校のころ、テレビではララミー牧場とか名犬ラッシーなどアメリカドラマが流れ 豊かなアメリカに憧れたものである。その頃の日本は貧しかった、でも不幸だなんて思ったことは一度もなかった。周りの人間もみな貧乏だった。

物質的な豊かさと幸福感とは直接の関係はなさそうだ。経済大国も結構だが それに伴う副作用も大きい、その一つが格差社会である。所得格差、教育格差、地域格差など。なんせ東大の合格者の80%は私立の中高一貫校らしい。つまり小学校を卒業した時点で東大に入れるか否かの運命が決まっているということになる。そんな馬鹿な! 我々の時代はそうは言っても地頭で勝負できた、しかし今では金持ちの家に生まれ優れた塾や予備校のある地域でなければ東大合格はできない。

これぞ格差社会、何たる矛盾、恐ろしい社会になったもんだ。金持ちが金持ちになるのは簡単なことだが、貧乏人が金持ちになるのは至難の業。ちっとも平等ではない、生まれながらに運命が決まっているようなものだ。

中でも私が一番ボヤキたいのが地域格差、つまり東京一極集中の問題である。テレビの番組によると四国のある地方では高校を卒業した若者が地元就職したいが仕事がないので泣く泣く東京に出ていかざるを得ない。その地域はますます過疎化し高齢化していく、諏訪だって同じこと。では東京は人口が増えて喜ばしいのか? 東京だっていいはずがない、人間ばかり増えたら住みにくくなっていく。

国立競技場、国立博物館、国立図書館など国立と名の付く施設の多くは東京にある。金の落ちる所に人が集まるのは当たり前の事、税金が東京ばかりに落ちる、だから人が東京に集まる。これは人災である、国の政治が「へばい」、この問題を放置し続けた結果である。地方創生 地方創生と掛け声だけは掛けるが”仕組みづくり”を何もしてこなかった。

例えば、

- ・国会を地方に出す
- ・皇居も地方に出す
- ・本社機能を地方に持つ会社には法人税を半額とする
- ・東京に住む人間からは”東京税”を新たにとる

これらは地方の行政ではできない、国の仕事である。いつまで放置し続けるのか？ 待っていても埒（らち）が明かない

ところが思わぬところから問題解決の期待の星が出現した、それが「コロナウィルス」である。テレワークで東京から地方に移住、そしてワーケーション、おおいに結構、結構毛だらけ猫灰だらけ。

自然の中で自然に親しみ自然とともに生きる、極端に言えば自給自足の生活だっていい。世の中が変われる時はこんなものかもしれない、想定外の何かが発生した時。

共産主義がだめなのは歴史が証明している、資本主義は格差社会という大きな問題を引き起こしている。もうそろそろ経済第一主義に見切りをつけ新たな価値観に向かったらどうだろう。

**共産主義でもない、資本主義でもない、言わば『人間主義』に向かおうではないか！！！！**



## 日本の競争力低下を憂う

1部 武居 良明 (2022年9月28日)

最近、日本の競争力低下が話題になることが多い。そこで色んな統計データ (2019～2022年) から我が国の立ち位置を俯瞰し、若干の感想を述べてみたい。

先ず、世界競争力ランキング(IMD)をみると日本は34位で、中国17位や韓国27位より下位になった。1990年前後は1位であったので凋落が著しい。政府やビジネスの効率性の問題、巨額の政府債務残高や低い労働生産性、更に研究開発力の低下も指摘されている。

GDPは米国、中国に次いで3位だが、中国には2010年に抜かれて今や3倍の差があり、4位のドイツには僅差に迫られている。主要国は皆成長しているのに、日本だけが20年間停滞している。一人当たりのGDPでみると28位まで低下し、30位の韓国に追い上げられている。1人当たりのGDPは平均所得と強い相関があるので当然所得も増えていない。平均賃金は昨年韓国に抜かれ22位まで低下している。

国際比較できるビックマックの価格を138円/ドルなど各国の為替レートで比べると、日本390円(41位)に対し、スイス925円(1位)、米国710円(6位)、中国490円(31位)であり、海外では買うのを躊躇するレベルまで円の価値が低下している。

所得水準が低いのは労働生産性が23位と低いことも要因である。労働生産性は付加価値を労働時間で割ったものだから、付加価値をあげるか労働時間を短縮する必要がある。一般に大企業の方が中小企業より付加価値をつけやすいが、企業数は圧倒的に中小企業の方が多いので労働生産性はなかなか向上できない。

また製造業と非製造業では概して前者の方が労働生産性(生産効率)は高い。かつて日本の製造業は世界トップの競争力を持っていた。例えば半導体産業は1990年代に売上高の世界ランキングで上位を席卷していたが、その後韓国や台湾などに抜かれ日本勢のシェアは急激に低下していった。非製造業や管理間接部門では国際競争云々の前にムダ・ロスの削減が必要であり、次いでIT技術などによる業務の効率化が必要と思われる。

強みであった製造業の弱体化は貿易収支を見れば明らかである。近年は赤字基調にあり、昨年は96位まで低下した。要するに貿易で稼げなくなっているのである。遠因はかつての為替の超円高にあるとみている。1995年に1ドル80円の円高に苦しみ、製造業はこぞって中国などに工場を移転した。私が勤務した会社も深センでの来料加工からスタートし、無錫に独資の工場を設立した。それ以来中国は世界の工場として貿易黒字を拡大し、日本は反対に貿易赤字に陥ることになった。まさにチャイナ・インパクトである。

我が国の最後の砦は経常収支である。中国、ドイツに次いで3位の黒字を確保しているが、中身は貿易収支(前述)とサービス収支(コロナで旅行客など減)の赤字を第1次所得収支(海外投資の利益)で埋め合わせている。ロシアのウクライナ侵攻などによる原油・

天然ガスの高騰や日米金利差の拡大による円安が続くと、貿易赤字が更に拡大し経常収支の黒字も危うくなる。対外純資産を世界一保有していることは好材料だが、逆説的に言えばそれだけ国内に有望な投資先がなかったともいえる。

一方で、最近の円安をピンチではなくチャンスと捉えるならば、工場を海外から取り戻して国内の製造業を再び強化すべきである。やはり国内でものづくりをしていないと技術者も研究者も育たないし、大学の理系教育の弱体化にも繋がってしまう。

その教育面を眺めてみると、世界大学ランキング(THE)で東大は35位であり、米国、英国に加え近年では中国の大学が上位を占めている。我が国は世界11位の人口を抱え学生数は9位だが、大学進学率(64%)が49位と低いのは意外である。もし大学進学への経済的負担が大きいのであれば前述の所得水準を高める必要がある。また所得を補完する公的教育支出をみると中高生が26位、大学生が38位と世界的水準でも充分でない。

科学技術立国を目指すとはいっても、理工系の学生割合は20%と少なく、自然科学分野の引用論文数は12位で韓国にも抜かれてしまった。世界で活躍するのに必要な英語力に至っては54位という有様である。ものづくり・技術立国の再興が切に望まれる。

明るいデータとしては、人口11位、IT技術者数4位(人口比では32位)、知的財産権等使用料収支3位(過去の技術遺産)、安全な国5位、観光魅力度1位、病院数1位、平均寿命男3位・女1位などである。ところが国の活力となる若年層人口が、婚姻率や出生率の低下とともに減少しているだけでなく、平均寿命の向上により高齢化率1位の老人大国になってしまった。若年層の減少は由々しき事態であり、老人はともかく何としても国力の基盤となる若い人を増やしたいものである。

最後に郷愁を込めて、我々の時代を振り返ってみる。1951年の戦後復興期に生まれ、衣服は充分でなく継ぎの当たったズボンや半纏を着ていた。食べ物も米と野菜が中心でめったに肉を食せなかった。おやつは春夏が自分で獲った川魚や蜂の子、秋がイナゴ、冬は氷餅。それでも昨日よりは今日、今日よりは明日の豊かさを希望に生きていた。特に三種の神器といわれたテレビ、洗濯機、冷蔵庫に加え電気炊飯器が入った日から生活に革命が起き喜びに溢れた。

高校生時代の中国は文化大革命に揺れていた。またベトナム戦争や国内で勃発した学生運動など、まさに激動の時代の中で青春時代を過ごした。大阪万博では戦後の我が国の復興を喜ぶとともに、将来に向けてさらなる飛躍を期待した時代だった。

教育分野では欧米へ追いつくべく、自然科学や工学を横文字で学んだ。製造業は欧米の製品を分解して学び、軽薄短小に焼き直し、安い労働コストと品質管理でメイドインジャパンを製造し世界を席卷した。まさにジャパン・アズ・ナンバーワンの時代があった。

日本の幸福度ランキングは54位であるが、私はこの日本に生まれて良かったと思う。世界トップクラスの平均寿命は男82歳・女88歳、健康寿命は男72歳・女75歳、71歳の平均余命は男15年・女19年であるが、残りはそう長くない。一日一日を大切に生きていきたいと思う今日この頃である。

長らく製造業に携わったので、思い出深い工場の写真を掲載した



甲府・重合トナー工場竣工（2003年）



辰野・重合トナー工場竣工（2007年）



米国NY・トナー工場（2006年）



フランスロレーヌ・トナー工場（2007年）



中国無錫・複合機工場竣工（2005年）



中国無錫・複合機工場外観（2005年）

## 断捨離を始めて

1部 武居 良明 (2023年9月28日)

断捨離のポイントは整理であり、「要るものと要らないものを分けて、要らないものを処分すること」と理解しているがこれが難しい。要るものと要らないものの境界が曖昧で、生活環境や年齢によって変わってくる。そこで古希を節目に実行してみることにした。私事で恐縮だが以下にアイテムごとの取り組み状況を記す。

- ◆書籍；現役時代にビジネス書を多読したが今は必要ない。書き込みがあるので古本屋にも売れない。そこでタイトル/著者/コメント/ランクなどを Excel でデータベース化してから、実家に運んで保管したが誰も読まないだろう。高校迄の教科書は捨てたが、大学の専門書は捨てられずに残した。今後の生活で役立つわけでもないのだが。
- ◆名刺；頂いたら直ぐにデータベース化していたので紙の名刺は残っていない。Excel では VBA を活用して並べ替えや検索ができるので大変便利である。
- ◆年賀状；毎年データベース化していたのではがきは何時でも捨てられる。交換はそろそろやめようと思っているがタイミングが難しい。後期高齢者突入あるいは喜寿の時か。
- ◆写真；残したいアナログ写真をスキャナーで読んでパソコンに保存しているが、分類名もすっきりしていない。まだ途中だが骨が折れる。親のアルバムは全く手付かずである。
- ◆衣類；現役時代の背広は捨ててないがウェストがきつくて苦しい。今後着用することもないだろう。礼服はゆったり作ったので当分大丈夫である。
- ◆雑貨類；カセットテープ、ビデオテープは殆ど捨てたが、LP レコード、コンパクトディスクは残した。Windows XP パソコンを時々使うのでフロッピーディスクも残した。取扱説明書は可能な限りネットからダウンロードしたが、念のため書類も残した。デジタルにするとキーワードを簡単に検索できるので便利である。ゴルフは一昨年に仲間が急逝してからプレーしなくなったが、運動不足解消のため練習場には行くのでクラブを残してある。ボールが沢山あるが古くなると飛ばなくなるので処分する。
- ◆各種会員；カード、ネットなどの会員で使っていないものは極力脱会した。
- ◆車；父のクラウンを 28 年間/23 万キロ乗ったが、近々に別車種の新車に乗り換える。センサー満載で衝突回避や駐車支援、自動運転化が進んでいるので安全第一で運転する。
- ◆実家；両親とも他界したので業者を使い思い切って整理した。衣類、布団、鍋釜、食器、引き出物、人形、書類などだが、買い取ってもらえるものは僅かしかなかった。祖父の持ち物から明治天皇の軍人勅諭が出てきた。日露戦争従軍の話を聞いていたので感じるものがあつた。大仕事をしたおかげで腰痛を患ってしまった。
- ◆資産；銀行口座の数を絞り預金は可能な限り証券会社へシフトした。株式や投資信託の運用を増やす一方、“DIE WITH ZERO”の考え方にも魅力を感じている。
- ◆体と心；腹周りの脂肪を減らしたいが飲むと食べてしまう。飲む頻度を減らせばよいのだが諏訪人には難しい。アミロイドβの蓄積も減らしたいが忘却するのも断捨離か。

## 老いたら健康が一番大切

1部 林 春幸 (2020年12月23日)

山田君からのメールでなみの広場を知りました。これまでに投稿された同級生の文章に思わず引き込まれ、夢中で読ませていただきました。出発点は同じでもそれぞれいろいろな人生を歩まれてきたものだと感心しました。私は44年間医師として大過なく働いてきました。それだから言いうわけではありませんが、これからの老後の人生、健康が一番大切だと思います。5年前に病院の仲間と卓球を始めました。女性職員がおもな相手です。



2020年1月福岡



2014年1月ベトナム

毎日キャーキャー言いながら打ち合うのが楽しくて楽しくて……いつの間にかなんと17kgの減量に成功したのです。なみの広場の投稿原稿で宮坂和生君が奥さんとの散歩で5kg減量したことを書かれていました。女性10人余りに囲まれ毎日汗をかいているほうが効果絶大ですね。減量に一番効果があるのは大笑いすることだと思います。おもしろプレーにすかさず入るツッコミ。女性達のプレーと頭の回転の速さには舌を巻きます。こちらは腹を抱えて笑うばかり。体中から汗が噴き出します。

実はコロナ蔓延の影響で卓球も自粛ムード、体重が漸増しているのが悩みの種です。この場をお借りして、私の体型変化の記録写真を残させていたただきたいと思います。

## コロナ禍にフランスへ行く

1部 林 春幸 (2022年9月6日)

卒後50周年記念誌の私のページから続けさせていただきます。2019年の同窓会の前の5月、次女が初めての出産のため我が家に里帰りしたところからです。6月に無事男子が生まれました。大きな自動車会社で働いていたおかげで長い育休がもらえるのは計算済み、すぐさま赤ん坊の写真を撮ってパスポートを作り、8月には夫の住むパリに向かいました。観光ビザなので3か月間が限度の夏休みです。11月25日には私達の元にもどりました。中国武漢で未知のウイルスによる肺炎のうわさが出始めた頃です。次女は2020年3月に退職して4月からパリ郊外の自動車会社に就職し、家族一緒に暮らす計画でした。一方私も3月31日グループ病院分院の病院長の職を辞し、新築増床された本院へ患者さんとともに移動しました。人生のくぎりです。責任ある立場をはずれ自由が利く身となり、清陵同級の妻(旧姓笠原俊子)と5月のマチュピチュ旅行を楽しみにしておりました。

私達の生涯の重大な転換点を間近にした時、2020年1月25日新型コロナ感染(以下コロナ)の国内1例目が確認され、じわじわと拡大していきました。2月にはフランスがビザ発給を停止、次女母子のフランスへの道が閉ざされました。退職願を提出した直後のことで4月から失業者になりました。4月7日には緊急事態宣言が発出され、私達の夢のマチュピチュ旅行も当然キャンセルです。それどころか外出禁止で、自由な時間をいただいてもどうしようもありません。仕事に打ち込むしかないことになりました。9か月間はなんとか大きな問題もなく持ちこたえました。2021年1月、ついにおそれていた院内クラスターの発生です。患者さん9人と職員8人の感染が明らかになりました。

病棟のフロアーにしきりをつけて隔離、私も青い防護衣を着、帽子にゴーグルN95マスクをつけ一線で立ち向かいました。暑い、苦しい、おそろしい。70歳になってのんびりしようと思っていたのに、なんでこんな目に合わなきゃいけないのか。感染した職員8人が突然自宅待機になったらどうなると思いますか？ただでさえ増加した業務を、日勤夜勤のシフトをやりくりして歯を食いしばって頑張るしかないのです。一人として弱音を吐かず仕事を続ける姿は感動的でした。私は心の中では逃げ出したいと思っていましたが、とても口には出せません。むしろ前向きな同僚と一緒に働けて幸せだと感じました。

その後もコロナは波のように押し寄せ、2022年9月現在第7波のさなかです。その間計4回の院内クラスターを経験しました。最初のクラスターでは患者さん全員が死亡されました。オミクロン株に変化し、ワクチンや新しい治療法が開発され、現在ではほとんどの患者さん達が元気に退院されるようになっていきます。医学の急速な進歩を実感しています。

さて2年余り遡り2020年4月、緊急事態宣言で社会が閉塞した時点にもどります。パリに行くことができず、我が家に身を寄せていた母子は、ひたすらフランス大使館のドア

が開くのを待ち続けました。その間に孫は座り、這い這いをし、立ち上がり、歩き出します。その成長ぶりに目を細めつつ、なんとか家族が再会し一緒に暮らせるようにならないかと願い続けました。

出生後1年2か月、2020年8月12日ついにその日が訪れました。羽田空港の駐車場には車が十台くらいしか停まっていませんでした。広大な出発ロビーに照明が灯っているカウンターはANAだけ。その日1便だけのパリ行きです。多量の引っ越し荷物をチェックインし、娘と孫が搭乗口通路から手を振りながら消えて行きます。これでお別れだなという思いがこみあげ、胸が詰まりました。

妻との静かな二人暮らしがもどり、コロナが蔓延するフランスの家族のこと、孫が私達を忘れちゃうんじゃないか、そんなことばかり話しあって過ごしました。いつしかフランスの娘一家を訪問するのが私達の夢と目標になりました。コロナは収束するようになってはまた再燃し一喜一憂。2022年2月には突然プーチンがウクライナに侵攻という悪いニュースが飛び込んできます。日本政府は渡航制限措置をなかなか解きません。フランスの娘からは第2子妊娠の知らせも届きます。2022年3月1日、待ちに待った渡航制限解除のニュースが入りました。第2子の出産予定は6月初めです。たまたまコロナの第6波がおさまったタイミングで、出産の手助けに行くという大義名分もできました。職場の了解を得て5月27日の航空券を予約しました。

コロナ禍の成田空港の出発ロビーは閑散として人影も少なく華やかな雰囲気は全くありません。エールフランスの機内では終始マスク着用を求められました。これまでヨーロッパへの飛行はたいくつなシベリア経由でしたが、今回ロシア上空は飛行できません。まずソウルから北京に向かいます。両都市とも超高層マンションが立ち並んでいて、まるで墓場のように見えました。中国上空をひたすら西に向かい中央アジアに入ります。眼下の大きな海は初めて見るカスピ海です。雪の山岳地帯は人跡未踏の美しさでした。そのまま西北に進路をとればパリに一直線ですがウクライナは戦下です。飛行機は南西に進路を変え黒海南岸、トルコ北岸を西に進みます。北イタリアを通過してアルプスを越えると目的のフランスです。突然山波が途切れ見渡すばかりの緑の畑が広がりました。来たぞーと心の中で叫びました。空港には義理の息子が出迎えてくれており、パリ隣接のブローニュのマンションへ。ドキドキしながらドアをそっと開けると、2歳11か月になった孫が満面の笑顔で走って飛びついてきてくれました。この瞬間のためにコロナ禍に無理をしてはるばるやってきたのです。私達のことを忘れていないどころか、自分にとって大切な人として覚えてくれていた。妻と顔を見あわせてよかったねーと喜び合いました。

臨月にもかかわらず出産までの短い期間、娘があちこち案内してくれました。自動車会社勤務とはいえ、駐車不可能と思われる狭いスペースに車をねじこむ能力はさすがパリジエヌです。写真はモネが住んでいたジベルニーの庭園です。後方の居宅の室内はアトリエ以外すべての壁に浮世絵がところ狭しと飾られています。反対側には睡蓮の絵で有名な日本庭園があり、観光客の行列ができています。



娘達の住居の近くにあるアルベール・カーン（日本びいきの銀行家でロシア戦争の際日本に借款を用立ててくれました）の博物館と庭園もお勧めです。隈研吾が設計した博物館ではカーンと大隈重信が一緒に動画が見られます。カーン自身が造った日本庭園は秀逸です。茶室はなんと裏千家が寄贈したもので、日本の最高の庭園にひけをとらない出来栄えだと思います。すれ違ったフランス人が、尊敬のまなざしであいさつしてくれたので誇らしかったです。パリ市中ルーブル美術館近くにある昔の商品取引所は、安藤忠雄によって現代美術館に改装され、昨年オープンしました。息子の友達の日本人シェフ

のレストラン「ビストロ S」や「Aux Plumes」も地元の人達に支持され、にぎわっていました。下諏訪の惣菜店の息子さんのシェフの Restrant Kei は三ツ星を獲得しています。フランスに行くといつも感じるのですが日本に対して敬愛の念を持った国だと思います。ジャポニズムや印象派からの流れではないでしょうか。

今回一番楽しかったのは近所のマルシェでした。肉屋、魚屋、八百屋、乾物屋などが軒を連ね、新鮮な食材を大声でやり取りし活気に満ち溢れています。もちろんマスクは誰もつけていません。いろいろな食材を何度も買って帰り、巨大な牛タンを解体したり（外科医なので簡単です：乳癌の皮膚剥離と胃癌の血管廓清の手技が応用できます）。スズキをまるごとオーブンで焼いたり、食後は本場のチーズとワイン・キナリノを使ってジェームスボンドのレシピ通りのドライマティーニで仕上げ。あ〜〜〜幸せ！

6月初め私は一人で帰国しました。次男の出生はその3日後。残った妻は娘達一家を1か月間お世話してから帰国しました。私達二人とも無事やりとげた、という達成感と満足感で一杯です。コロナはこれからも続くと思います。皆様のご健康を心より願っております。いつかマスクを外して皆で大騒ぎしましょう。



## 「私の写真趣味」

1部 松木 敏博 (2023年8月30日)

秋になりました。各地から紅葉の便りが届いています。近所の庭の「コキア(ほうき草)」が赤く色づいて綺麗です。そういえば我々はコロナ禍の中で「古希」を迎えました。しょうもないダジャレで失礼しました。約70余年の人生の中で、趣味と言えは40~50歳代はジョギング、マラソンをして、「諏訪湖マラソン」も走っていましたが、50歳代後半から写真を撮ることが復活し、「趣味は？」と聞かれると「写真です」と言えるくらいになりました。

スタートは、大学に入学し同好会である「鉄道研究会」に入り、今風に言うと「撮り鉄」になったことです。その頃は、国鉄の近代化が進み、蒸汽機関車(SL)が終焉を迎えていました。北海道から九州の各地に出かけ、写真を撮りました。もちろん、白黒フィルムでの撮影が主です。



C62 機関車重連 (函館本線) 1971年7月

先輩から、写真と撮り方を教わり、色々聞きながら自分なりに構図を決め撮りました。今見ると、やはり未熟です。線路際を歩き、数少ない列車を待ち、構図を決め、連写はできないので、列車が狙った位置に来た瞬間にシャッターを切ります。その意味では獲物を狙うハンターの気分です。

卒業後は、鉄道、カメラとも離れた生活になり、結婚後は家族の写真を撮るくらいでした。転機は50歳代中頃、何10年振りかの「鉄道研究会」OB会があり、旧友と再会しました。多くのメンバーは、鉄道趣味を継続しており、写真を撮っていました。また、幸いなことにいくつかの路線でSLも運行されていました。私も再開しようと考え、早速一眼デジタルカメラを買い、年に数回は仲間と撮影に出かけるようになりました。宿泊時には飲み会も付もので、鉄道談義で楽しい時間を過ごすことができます。SLは昭和40年代で終わったと思っていました。しかし、この年になっても、追いかけることができるのは、多額の経費をかけてもSLを走らせてくれている鉄道会社のお陰です。感謝です。最近にはわか鉄道ファン??も沢山いて、マナーの悪さに古くからの鉄チャンは面白くないことに遭遇します。

写真を再開したそんな時、たまたま、平林重夫君(4部)の所属クラブの写真展があり、出かけて様々な話を聞き、誘われ、クラブに入会しました。分不相応の力量でしたが、先生か

ら指導を受け、仲間の皆さんから励まされ、教わり何とか付いて行き、苦しんだり楽しんだりしています。それぞれが、様々なジャンルの写真を撮っており、私のジャンルも鉄道以外のところに広がっています。また、近所の写真仲間もいて、時々撮影に出かけたり、写真展に行き刺激を受けています。もちろん一人で出かけることも多いです。

鉄道以外では、自然(白鳥・蝶など)、花火を撮りますが、数年はコロナ禍で遠くに出かけられなかったので、近場で写真を撮りました。また、コンテストもいくつか中止となり、目標が無くなることもありましたが、撮り溜め写真の整理を進めました。撮影には下調べが必要です(季節、場所、天候、時間帯 etc. )、どんな写真を撮ろうか思いめぐらしますので、頭も使いますし、人とのコミュニケーションも取りますので、ボケ防止になるのではないかと考えています。

写真は結局は「自己満足」の世界だと思いますが、人に「綺麗!、面白い、すごい etc.」などと言われると、嬉しくなり、励みになります。これからも、健康で、重い機材に負けないような体力を持ち、様々なところに出かけ、写真を撮りたいと思います。

### 【最近撮った写真】



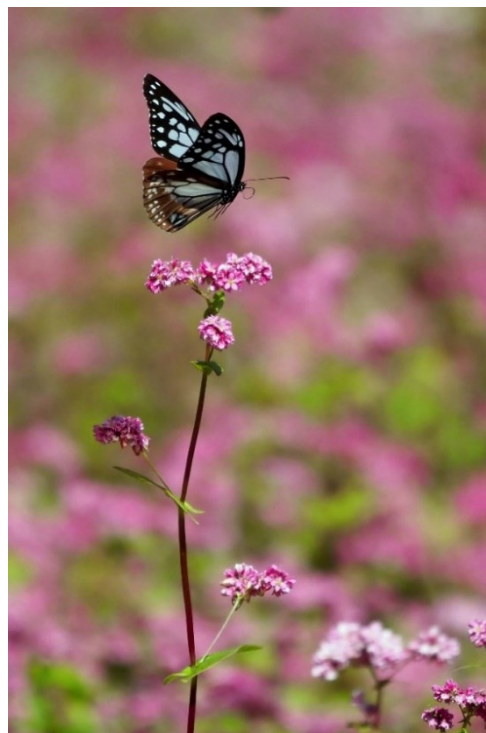
爆蒸気      2021年4月撮影  
2022年 二科会写真部 全国展入選



横断歩道      2023年3月撮影  
都電荒川線 (王子駅前)



植え直し 2018年5月撮影  
2,019年J A信州諏訪カレンダー-5・6月の写真に採用



赤ソバ畑に舞う (アキマダラ)  
2020年10月撮影  
(上伊那郡宮田村)



夜空の竹林 (諏訪湖の花火)  
2023年8月15日撮影  
(諏訪市四賀 上川の橋上から)

## 素晴らしい「早朝ウォーキング」

1部 宮坂 和生 (2020年10月28日)

今年から、私の日課の中に「早朝ウォーキング」なるものが出現しました。夜まだ明けきらぬ午前5時30分、妻と二人自宅を後に一路スポーツ公園を目指します。上川に架かる小さな「矢ヶ崎橋」を渡ればいよいよ公園です。公園に入ると一人・二人とウォーキング仲間との「おはよう」の挨拶もチラホラと……。何とも風情豊かなウッドチップの桜並木を抜け、太鼓橋を渡り、芝生広場を横切る頃には、朝の陽ざしも快く・・・相撲場、弓道場を横目に進むと野球場に到着します。野球場の外周道路を二週回り森の中の小路へ。ここでは毎日可愛い仲間が出迎えてくれます・・・日本リスの仲間たちです。何とも愛らしい姿は、心和む瞬間です。森を抜け陸上競技場から原爆平和の塔の横を進み、「公園大橋」を渡れば自宅への帰路です。午前6時20分自宅に戻り、延長4.5 km、歩行時間50分の「早朝ウォーキング」の終了です。

このウォーキングのそもそもの切っ掛けは、春からのコロナ禍の中、東京に住まいしている次女が三月の末、在宅勤務に成ったのを機に二ヶ月程帰省した際、妻と次女二人の始めたウォーキングに4月を機に私も参加することになったのでした。次女は二ヶ月程で帰りましたので、その後は妻と二人のウォーキングタイムとなりました。

以前から妻とは時々ではありましたが、毎月の通院での主治医の先生からのウォーキングの勧めで、日中短い距離を歩いていました。しかし「継続は力なり」の如く毎日続けることが結果に繋がる事だと一念発起し上述の参加に至り半年後の今日まで続いています。



結果は、79 kg あった体重が、何と74 kg に、お腹周りも減り前ボタンのかからなかったブレザーも余裕で着ることができ、毎月の血糖値の検査にも大きな改善が見られるようになりました。

何と素晴らしい「早朝ウォーキング」・・・今後も歩ける限り続けていくつもりです。なみの会の皆さんも「古希」を機に、この「早朝ウォーキング」を是非お勧めしたいと思います。

## 御柱祭に相応しい年明け(TV 番組出演3本)

1部 宮坂 和生 (2022年6月3日)

令和四年の幕開きは七年に一度の御柱祭に相応しい年の幕開きとなりました。元旦の木遣り生中継に始まり、地元地方局の御柱特番への出演そしてテレビ朝日系列「旅サラダ」への出演等立て続けに依頼が入り半月の間に私にとって実に貴重な体験が出来ました。収録の様子を含め体験談として投稿させていただきます。

先ずは元旦、地元ケーブルテレビによる年末年始の実況生中継番組で上社木落とし坂での木遣り披露があり真っ青に澄んだ空におんべが靡き素晴らしい鳴き初めの年明けとなりました。

1月11日には地元信越放送(SBC)局制作(系列キー局であるTBSでもBS放送で放映)の「ふるさと紀行」の収録があり、約半日の日程で行いました。この番組は一時間の諏訪大社上社・下社の御柱祭のガイド番組で私はSBCアナウンサーと共に御柱曳行路(仮置き場～木落とし坂～川越し場)をガイド案内する番組でした。標高1300mにある御柱の仮置き場は全面真っ白に覆われ小雪が舞い散る天候の中、整然と並ぶ8本の御柱の壮さに心踊らされ案内口調もスムーズに進み舞台は木落とし坂へ、雪は雨に変わり寒さで震えながら最大斜度27度の坂の頂上でガイド案内、そして最終の川越し場では宮川の土手に立ち案内後、御柱にかける想いを語り収録は終了しました。収録終了後アナウンサーとディレクターから「お話慣れていて聞きやすかったです」の一言が収録の疲れを吹き飛ばす一言でした。

1月17日にはテレビ朝日系列「旅サラダ」の収録がありました。今回のゲスト菊池桃子さんは学生時代から縄文時代のファンと言うことで縄文の聖地と呼ばれる諏訪地方を旅する出発地点を諏訪の聖地である諏訪大社上社本宮の参拝の設定で収録が決まったようです。この本宮のガイド案内を私が担当した次第です。



当日、菊池さんはAM9時発の「あずさ」でAM11時には上諏訪駅に着き一時間ほどメイク衣装の時間取りの後、諏訪湖が一望できる立石公園を出発するので本宮境内PM12時半に待ち合わせを確認、心躍らせながら待ち合わせ時間に行くと40分程待ちぼうけ、しかし菊池さんの到着と「お待たせしました菊池桃子です」の一言ですべて忘れるほどのもの言い53歳とは思えない我々世代には永遠のアイドルの登場でした。

収録が始まり菊池さんとのガイド案内は、月並みですが接し方・もの言い共に優しさが滲み出るようで「夢心地」の30分間でした。収録が終わり妻と3人での写真撮影にも快く応じてくれ最後に私から国宝土偶形の塩羊羹を

お土産に渡すと子供のように無邪気に喜んで受け取ってくれました。

因みに29日の「旅サラダ」放映では縄文への導入部分の設定で本当に短時間での出番だったのが若干残念でした。

最後に今年の御柱祭ですが残念ながら昨日（2月22日）上社・下社共、4月の山出し祭の曳行は人力では行わずトレーラーによる運送に決定しました。1200年以上続く御柱の歴史の中で初めての決定です。現在の蔓延防止等重点措置の解除と共にコロナ感染の終息を願い、5月の御柱里曳祭が相応に出来ることを祈るばかりです。



## 渾名(あだな)

1部 宮坂 美千博 (2023年9月11日)

コロナ禍の中、漱石を読み耽った。学生の頃、一度は読んだ漱石の小説の数々は記憶の中にぼんやりと残ってはいたが、読み返してみると流石に名作ぞろいと感心する。とりわけ「坊っちゃん」が面白い。四国の田舎の中学校に新任教師として赴いた「坊っちゃん」がいた。放題の生徒や個性豊かな教師の中で奮闘する滑稽かつ痛快な小説だ。教員生活をスタートさせた「坊っちゃん先生」はその反骨気質から、校長や教頭、同僚の教師に渾名をつけることにする。校長先生は「狸」。教頭はいつも赤いシャツを着ているから「赤シャツ」。画学の教師はその所作が太鼓持ちのようだから「野だいこ」。坊主頭で頑固そうな数学の教師には「山嵐」、そして顔色が悪く青白い英語の教師は、うらなりの唐茄子のごときだから「うらなり」といった具合である。さて、読みながら、何とも言えない懐かしさがこみあげてきた。そうなのである。小説「坊っちゃん」の情景はまさに清陵高校さながら、見事なまでにあの時代に重なる。今回、この投稿に何を書こうかと迷ったが、先生方の「渾名」とともにあの時代にワープしてみたくなった。先生方への畏敬と感謝の念を込めて。

まずはいわずもがなの「牛正」。その地学の授業の半分は雑談で占める。これが実に面白い。さしづめ「さだまさし」のコンサートのごとく、絶妙なトークで授業は進む。だから生徒からの人気が高かった。「牛正」のようにその名前に由来するものは多い。体育の矢島先生、下の名が壽雄だから「とっさん」。音楽の樋口先生は「桶(おけ)」、「千葉ちゃん」「阿部ちゃん」など、など。より身近に感じたものだ。

なかでも、物理の藤森先生、名前が「幹三」だから「かんぞう」と呼び捨てにしていた。その「かんぞう先生」が登壇するや、誰かがどこぞから拾ってきた空き缶を「カーン」と叩く。すかさず何人かが「ぞう～」とやる。「カーン」、「ぞう～」である。先生のその親しみやすい人柄ゆえの悪ふざけだったが、加わった一人として心よりその非礼を詫言いたい。

まだまだある。その容姿や行動に由来するもの。赤ら顔の化学の岡村先生は「赤鬼」。白衣姿を思い出す。同じく化学の大和先生は「キューピー」。そのクリっとした目で「おめえたち わかるか～？」が口癖だった。数学の今井先生は「チーター」。なにしろせかせか歩く。遠くで足音が聞こえたかと思うと、もう教壇に立っている。授業も恐ろしく早口である。あまり得意でなかった数学がますます苦手になったなどとは言うまい。

その口癖に由来するもの。社会の伊藤先生「○○だのう」の語尾から「のう氏」。倫理の菊池?先生「であるーん」と結ぶ。はて渾名はなんであったか。そして仕舞いは美術の「ぜっちゃん」。おでこの広い穏やかな先生だった。今ではその苗字も由来も思い出せない。

これらの「渾名」の数々は、いずれも我らの先輩から受け継がれてきた。実に見事に名付けたものだと思心する。この「渾名」は、教師と生徒の間の親近感を育み、日々互いの信頼に繋がっていくのに大いに役立ったと思っている。授業の風景、部活の指導、生徒に寄り添ってくれたこと。学校生活と恩師、誰もがその「渾名」とともに思い出す。

## 高校生科学コンテスト

2部 岩本 光正 (2019年10月6日)

20年ほど前より、縁があって国内の高校生が一年間かけて進める科学・技術に関する自由研究のコンテストの審査に関わっている。この国内科学コンテストの優秀者は、米国で開かれる世界大会に参加することができる。自分たちと同世代の高校生のレベルがどこにあり、何を考えているか肌で感じることができるから、国内外の科学コンテストへの挑戦は、高校生にとっては将来の大きな糧になると考える。コンテストの主な目的は、課題を見つけ、その課題にチャレンジし、さらにその先の展開について競うものである。自然科学や工学、ライフサイエンスなどテーマは様々あり、大学院生レベルどころかそれ以上に到達している研究作品を目にすることもしばしばである。高校生段階でも、“課題”がうまく見つければ、自ら学習して相当な研究をするということである。指導する先生のアイデアや指導が入りすぎではないかと思われる研究も多いが、自らの着想で“課題”を見つけ、高校や大学の先生や専門家に相談しながら進めたとわかる研究は好感が持たれる。私は、コンテスト審査に関わるまで、このような機会が高校生にあることさえ知らなかった。母校の後輩には、是非とも挑戦していただきたいと思う。最後に、米国では世界大会に参加した研究の“その先の展開”、いわば、パイオニア的研究を育てる仕組みが整っていることも付け加えたい。

### 追記 (2023年9月16日)

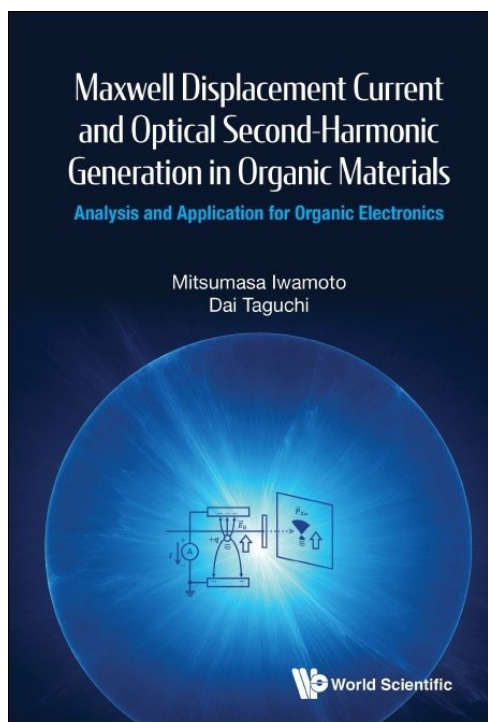
今年5月、米国ダラスで開かれた高校生科学コンテスト ISEF に、高校生・高専生科学技術チャレンジ (JSEC) から選ばれた8チームに同行した。3チームで4つの賞 (グランドアワード2賞、スペシャルアワード2賞) を受賞したことは喜ばしい。しかし、日本の高校生が、これらの賞で上位受賞を果たすための壁は非常に高い。勿論、それは、「英語」の壁ではない。ISEF で上位受賞を果たす作品は、イノベーションの芽となる独創性が高いものばかりだ。研究意欲に差があったと感じる。米国はじめ多くの国々の高校生は、ISEF での受賞が米国大学で学ぶ奨学金を確保する機会と捉え、さらにその先の起業を目指している。そうした国々には、若い頭脳から生まれるアイデアを伸ばす教育の仕組みがあるのだろう。一方、日本の高校生の意識は、目先の AO 入試による国内大学入学のレベルに留まっているかに見える。ISEF に参加した日本の高校生は世界の同世代の活動に大いに刺激を受けた模様だ。彼らの今後に期待したい。また、同時に日本では STEAM 教育の強化も必要だろう。



## コロナ禍の著作活動からの回想

2部 岩本 光正 (2023年8月31日)

コロナ禍のまとまった時間を使い、長年にわたり温めていた内容の著書を執筆した(2021年6月：表紙写真 下)。



題目：

有機材料のマックスウェル変位電流と光第2次高調波発生：有機エレクトロニクスのための解析と応用

著者：

岩本光正(東京工業大学 特任教授・名誉教授)  
田口 大(東京工業大学 助教)

出版社：World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd., Singapore

A4 512頁(本文 454頁) USD 158.00

出版 2021年6月

ISBN:978-981-123-695-2

私にとっては、新しい分野「有機分子エレクトロニクス」に挑戦した足跡の一冊となった。後進に伝えたいと考えて執筆したが、「伝承」だけに終わらないとよいがと思っている。この感覚は、人生の大半の時間を過ごした東工大で、「伝承と創造」の精神を叩き込まれたことに関係する。科学・技術の歴史は、先人たちの切り拓いた知の蓄積を礎にした創造と開拓の繰り返しである。つまり、伝承されたものから新しいものが創造される歴史である。だから、東工大の教えも、「創造と伝承」ではなく、「伝承と創造」の順序であった。本書を踏み台として、次の世代の人が新しいものを創造することを願っている。こうした思いをいただきながら執筆を進め、完成した。

私自身は、大学院時代に、国内で電気絶縁工学分野を先導していた日野太郎教授(故人)のもと、「熱刺激電流の考え方」を学んだ。本書は、「有機分子エレクトロニクス」という新しい分野の内容であるが、必然的にそのベースは、「伝承」に基づく大学院での学びにある。こうした背景のもと、本書は、誘電・絶縁材料物性の理解に最も重要な電子の動きを起源とする「マックスウェル変位電流(Maxwell Displacement Current)」についての説明から記述されている。本文が400ページを超えるものとなったが、こうした切り口での書籍はこ

れが初めてであると思う。

本書を理解するための基本は比較的簡単なことだと思う。その初歩的概念は、高校の物理の後半で習う静電気学にあるからである。正と負の電荷は引き合い、正と正あるいは負と負の電荷は反発するという話は、誰でもが知っている。加えて、そうした正や負電荷を起点として空間には電界があるという考え方を高校物理で習う。この本は、まさしく、この「電荷を起点とする電界がある」という意義を、分子膜レベルの材料物性の探究において、その電子挙動を問うなかで生まれた考え方や発見を記述したものだ。直感的に言えば、電子の大きさはあまりにも小さく見ることはできない。だから、これを直接追いかけるのは難しい。けれども、電子を起点として広がる電界の様子が変化する事実を通してなら見るることができるかもしれないというものだ。ここがポイントである。喩えれば、暗がりにいる人の存在を、気配から感じとるという発想である。

表紙写真のイメージ図は、電極間の材料内を電子が移動するとき、電子を取り囲んでいた電界の様子も同時に変化するため、閉回路中に電源が無いにも関わらず「マックスウェル変位電流」と呼ばれる電流が流れることを示している。つまり、電子の動きを、電流計の針の動きから知ることができる。また、電子の周りには電界が広がるので、その部分は電界の影響を受けるはずである。だからそこにレーザー光を照射すると、その様子は浮かび上がることを示している。つまり、レーザー光をあてると電界の大きさに応じた光第2次高調波 (SHG) 信号が電子の周りから現れるので、結果的に電子の動きが可視化されるということである。

実際の研究では、ナノメートルという極薄の単分子膜内や有機トランジスタ内の電子の動きなどを明らかにした。これらは、いずれも世界初の実験であって。Nature 誌にも掲載された。だが、重要なのは、研究のアイデアの発端は、高校物理で学ぶ静電気に関する話題にあるという点であろう。もちろん、学術的に深く理解しようとする、幅広いこれまでの学術の知見が欠かせない。だから、本書はそうしたもののエッセンス+ $\alpha$ の内容となっている。なお、国内外からこの研究の独創性は高いと判断していただだけ、研究活動は充実していた。優秀な研究者や学生が国内外から多数集まり、研究者として恵まれていたように思う。しかし、一般からは「何の役にたつ？」という問いもあると思う。実は、新しい電子材料や電子デバイスの中を電子が動く様子や電界の分布が直接わかるため、興味を持つ人は多く、企業や海外機関との共同研究をする機会も多くあった。だから、この研究が経済効果を生むことはなかったが、「少しばかりは何かの役に立てたかな」と思う。なお、共著者として、30歳年下の田口大君（私の研究室出身の助教、現在 東工大准教授）に加わってもらった。それは、この本を踏み台に全く新しい分野を切り拓いてもらいたいと考えていたからだ。

ところで、私は、本書執筆後も別の本の執筆をしている。Nature 論文がきっかけで、1992年より中国科学院理論物理研究所 欧陽鐘燦 (OuYang Zongcan) 教授と30年にわたり継続してきた内容の共著である。電子が起点となって電界が広がるのであれば、そこには電気エネルギーが蓄積される。やわらかい生体膜や分子膜ならばその影響を受けやすく、変形し最小エネルギーの状態で落ち着く。実際、脂質分子膜（厚さはナノメートルの場合、水面上

には、円形、三つ葉型、トーラス型、巴形、蛇型など規則性ある形状のドメイン（マイクロメートルの大きさの分子の凝集模様）が現れる。この謎を解き明かすのが中心テーマである。そこで、大学定年前には、毎年、12月あるいは1月頃に欧陽教授に私の研究室に滞在してもらい、約25年間にわたり研究を継続してきた。勿論、私も北京に頻繁に出かけ、そこで研究した。その間に20編以上の共著論文を出したが、これらが、現在執筆中の本の核になっている。欧陽教授は、30年前には、物理研究所の教授になったばかりの人であったが、いまは、中国を代表する液晶・生物物理学分野の著名な理論物理学者である。だが、私にとっては、長年にわたる単なる良き共同研究者である。今年の11月、私は、理論物理研究所の招聘に応じ、再び北京滞在をする予定である。共同研究で愛用している物理研究所構内にある物科賓館に宿泊し、最終原稿を討議するのを楽しみにしている。

## 大学での講義の回想：コロナ禍で思ったこと

2部 岩本 光正（2020年12月2日）

35年ほど前のことになってしまったが、大学で初めて講義を担当したときの記憶はいまだ鮮明である。先輩の教授から、「担当してもらおう講義は君の専門でないかもしれないが、基本的な事柄が多く、新任教員には勉強になる。教科書もある。」という説明を受けた。それなら躊躇することもないと、紹介された教科書に沿って講義を開始した。しかし、科学技術は日進月歩、教えるべき内容は古い教科書のままでよいはずもなかった。当時は、アナログからデジタルへと技術が大きく広がり、例えば、「時計のアナログ式がよいか、それともデジタル式がよいか」のようなことが話題になっていた。「電気計測」という名称の講義担当であったが、まさに技術の変革期の中、将来を担う技術者・研究者となる学生が学ぶべき内容は多く、少し整理が必要に思えた。しかし、私には、「電気計測とは何か」という学問の本質や全体像は少しも見えていなかった。そのうえ、教科書では見たこともない計測機器も頻繁に登場してくる。だから、講義前日になってようやくその基本動作原理のことを知ったということも頻発していた。こうした事情から、講義は心もとないもので、100名もの学生を前に、四苦八苦の日々であった。つまり、講義担当は確かに自分の勉強にはなったが、学生には少しのためにもならなかったと今でも思っている。それでも、この講義が社会に出てから一番役立ったという声を卒業生から聞いたこともあり、妙な気持になったこともある。勿論、その後は、自分の専門分野（有機エレクトロニクス）の核となる科目、すなわち、学部生向けには、「電気磁気学」、「量子論」、「半導体工学」、「磁性・誘電体物性工学」、大学院生向けには、「電気物性特論」、「先端電子材料」といった内容の講義を長期にわたり担当した。一言でいえば、自分の進めている研究を深めるのに役立ち、かつ、自分の専門であるがゆえに全体像を把握している講義科目の担当である。そのため、私としては、いろいろなことがあっても、自信をもって将来を担う学生向けに講義することができた。つまり、自分なりに講義を十分に楽しむことができたということである。しかし、これは教える側の論理

であって、学ぶ側の学生の講義に対する満足度は、私の期待とはかけ離れていたかもしれないと思う。十数年以上も前から、大学では、学生による講義評価が盛んに行われるようになった。その結果、学生の率直な反応を毎年知ることができるようになった。結果的に、どんな講義をすれば学生が満足し、教育効果も上がるかということに、私も少しばかりは関心を持たなければならなくなった。チョークを使つての講義から、手書きのOHP、カラーのOHP、さらに液晶プロジェクタ、パソコンを使った講義へと、その時代の道具やOA機器を使いながら、いろいろなことを試行した。また、10数年前からは、大学の国際化ということで、大学院の講義については英語講義に切り替えるという大学の方針にも積極的に参加した。しかしながら、私の講義についての学生の反応がよくなったという印象もなく、定年を迎えてしまった。そして、今でも不思議に思うのだが、熱弁をふるって気持ちよく予定通りの講義をすることができたと自己満足の状態で終わった年ほど、学生からの授業評価は意外にも低いものであった。どうやら、私が講義する場合には、適度に躓きながら、学生からの質問や疑問を誘うように行う方が教育効果は上がるようである。

ところで、私は、定年後、中国の清華大学にて、日本人（東工大生）と中国人（清華大学）の大学院生を相手に英語で講義をしている。「量子化学特論(Advanced Quantum Chemistry)」、「固体物理学特論(Advanced Solid State Physics)」という専門科目で、対面形式の講義をしている。そんなある日のこと、学生側より「講義を自分たちでもしてみたい。」との申し出があった。学生達は変なことを言い出すものだと思ったが、私としては通常の講義準備から解放されるため、もちろん大歓迎である。以来、学生に担当箇所を割り当て、その発表をしてもらった後、補足の講義を私が行い、ついで、皆で討論するという形式とした。いわゆる、「反転講義」と呼ばれる講義の取り組みである。これにより、講義での討論は活発となり、学生からのユニークな質問を聞く機会も増えた。つまり、学生が満足する講義になっているかもしれないという状況にたどりついた。

ところで、今年はコロナ禍となってしまった。結果、北京に出かけることはできない。そのため、今年の講義は東京と北京を結んでのリモート講義となってしまった。学生と対面で議論することができないのは残念である。通常は、海外を結んでリモートの会議を開くと、通信トラブルに悩まされる。ところが、現在では、東京—北京間でも驚くほど通信は安定している。これは世界的な通信技術革新の賜物であろう。そのため、海外を結んでのリモートの講義も進め次第で、学生が満足するようなものになるかもしれないと思うようになった。たとえば、反転講義の形式なら、討議は活発に行えることが分かった。ただし、学生がどのように感じているかは、対面でないのでまだよくわからない。いずれにしても、コロナ禍を契機として、大学での講義のあり方は勿論のこと、大学教員や大学自体の役割も大きく変わるように感じている。

## 「ストレス社会を乗り切るために見つけた海釣りという趣味」

2部 小池 忠男 (2020年10月29日)

高校教員現役時代、今から20数年前にストレスでつぶれそうになった事があった、そんな折に清陵の大先輩であり、高校バレーの神様のような先生から「海釣り用の船竿」を一本いただき、たまにはバレーや教育に関係のない潮の匂いを嗅いで海釣りでも楽しんでみたら…と助言された。小さいころ諏訪湖でフナやコイを竹竿で釣った経験はあったが海に出かけ、それも船に乗って魚を釣るなんて想像もできなかった。その年の正月は自宅のテレビで「釣りバカ日誌のビデオ」を子供達と必死で見て想像を膨らませたのを記憶している。

それから数年、自分の子供達からの海釣り指導もあり、新潟県上越付近の港から出ている遊漁船を何隻か予約して乗りました。漁船の船長たちは個性豊かな「因業おじさん」が多く、また釣船でのルールがそれぞれ違い、中々なじめない感覚の船が多く、海釣りシロートには厳しくもあり、上達する技術を教えてもらえなかったことを覚えています。数年後に出会った「大進丸の中村船長」は厳しい外見でしたがとても熱心に我が家の子供達も含めて海釣りの奥深さを伝授してくれました。相性がぴったりの船長に出会えたのが10数年前でした。それからは東京在中の「坂井明英くん」と共に年間7-8回は大進丸を予約して釣行を重ねました。

右の写真が2016年5月の「乗っ込み＝産卵時期」の大型マダイ＝6.3Kgの釣果写真です。釣り人生で一番大きなマダイですが水深15m位で

ヒットしましたが50m位まで逃げられ、必死に耐えながら10分以上もかかり釣りあげました。

もちろん家の台所には入りきらずに料理するのに大変でした。魚が釣れ出したころから女房に

言われ、釣り人は自分で釣った魚は自分でさばくものですよと強く指令が出てからは、自分で魚を

さばくまでに上達しました。今ではヒラメやキジハタソイ、オニカサゴ、ブリ、サワラ、イナダなどほとんどの魚

が釣れるようになり、またさばけるように上達しました。



中村船長：撮影

海釣りは中々奥が深く、仕掛けの手作りや針の元につける色のビーズやスパンコールなどを求めて手芸屋さんまで材料を調達に行きました。またその日の気温、水温、潮、波や風、水の濁りなどかなりの影響を受け、わずか数グラムの錘を付けたり、外したりするだけで大きな釣果の差が出てしまいます。経験と勘が重要になり、釣行日だけでなく前後に仕掛けを作り準備をしたり、反省をしたりが楽しみになり、日ごろのストレスがずいぶん緩和されてきました、それと同時に体重も増えてきました・・・(笑い?)。

9年前に高校教員を退職してからは大学の入試広報関係の仕事についていますが、釣り

のために一生懸命働いて稼いで、釣り道具や釣行費用に充てているのが最近の状況でした。2020年に入り、そろそろ仕事も終わりにして海釣り中心の残りの人生を展開しようかなと考えだしたところから「新型コロナ感染」が日本、いや世界中に蔓延しだし、ご多分に漏れずに新潟県の遊漁船組合もコロナ自粛に入り、しばらく釣りには行けない日々が続き、新たなるストレスに襲われていた矢先・・・9月10日に長年お世話になっていた「大進丸の中村船長」が急死した情報が流れてきました、前日の9日には元気に地元のお客を乗船させて海釣りに出て帰宅後、夜中に「脳幹出血」を起し帰らぬ人となったようです。コロナ自粛の暗い、重い雰囲気の中に年代的にもほとんど変わらぬ船長の死＝享年71歳は何か大事なものを失ったような悲しく、苦しい気持ちになり、人の人生のはかなさを痛感しました。日々腰が痛かったり、膝が痛かったり、夜は中々熟睡できず、2時間おきにトイレに起きてしまう現状です。1ヶ月後の10月下旬に勇気を絞って新潟県に飛び、久々の海釣りを兼ねながら、中村船長の自宅を探し、仏壇に線香をあげて手を合わせ、お別れをしてきました、ちょうど49日の前日ということで奥様と2人の娘さんが準備をしていました、その日の状況などを聞いてみたら船長の人柄があらためて理解できました。

これは弔問客への挨拶状と父親への感謝を込めた喪主及び娘さんからの感謝状の一部です。こんな素晴らしい物は初めて見ましたので簡潔に紹介します。

### 「いつもでも大好きな海と共に」

何よりも海を愛し、誰よりも潮風が似合う父でした。漁師の家に生まれ、幼い頃から海が身近だったのでしょう。航海士、漁師と職種は変わっても、父の仕事場はずっと目の前に広がる大海原でした。・・・忘れられないのは、家族をドライブに連れて行ってくれたこと。父らしく車ではなく船でのドライブでした。海の上から眺める景色がいつもと違って新鮮であったこと、何よりも船の上の父が、いつにも増して格好良かったことを覚えています。・・・大好きな海と共にあった人生。きっと楽しかったことでしょう。別れの時ですが、不思議と寂しい気持ちはありません。ただ伝えたいのは「お疲れ様でした」の言葉だけです。この言葉に感謝の思いを込めて最後の航海に出る背中に届けます。

(子供達より)

ピンピンコロリの典型のような逝き方、釣船のお客には一切迷惑をかけず、奥様にはさよならも言わず、娘さんたちから心より感謝されての旅立ちであったようです。

十数年の海釣りを通して素晴らしい人たちと出会いました。やはり人生は人との出会いと別れでできているような気がします。「人は財なり」とつくづく実感する別れとなりました。我々もいずれは旅立つ日がやってきます。そんな時に子供達から感謝され、奥様や周りの人たちに迷惑をかけずにPPKのような逝き方を願うのは自分だけでしょうか？

どこかでお前はそんな逝き方ができるわけないよ、さんざんこの世で悪さをして人に迷惑をかけて来たからな・・・と囁く声が聞こえてくるここ2カ月です。 (完)

## 長男・岳太の北京冬季パラリンピック

2部 小池 忠男 (2022年3月16日)

障害者のスポーツの祭典である「パラリンピック」に長男「小池岳太」がイタリアのトリノ大会以来、バンクーバー、ソチ、平昌、北京と5大会連続で出させていただきました。この場を借りてご支援や応援をいただいている方々に深く感謝申し上げます。

岳太は体育教師・サッカー選手を目指して進んだ日本体育大学1年生の2002年10月に交通事故に遭い、九死に一生を得ましたが、左腕片麻痺(=脊髄の中で腕への神経が全て断裂)で身体障害者になってしまいました。命だけは奪われずに生還した彼を見て、我が夫婦は「生きているだけでありがたい、このいただいた命を生かし、彼には好きな人生を歩ませたい」と思いました。おかげさまで大学において様々な人々との出会いをいただき、更にパラリンピックの冬の競技である「障害者アルペンスキー」に出会うことができました。

2006年イタリア・トリノ、2010年カナダ・バンクーバー、2014年ロシア・ソチ、2018年韓国・平昌と全て家族で応援に行かせてもらうことができましたが、北京だけはテレビの画面越しの応援となりました。斜度40度近くの急斜面を滑走スピード120km/時速で滑り降りるという場면을涙ながらに観戦し、生きていること、目標に向かって突き進む人間の力の素晴らしさなどを改めて教えてもらう尊い経験もさせていただきました。

「人は財なり」「失われたものを数えるな、残されたものをいかせ」 と長男から今、教わっている70歳の私です。

2022 北京パラリンピックにて



4年に1回の障害者のスポーツの大会は障害者自身のパフォーマンスを発表する大切な、また一番大きな発表の場所（＝ステージ）でもあります。が、本番のパラリンピック日本代表に選出されるまでの「4年間」は本当に苦労と努力の繰り返しであり、毎回、毎回、とても苦しんでいました。

今回の北京パラリンピックは前年の「東京パラリンピックの自転車競技での出場」を目指して平昌パラ後の2018年4月から怒涛の如くの挑戦が始まり、伊豆への住所変更、新たな競技用自転車の購入、そして合宿参加、自費での国際大会参加と身体、財力共にギリギリの挑戦をしていました。しかし、夢も努力もかなわず、最終予選へのスタートラインに立てませんでした。東京パラ出場の道が断たれるという本人にとって最大の「挫折」を経験しました。心身共にずたずたな状況で原村に戻り、残雪の地元のスキー場で1人スキーをし、畑の石拾いや草取りをしながら「心」を癒していた頃に再び「障害者アルペンスキー」に復帰しないかとの誘いを受けました。水を得た魚の如く、原点である「大好きなスキー」に再び挑戦する時間が始まりました。

人生というものは自分の思うようには本当にいかないというのを感じたのが2020年春頃から世界中で始まった「新型コロナウイルスの流行」でした。そんな中でも自分の今できる努力をと考え、岡谷の自宅で個人トレーニングに励み、仕事はリモートワークでこなし、第1波、第2波の緊急事態宣言を乗り越え、苦しみながらも必死に努力している姿に感動しました。

2015 サンモリッツワールドカップにて（＝少し古い写真です）





2021年10月末より、約3ヵ月半の海外遠征にも挑戦し、スイス、オーストリアで立位の選手とスタッフでアパート暮らしをし（もちろん自費で）、1月、ノルウェーでのパラアルペンスキー世界選手権に出場して成績を出して、やっと日本代表の選手として選出されたのが現実です。

どの国の選手もこの異常な「コロナ禍」の中で大会参加や合宿、遠征等を拒まれ、練習不足、トレーニング不足、大会参加経験不足と今までに経験のない未曾有の状況で迎えたのが北京パラリンピックだろうと正直思います。そこへ追い打ちをかける「ロシアのウクライナへの侵攻」、このプーチンの異常な侵攻の中で北京パラはスタートし、さらに北京オリンピックでも健常のスキーヤーが苦しんだ中国・延慶の人工雪の難コースとあって、本当に選手は身体も心も苦しみながら毎日、毎種目に自分自身ができる「最大のパフォーマンス」をしようと急斜面に「立ち向かう姿勢」と「挑戦する気迫」を前面に出していて沢山の感動をいただきました。

皆さんもご存じのように、パラリンピックでは1人1人の障害の程度に応じて係数というものが与えられています。例えば長野県出身の「三澤 拓君」は92%、岳太は100%です。これは、障害の差が異なる選手間の公平を期すためにIPCが決定しております。現実、岳太は100秒=100秒 拓君は100秒=92秒ということになるのです。1秒の進み方が係数の少ないほど「遅い」のです。今回の北京パラリンピックではどのカテゴリーでも障害係数が100%の選手は誰1人もメダル（金、銀、銅）に絡むことができませんでした。やはり競技ですので、どの選手も「メダル」を目指すのが当たり前ですが、この係数のシステムを理解した段階で「障害者1人1人」が「自分に残された機能を最大限に生かして臨んでいるか」が最大の見所です。そして最後まで「あきらめない心」をぶつけているかも見所です。

私達健常者も本当に自分自身の能力を最大限生かして、人生に挑戦してきたか、そしてこれからも挑戦していくかを自分に問いたら、「うーん」となるのが今の正直な私の気持ちです、本当に日々挑戦している「長男」をみて感動している今の気持ちが本音であり、それを支えてくれている地元の方々や企業の方々、日体大の方々に深く、深く感謝申し上げます。

## 目土袋

2部 高橋 和成 (2023年9月22日)

皆さんは目土袋（めつちぶくろ）をご存じですか。ゴルフコース上のディボット（芝を削り取ってしまった部分）に、袋に入っている目土（土）を入れて、足で軽く踏んで均し補修するために使います。袋に入れる土は、だいたいティーグラウンドの近くに設置されています。目土はただの土と芝の種を混ぜたものの2種類あります。

そもそも私がゴルフを始めたきっかけは半世紀前に遡ります。当時の職場の上司から「これからの若い者はゴルフくらいできないとダメだ」と言われ、職場の近くにあったゴルフ練習場に連れて行かれ、5番アイアン1本をレンタルし、隣の打席で黙々とショットしている方の後ろ姿を見よう見まねでクラブを振ってみたことです。

本来であれば練習場へ頻繁に通えば良かったのですが、その当時は仕事・子育て・農作業等に追われ、それが叶わず、年に1・2回の職場のコンペに、ぶっつけ本番で参加していました。

練習も丁度にしなないので上手くなる筈がありません。あるゴルフ場へ行ったとき、そのキャディーさんから「お客さん、もう少し練習を積んでからお越しください」と言われた程です。

そうこうして時は過ぎ、定年退職を間近に控えた平成24年1月。退職後のことを考え、このまま老け込むわけにもいかないし、さりとて活かせるような趣味も持たない私。健康で長続きできるものはないかと考えたときに、一人でもできるゴルフ（実際は2・3人の仲間が必要ですが）をもう少し極めてみようかと思い、奮起して自宅から5キロ程離れたインドアゴルフレッスン場の門をたたきました。以来、週に1・2回の頻度で通うようになり、某カントリークラブの会員権も取得し、月に2回ほど気心の知れた現役時代の職場の同僚とプレーを楽しむようになりました。

練習の回数ほどスコアは良くなりませんが、どうにか人様に迷惑をかけない程度にラウンドできるようにはなりました。

つい先日、ティーチングプロが主催するゴルフスクールの「夏祭り感謝祭」が久しぶりに開催され、60人近くが参加しました。その時、出された参加賞が目土袋でした。プロ曰く「黙々と当たり前のように修復作業をしている姿は、後ろから見ても、ずっと、スマートに見えますよ」と。キャディーさんが帯同しているころは、キャディーさんが目土をしてくれることが多かったのですが、この頃は、キャディーさんがつかないセルフプレーが主体になってきました。目土袋はカートの後方に用意されていて、セルフプレーの時はこれを利用して、自分のディボットマークを修復していましたが、1台のカートには1個しか用意されていないのが現状です。この1個を使い回しすることになるのですが、コースに出ればプレーヤーの位置はバラバラ。結果、最初の2・3ホールこそ真面目に使い回ししていても、途中から、つい、手を抜いてしまうこともありました。そこで参加賞でも

らった自分専用のマイ目土袋です。手元があれば大ダフリしても、すぐに修復が可能です。

これからラウンドする時には必ず持参し、地球に優しいゴルフを心掛け、きっといつの日か近い将来、子どもと孫の三世代でプレーできることを楽しみに、さらにはゴルファーの夢であるエージシュート（ゴルフ1ラウンドにおいてプレーヤー自身の年齢と同じ、もしくは年齢以下のスコアで18ホールを回りきること）を目標に、「人生100年時代」を見据え、長生きしていきたいと思う今日この頃です。



## 中老年において覚醒は与えられるか

2部 長瀬 潔 (2023年9月9日)

老年などという自覚はないととぼけてみても、71を過ぎたことは生物学的に否定しようもない。

後輩たちが、子供たちが、社会の前線で頑張っている。

また時折、目に・耳に・手足に・記憶力に、かつて知覚しなかったような違和感を感じその衰えを自分に、知らず言い聞かせてしまう。

身体的に・意識の上でかかる自覚を背負わされてみると、人との関係に於ける現在の自分の立ち位置またこれからの役割(使命)について、立ち止まって考えてみようかと思わざるを得ない。

現状(満足感・課題・処理できぬこと・惨状)を認め受け取り直すこともなかなか難しい。その中には、優先順位をつけ実行計画を具体化できる事柄もある。

しかし挫折感・諦め・後悔・やり直せたならという儚いまた身勝手な思いにも囚われてしまう自分を見出し、手に負えないという圧迫感に直面させられて愕然とすることも現実ではある。

世の中には、十全な達成感のうちに余生を過ごせると自認できる人もいるのかもしれないが。しかしそんな人でも、自分の人生の終わりも意識せざるを得なくなってくると、死の断絶の前で確信と平安を持ちうる根拠は何なのだろうと問い直すこともあるのではないか。心の内に居座る重い石の中でも、後悔の念はとりわけ厄介だと感ずる。特に対人関係に於いては。相手が存命ならまだしもだが。

中老年期は、気づかずにいた・あるいはふたをしてしまっていた自らの心を探られ、上記のような心の傷を自覚する時であり、それに向き合うべき時だと感じさせられる。

かかる傷を自ら癒し解放されることは極めて困難ではないか。このわたしの取り除きたい傷を受け止め解決してわたしを生まれ変わらせてくれる存在は、この時空に存在しないのだろうかとの心の叫びに気づくに至るかもしれない。

もう1つ、中老年期が突き付けてくるもの。これまでのわたしの人生を背負いつつ今後わたしが最終目標とすべきことは果たして何なのか。自分の人生の本来の目的とは何だったのかという、人生を締めくくる前の最後で最大で本質的な自問。

しかしそのような気づきに向き合われることは、実は人生におけるぜひとも得たい幸いの1つだと信ずる。

老化による肉体的・精神的課題や、徐々にピントが合ってくるように感ずる死の概念との時折の対峙という、外発的なものから転機が与えられることは多いだろう。

だがしかし、究極的には自己の内面を探られ解決されるべきことに解決が与えられていく経験をするのでなければ、真の方向転換を生きていくことは難しいのではないだろうか。

しかも精神的・霊的な自分の核心を探られることは、個の内に留まらせず、永遠という地平

の視点を与えてくれる場合がある。

その時こそ、それまでの自分の人生の 2 次元の地平から立ち上がって、別次元の方向転換へと向かわせられる可能性が現れてくるのではないか。

大東亜戦争敗戦後の仏領インドシナにおいて習慣となり、その後の生涯絶えずズボンのポケットに新約聖書を入れて持ち歩き暇さえあれば夢中で聖書を読み続けていた父は、肝臓がんの手術を 3 回受けながら、自分には時間がない、自分は死ぬ準備をせねばならないと言っていた。(それは、主イエスキリストを信ずる自分は永遠に生きる者だとの信仰を、死に相対していよいよ強められて行くことだった)

世の中、準備の意識を持つ間もなく突如として死に飲み込まれることもありうる。

それでも、自分は自分に固有の人生を生き抜いた故何の思い残すこともない、死に際して何のしがらみも感じないしいささかの不安もない、と言い切れる人がどれだけいるのだろう。わたしも今、中老年に際しての覚醒と転機を得たい、与えられたい。

その願いと祈りを持ちつつ聖書を通して、神様がイエスキリストによって用意して下さった自己独自性を受け取りたい。そして三位一体の神様を求め・交わりを持ち・日々踏み出す道がみ心に適うかどうかを神様にお尋ねしつつ、これからの毎日を送らせていただきたいと願い祈っている。(それはよろけもする歩みではあるが、共に歩み手を取って人格的な交わりを持ってくださる方がおられる)

また神様の恵みの計り知れぬ広さを更に知らされ、心からなる感謝を深められて行きたい。これらは、知識や言論ではない。日常における反復であり永遠につながる足跡となる。最後に、とりあえず 3 つの分かれ道に目を向けたい。(その道は先の方で交わるかもしれない)

いつの世にあっても、肉体の死によって終止符を打たれるものがある。それまでの人生におけるビジョン・奮闘努力・喜び・希望・失望という次元においてだが、それらを可能にしてきた自分の主体性そのものが根こそぎ奪われ消滅させられること。

あるいは死後肉体を越えて別次元が存在するという希望に生きる人もあろうか。

はたまた、人生行路の諸段階の只中で、別次元(今を生きながら永遠を土台に持つ)への転機を与えられ新たな自己独自性を受け取って生かされていく、ということは可能とされうるのか。

わが中老年の好機にあって、永遠につながる天窓を見上げそれを開かれていきたい。

## 大学でのこと

2部 原 大 (2023年9月30日)

今年(令和5年)の8月で満72歳となった。思えば本当に遠くに来たものだ、と思う。卒後50年記念誌で、自身の清陵生としての生き様を、大学に入学して突き動かされるような衝動で体育会の漕艇部に入部したところまでを記した。今回は大学でのこと、及びそれをジャンピングボードとして凡そ45年を職業人として生き抜いた中でのことを記しておこうと思う。この先より遠くに行くに従い、既に相当弱まった記憶力が一層減退して行くことは自明であり、往時茫茫となる前に、己の備忘録の一つとしたい思いからである。

浪人生活を終えて大学に入学すると同時に、村の地縁で借りていた東武練馬の3畳の下宿を飛び出し、既に故人となってしまった5部の武井孝博君の阿佐ヶ谷のアパートで同居を始めた。夏の午後真西に向いた3畳間は地獄のような暑さで、窓から林に囲まれた大きな屋敷を遠望しては、黒沢明監督の映画『天国と地獄』のようだと自嘲し、大学に入ったら何としてもこの下宿を出なければならぬと思っていた。

大学では学生運動と言うよりセクト間の闘争が激しさを増しつつあった。学内で一人学生が殺されたことをきっかけに、凄惨な内ゲバが学内で頻発し、時々大学の周囲に常駐していた機動隊が催涙弾を発射しながら突入して来た。よって全学連時代に醸されていた社会改革的な学生運動の魅力は全く感じられず、五月病を経て自己改革の欲求が居ても立っても居られない程に昂じ、最大限厳しい環境に自身を追い込みたく、6月に体育会漕艇部に入部した。前年の三島由紀夫氏の事件の衝撃が尾を引いていた。

学業との両立を目指し自らを厳しい環境に追い込んだのだが、確かに心身共に厳しく鍛えられ社会に出てからその恩恵をこうむったことは間違いないが、人間の弱さを思い知る結果ともなった。入学時、一年間授業料が免除になる大隈奨学金の対象になった、と大学から実家に通知があり、両親を大いに喜ばせた。しかしその後はボートに没頭してギリギリで卒業するような状態となり、大学院まで進めさせたかった父親を大いに落胆させることとなった。すまない!オヤジ。

早稲田大学漕艇部に入部して最初に衝撃を受けた事は、監督も数名のコーチもオリンピック選手であったことである。諏訪の田舎で育ったポット出の若者にとって、それまで見たことのある最高のアスリートといえば、せいぜい国体選手であり、それも極めて遠い存在で会うことも稀であった。それがいきなりオリンピック選手!何か日本のど真ん中の世界に飛び込んでしまった感じがした。大学入学は昭和46年であり、昭和39年の東京オリンピックから7年経過したばかりだったのだ。そのオリンピックに早稲田大学漕艇部の現役選手が9名出場しており、卒業後数年を経て監督、コーチとなっていたのである。なるほど練習が辛かった訳である。オリンピック仕込みの練習メニューで鍛えられていたのだ。

1年生の頃は練習の辛さもあり、何を好んで年間300日も合宿しているような学生生活（そんなことで武井君との同居生活は1年と持たず解消していた）を送ろうとしているのか、最終的に残った8名の同期とよく愚痴っていたが、しかし精神・肉体を鍛錬することで、いずれ社会の役に立てるはず、という確信めいたものもあった。この辺の事情を、それから半世紀近く経った2018年11月29日付けの日経新聞の最終面のコラム『交遊抄』（添付の写真）に記した。37年勤務した銀行を辞して総合商社の経営の一端を担っていた頃で、大学の漕艇部のOB会長の指名を受けた頃である。コラムには記していないが同期の飯田は朝日新聞の会長を経て顧問になっていた。

3年生の秋、主将の指名を受けた。大先輩達からは1位でなければ、2位も3位も他は一緒と言われていた時代。大学の名誉の重圧に押し潰されそうになったが、勝つためには圧倒的な体力と漕力をつけるしかなく、そのためには圧倒的な練習量が不可欠と結論して、年間合宿制を宣言し実行した。

4年生の6月にオリンピックの中間年として世界選手権にエイトが派遣されることになり、代表選考レースがフォアで行われた。結果は社会人クルーが1位、2位で早稲田が3位。見事学生No.1とはなったが、派遣には漏れた。この年の8月に全日本選手権から学生選手権が分離されることとなり、第一回インカレが開催された。学生No.1となったフォアのメンバーを中心に組成したエイトで優勝を狙い、順調に勝ち進んで準決勝の通過タイムは1位であった。その他の種目も好成績で勝ち進み、第一回大会のエイト優勝に加え総合優勝も視野に入ってきていた。大会最終日の午後から各種目の決勝が行われるので、満を持していた昼ごろ、事故が起きた。スタートが出来ないので全決勝を中止とする発表があり、2000メートル先にあるスタート地点に駆けつけると啞然とした。2、3日前に埼玉県西部を通過した台風の影響で戸田コースに隣接している荒川が増水し、スタート地点にある取水口が決壊し、無数の流木がスタートから500メートル付近まで流れこんでいた。

第一回インカレの決勝を中止と決定した日本漕艇協会に対し、各校から延期にして欲しいと申し入れたが聞き入れられず、これに有力校の4年生達が大反発し、10月に予定されていた全日本選手権を示し合わせてボイコットしようということになった。コースの復旧に要する時間と全日本選手権の日程との兼ね合いで、漕艇協会としては中止せざるを得なかったであろうが、最終学年の4年生にとってみれば自分たちの命を懸けた努力が余りにも軽く扱われたと思ったのだ。事実他ならぬ自分もその怒りと虚脱感からなかなか抜け出せなかった一人だった。世の中には自分の努力だけではどうにもならない不運が起こることがあり、その事実をどう受け止め、どう対処すべきか、大いに悩んだ。有力校の4年生の多くが全日本を待たずに引退し、我が早稲田の同期の有力選手2名も艇庫に戻ってこなかった。

今年9月、第50回インカレが戸田コースで開催された。過去のレース結果が記載されている開催プログラムの1974年第一回の欄には「荒天のため決勝中止」と記されている。

る。半世紀経った今でも思い起こすと無念さに胸が疼くが、半世紀たった今自分が大会役員、日本ローイング協会（旧日本漕艇協会）理事として記載されているのを見ると、なんとも感無量としか言いようがない。

この後、45年に亘る職業人としてのこととして、未曾有の金融危機による二度の大合併や反社勢力との命がけの対峙など、波乱万丈な銀行員としてのこと。その後30か国以上を飛び回った商社マンとしてのこと。それらを記しておこうと思ったが、とても紙数が足りない。幸いにも今、社外役員をしている会社から、取締役・執行役員研修において、経営者としての軸や意思決定力について講話をして欲しいと依頼されている。この機に45年の経験を纏めて講話に備えるとともに、この備忘録に加えておこうと思う。

日本経済新聞 2018年(平成30年)11月29日(木曜日)

交遊抄

### 洗面器の餅 原 大

1971年に早稲田大学漕艇部に入ったのは20人ほどいたが、夏休み明け初日の練習に来たのは8人だけだった。ボートの練習はきつい。実はこの日、私も辞めると言いに行ったのだが、練習が始まってしまいいり出せなかったのが本当のところだ。

年が明けて1月15日。私を含め1浪で入った数人は成人の日を迎えたが、当然のように練習があり式典など出られない。仲間内で祝おうと、関田滋君のアパートに集まった。正月の残りの餅を手鍋でゆでて、食器代わりの洗面器に入れ替でつづいた。

なぜつらい練習に耐えるのか。誰からももなく議論になった。もちろん勝つためだがそれだけではない。精神・肉体を鍛錬することで、いざ社会の役に立てる――。

そう思い至った。4年生のとき私は主将となり、関田君は女房役の主務として部を支えてくれた。猛練習に耐え、世界選手権派遣決定レースで学生1位になれたのは、同じ釜の飯ならぬ洗面器の餅をつつき、学生スポーツの本質を議論したからだと思う。

私が三和銀行、関田君が日本郵船へ進んだ後も交流は続き、もつすぐ知り合って半世紀。学生スポーツの不祥事を聞くたび、精神・肉体の鍛錬という本質を見失っているのではないかと当時の仲間と話す。若い選手に社会に貢献するという本来の意義を伝えたい。(はら・たかし 双日副会長)



## 「なみの会」メンバーとの縁(えにし)

2部 藤森 英幸（トリ：2020年9月20日）

### 近況報告

本年5月28日よりJA信州諏訪の監事の職に就いています。43名の役員の中に津金敏三員外監事、五味亮寛理事と私がいます。津金監事とは監事監査・監事会を通じて意思疎通を図っており、3人は必ず月1回の定例理事会では顔を合わせています。時になみの会の情報も発信しています。



なみの会の幹事（会計担当）として清陵高校卒業後〇年、還暦等時期を捉えて集まる機会を設けてきました。

幹事会のなかではお酒の量が増えるにつれ「あの人は知っているか」「あいつはどういう人か」「あいつを紹介してくれ」と知人紹介の場がありました。

その場の話を聞くに諸幹事の人付き合いの広さには驚きがありました。

幹事各人それぞれの勤務した会社・職場、経験した地区役員・地域活動、現在の趣味等を通じ、10人の幹事との人間関係が気付いていることに喜びを感じます。現在そのこと

が各人の財産となり人生を形成していると思われま

である調にて

J Aのなかにおいてなみの会の幹事の名前を言えば「知っている」となる。

また「お世話になっている」という言葉が返ってくる。逆に私に「〇さんは、藤森監事と知り合いだそうですね」と尋ねてくる。情報共有の場が与えられている。この「縁」がなみの会に属することを誇りと思う場である。

今J A・地区等の役員を13件行っているが、今後は少なくなっていくと思うが、J Aの監事は自ら勤めた職場の集大成と思っている。

しばらくJ A事業に貢献したいと思う。皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

最後にJ Aへ提出した私の「所信」を添付します。

## 所 信

この度、諏訪・諏訪西山区役員推薦会議において、信州諏訪農業協同組合の監事候補者として推薦されました。

就任決定された後は、J Aの3ヵ年計画の全体目標・自己改革目標の達成に対する進捗状況を直視してまいります。

外部監査であります監事による監査は理事の職務の執行について監査することにより、内部監査と連携をはかりながらJ Aの定款・諸規程等に則り業務遂行されているか自ら知識習得を行うなかその職責を全うしたいと思います。

また三様監査（内部監査・会計監査人監査・監事監査）の実施により不祥事未然防止・抑制に努めます。

J A内の常識が一般から見ると非常識ということの無いよう監視したいと思います。

「私たちは、食と農を守り組合員と地域に愛されるJ Aをめざします」というJ A目標に対してその実行に向けての具体策またその進捗について監査を行い、計画と実践との相違原因を追究しながら地域・地区に必要とされるJ Aづくりを共に目指します。

住 所 諏訪市大字湖南4218番地の4

氏 名 藤 森 英 幸

## 古希の心構え

2部 山田 雄一 (2023年9月30日)

56歳のある朝、胃の激痛で飛び起き、「ピロリ菌に伴う悪性リンパ腫」と診断された。病名に怖れおののき、親しい医師に電話した。すると、即座に「治る病気だから落ち着け」と言われた。この病気は部位の違いなどで深刻さが異なるらしい。大きな仕事を抱えていたので入院せずに仕事を続けられ、数カ月の投薬療法で快復できたのはありがたかった。

60歳の新聞社定年退職で心機一転、シニア契約記者を希望して飯田市に移り住む。「元気な60代に」と自分に言い聞かせて、県内を駆け巡った。67歳のとき、夏の甲子園の第100回記念大会取材を区切りに、44年間の新聞社勤めを2018年12月に終えた。

49年ぶりに岡谷へ舞い戻り、縁あって松本大学で非常勤講師(スポーツメディア論)をしていた2020年に人間ドックで胃がんが見つかる。基幹病院から届いた1枚の通知で宣告されたのには驚いた。「来院を」と促してもらって担当医から聴く方が心の準備はできたと思うのだが、がんの告知も最近は簡素化され、手間を省いているようだ。

幸い、「ステージ1」の早期がんで、内視鏡による簡便な手術で済んだ。折からのコロナ禍で院内感染にピリピリする中、絶食と重湯の食事で1週間。5キロ減で退院した。

この胃がん手術は、いろいろな点で物の考え方を変えることにつながった。

まずは体に気を遣うようになった。手術で出来た傷跡の快復に手間取り、当面、激しい運動は避けざるを得なかったこともあり、なかなか以前のように動けないのがもどかしい。胃を冷やすのはよくないと言われ、焼酎はお湯割りが定番となった。そもそも、あれほど好きだった酒の量が減り、なぜか飲まないでいられる日が増えた。

コロナ禍が続く翌2021年5月、70歳になった。術後、定期的に受けている胃カメラで「問題なし」が続いていた。体の動きもだいぶ復活してきている。古希にあたり、これからの過ごし方を考えた。そして、決める。「元気な70代に」である。

60歳の時の焼き直しみたいだが、新たな10年間も「元気でいたい」と強く思えた。サンプルだけど、この心構えがじっくり来るのだ。

松本大学にお世話になったのは親しい友人の推薦があったからで、これは70歳定年のため3年間で幕となったが、2021年7月からは別の方が諏訪市に本社を置く地域紙「長野日報」に働きかけてくださったおかげで、コラム「語ろうスポーツ」を担当させてもらっている。新聞社で長年、スポーツ報道に携わってきた経験を生かして「自由に書いてください」というありがたい言葉が身に染みた。初回はちょうど高校野球の夏の長野大会開幕のタイミングであり、この歳でも記事を書く機会を与えていただいたことに感謝の気持ちを込めて、「この夏、白球を追う高校球児に似通う感慨と緊張がある」と記した。

コラムは隔週の金曜日に掲載され、すでに65本を数えた。地域に密着した話題から長野

県内、さらに国内、そして世界レベルにもテーマを広げる。野球記者の期間が長く、どうしても偏りがちになるが、なるべく視野を広げて未知の分野にもトライしていきたい。新たな学習の機会であり、フレイル予防の一助にもつながるのではないかと考えている。

諏訪・上伊那の販売エリア外に住む知人・友人からの「読みたい」という希望も増え、掲載のたびに180人ほどにメール送りしている。その方たちの配慮で転送が各地で始まり、どうやら1000人を越える方に届いているらしい。これはもう、感激ですね。

地元のシニア・ソフトボールチームにも加えてもらっている。飯田の時もやっていたが、岡谷に戻り、中学の同級生から声がかかった。これが地域のありがたさだ。毎週日曜日の午前中に練習があり、長く続く定期戦や公式戦にも出場する。守備位置について打球に備えているときの緊張感や会心のヒットを打ったときの快感は計り知れない。それを70代になってからも味わえるのは幸せというものだろう。けがの防止は必須科目と心得ている。

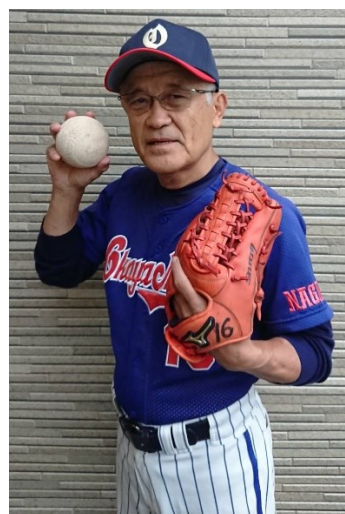
野球の関係では、飯田時代に高校野球の取材にも携わっていたのが縁で信州の野球界とのつながりが深まり、シニア退職後、複数の団体の役員を仰せつかっている。多少なりとも経験が生かせればよいと思い、お手伝いをさせていただいているところだ。

もう1つの楽しみはシニア混声合唱団。これは清陵の同期仲間にも誘われた。ほぼ隔週で練習日があり、歌うことで心が解放される。11月3日には諏訪市文化センターが舞台の市民コーラス祭に臨むが、曲目の1つが「琵琶湖周航の歌」。うれしい選曲となった。

これらに加えて高校と大学のOB活動が複数あり、正直、抱え込みすぎと思うのだが、まあ、声がかかるのはありがたいと受け止めている。歯や目、耳などに寄る年波は明らかだけれど、メタボ検査はクリアだし、今のところ元気な70代が進行中です。



「長野日報」コラム「語ろうスポーツ」



シニア・ソフトボール

## ニホン？ それとも、ニッポン？

2部 山田 雄一 (2023年9月30日)

朝起きて新聞3紙に目を通し、朝食。外出の予定がなければ、テレビ朝日の「羽鳥慎一モーニングショー」と向き合うことが多い。世の喫緊の課題に批評精神を忘れずに踏み込み、時に脱線もするが、「よくぞ言ってくれた」と拍手を送る気分になったりする日もある。心地よさを生んでいる要因の一つは羽鳥アナの小気味よい進行だろう。

バランス感覚に長けた彼なのに、1つ気になって仕方ないことがある。「日本」の読みが必ず「ニッポン」なのだ。「ニホン」とは読むまいと相当に神経を使っているとする。

他方、今年フリーになった玉川徹コメンテーターは社員時代から「ニッポン」と言うのを聞いた覚えがない。羽鳥アナに対抗して「ニホン」と語気を強めたと思える時さえある。日替わりコメンテーターやゲストの出演者たちはたとえば、「ニホン」が一般的で、羽鳥アナ（女性サブアナも）の「ニッポン連呼」が私には異質に思えてならない。

NHKは「国名として読むときはニッポン、それ以外はニホンもありうる」という規定だそうだが、日本大学（ニホンダイガク）などの固有名詞を除き、まず「ニホン」は聞かれない。基本的に「ニッポン」なのだろう。そして、民放のテレビ朝日も何らかの理由で「ニッポンと読むべし」の方針が示され、羽鳥アナらは従っているのではないか。

「ニホン or ニッポン」の歴史は古く、室町時代に両用されていた記録もあるそうだが、私は1934年（昭和9年）に国語に関する文部省の調査会が「ニッポンとする」と決定したことに注目する。世は軍国主義が加速していく時代。弱々しい響きのニホンより、勇ましさに富むニッポンを選択したのではないかと推測する。

1974年度のNHK朝ドラ「鳩子の海」で主人公が口にする歌詞の勘どころは「ニッポンよ、ニッポン」だった。この女の子にたびたび熱唱させ、耳につくようになった違和感が忘れられない。戦前の復古調を賛美する意図が色濃くにじんで聞こえたからだ。

亡くなった安倍晋三・元首相はテレビカメラの前で、「ニッポン」と力を込めるのが常だった。もっとも何かの拍子に「ニホン」と言って、ただちに「ニッポン」と言い直す場面を何度か目にした。国立国語研究所の調査によると、国民の日常会話では「ニホン」が圧倒的という。「ニホン」の方が自然で、「ニッポン」には無理が伴うのではないかと。スポーツ応援の「ニッポン」をとにかく言うつもりはない。「新たな戦前」が危惧される時代にあって、もと来た道へと氣勢を上げる合図でなければよいと私は思うのだ。

ところで、ふだんの羽鳥アナは、「ニッポン」だろうか、「ニホン」だろうか。

## 晴耕雨読の日々

2部 柳田 恒男 (2022年9月8日)

10年前還暦を迎え古希と呼ばれる年齢になった。振り返るとあっという間の10年のように感じるが、この間、手術での入院、母の死、7年間の義母の介護の手伝いなどいろいろなことがあったが、会社勤めの責任としがらみから解放され自由に暮らせることに満足している。

退職後、父が長年借りていた4aの畑と自宅の庭に野菜を作り、空いた時間には地域の役を引き受け読書と音楽を聴き、収穫した野菜で料理をつくり気ままに1日を過ごしている。

読んだ本の中でショーペンハウアーの「処世術箴言（幸福について：新潮文庫、橋本文夫＝訳）」の中の文「・・・家族を抜きにして自分一人だけでも真に独立してすなわち働かずにのんびりと生きてゆけるほどの財産をはじめからもっているということは、測り知れぬ強みである。これこそは人間に生活につきものの窮乏と苦難からの放免であり、地上の子の自然の定めともいうべき万人に課せられた役務からの解放だからである。・・・それこそはじめて真に自主独立の立場から、自己の時間、自己の能力を自由にする人間となり、朝な夕なに「今日の一日は私のものだ」と言い切ることができるからだ。・・・」に深く共感している。幸い退職金と年金で何とか暮らして行け、子供も独立しているので、定年後からとなったものの、まさに自由人として生きていることを実感している（妻の影響だけは良きにつけ悪きにつけあり全く自由とはならないが）。

残りの時間が少ないことを実感する年齢になったが、今の暮らしが出来るだけ長く続くことを願っている。



自宅庭の菜園：夏野菜の残りとお野菜



借用している畑：春に植えたネギ



借用している畑：初夏に植えたベニハルカと最近植えた白菜の苗



借用している畑：秋大根、レタスなど

## 「働くこと」雑感

3部 伊藤 俊巻 (2023年9月8日)

某金融機関からグループ子会社に転籍し、63歳の役員定年後に都内の公共職業安定所(通称「ハローワーク」)に嘱託職員として再就職し、既に9年が経過しました。

ハローワークは厚労省が設置する行政機関の一つで、雇用保険、失業保険、各種助成金の取り扱いなど「役所的な業務」のほかに「紹介業務」という重要な機能があります。紹介業務は仕事を探している個人と人材の採用が必要な事業所(多くは中小企業や個人事業主)をマッチングして、希望する事業所への就職や人材の採用ができることを目的としています。

私は9年間、この紹介業務に携わり、主に事業者の相談員・アドバイザーとして様々な業界・業種の事業所オーナーや採用担当者と接触し、事業所の要望を踏まえた提案、求人(採用)関係書類の作成指導などを行ってきました。

還暦を迎えた頃には、仕事は年金が満額支給される65歳あたりで終わりにしようと考えていました。しかし、その後の明確な生活プランなどはなく、東京に居続けるのか、諏訪に戻るのかという根本的な問題も決めかねていました。

そんな中、ハローワークの仕事が始まると、同年代のオーナーから自分の子供のような採用担当者まで幅広い年代層から採用がうまくいって感謝されたり、更には採用関係の相談に止まらず、雇用や人事に関する行政・法令の相談や将来の事業経営に関わる相談まで受けたりするようになり、働くことの「おもしろさ」「やりがい」などを改めて認識するようになりました。気が付いたら、いつの間にか当初の想定より7年も長く働いていたというのが偽らざる実感です。

現在、新型コロナ感染が落ち着きを見せ、多くの事業所で再び採用活動が活発化していますが、その一方で人手不足の問題が深刻化してきています。特に高齢化が進んでいる多くの中小企業などは若年層の人材を如何に確保し、育成していくかが、事業の存亡に大きく関わってきます。この問題の「当事者」の立場にある私にとって、日々の仕事に対する責任の重さを以前にも増して痛感しています。

今は毎週5日間、7時間程度のフルタイムで仕事を続けることができています。健康面に加え、仕事のおもしろさ、やりがい、適度の緊張感が支えになっていると思います。

それでは、これからの生活プランをどのようにするか。相変わらず白紙の状態です。それどころか、以前のように先行きをあれこれ考えず、「なるようになれ」の心境になりつつあります。



## 自著評(抄)

3部 遠藤 茂 (2019年9月15日)

### (1) 東京都の蝶、新版東京都の蝶

都道府県単位の蝶の図鑑で、初めて生態写真と具体的な観察記録のみの図版解説で構成された画期的な本。解説というと、大図鑑の孫引き的なものしかなかった世界に、新しい切り口で挑戦。データも実見・実在の標本を元に、チョウの分布を時間軸で分けて検証する方法を初めて採用。一般向けの販売図書ながら、専門の学会論文を凌駕して、その後の生態調査の方法を一変させた1冊。またマーキングの手法も具体的に図示・解説し、アサギマダラのマーキングと移動という風物詩を現出する大きな一歩・一助となった。

### (2) 日本産蝶類食餌便覧

一国若しくは一地域に産するすべての蝶の食餌(一般には植物食だが、中には動物食の種もいる)を1種ごとにすべてリスアップした論文・書物は存在しなかったが、世界で初めて実現した1冊。一般向けに販売。植物はすべて学名を同定、実際に検証(食べるか、野外で実査に利用しているのか、飼育の時にだけ利用できるのかを実見と実験を重ねた)したもの以外は基本的にリストアップせず、検証結果を反映した区別を明示した。その後、発表される論文・報文は同じ形式に倣う様になった。30冊くらいの著書に対し、最高の評価である「始めてやるということが本当に大変なんだよ。」が貰えた。

## 百人一首考(抄)

3部 遠藤 茂 (2019年9月15日)

百人一首は様々な研究や著作が有り、また広く風実のある競技、娯楽として知られている。研究等の基本・論点は、秀歌と駄作歌が入り混じり、同じ作者のもっと優れた歌が採用されないのは何故か？また同じ理由・根拠により、そもそも藤原定家が編纂したのか？に尽きる状況が続いている。自分は古典が大好きで、百人一首も大きな柱の一つである。

定家の後の人たちが、秀歌云々を論じる時に大きな見落としがある。それは美人の基準を考えると判り易い。江戸時代の浮世絵美人画を見ると、皆同じように下膨れ瓜実顔であり、現在の様々なコンテストで選出される方々の特徴である小顔で尖った顎の美人像には当てはまらない。当然のことながら「基準は変化するもの」である。平安時代の定家の秀歌の基準に、その後の秀歌の基準をもって評価するということが、評価者・鑑賞者としての足元を疑われるのではないかと大いに危惧するものである。

百人一首から定家様(書体)、南北朝、古田織部、小堀遠州、宗祇、郡上八幡、松尾芭蕉、寛永通宝、有田焼、翡翠、富岳三十六景等、広がる裾野は廣大深淵で無限。

古典を紐解き、定家や紫式部から芭蕉辺りまでを肴に、秋の夜長を楽しむ至福の時を過ごしたいものである。百人一首より、今この時、心に浮かぶのは、これかな。

常満農遠よ 田江那者多え祢 那可羅邊波 志乃布累こ登代 よ者梨毛處数留

## タマムシの研究

3部 遠藤 茂 (2023年9月15日)

タマムシの研究の現状と遠藤コレクションについて、少し書いてみる。

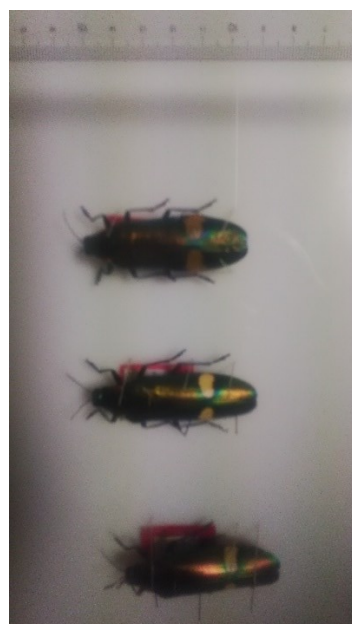
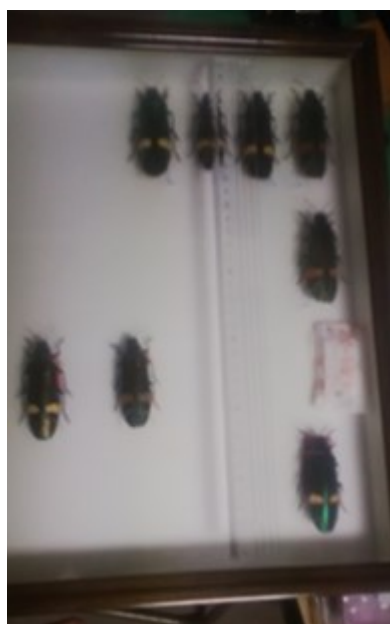
現在のタマムシの研究は、「山路来て、未だ山麓」という言葉がびったりな状況である。一番調査が進んでいなかったアジア地域、特に東南アジアのファウナが、小生によって少し解き明かされると堰を切ったように世界中の研究者が殺到した。東アジアの小型種をまとめた大型図鑑、ブラックボックスであった中国のファウナの図鑑、ヨーロッパでは、昔の植民地時代から蓄積された標本を基にした世界の大図鑑の刊行が決まり、アメリカはその財力を背景にしたスミソニアン博物館の世界のタマムシのまとめ（100年ぶりに世界中を網羅した全5巻の総集編）などが次々刊行された。

私のコレクションも、東南アジアの標本を中心に、20000個体以上になり、大英博物館とかスミソニアン博物館から引き合いが来た。もちろんコロナの影響で、海外での調査が困難になったこともあり、日本でのタマムシ研究にも手を付け始めている。それも含めると30000位の標本数になるのであろうか。正直に言って、正確な数字は数えることは不可能?!かな。数えるだけで半日からおそらく1日かかると思わる。それも時間の無駄と本人は考えるので、およその数字になるわけである。

そもそも小生はコテコテの国粋主義者???である。日本にタマムシの研究センターを作りたくて始めたことである。ヨーロッパには植民地時代にため込んだ大量の文献と標本があり、アメリカは豊富な財力と人材で世界を席卷している。日本の現状はというと、つい先日、国立科学博物館が運営に困り抜いた結果、クラウドファンディングを始めたというニュースが流れた。昆虫部門のトップは知り合いであるが、その涙なしには語れない取り組みに心が痛んでいた。クラウドファンディングは素晴らしい着想である。先代の標本保管の建物は、まるで古い中学校をそのまま転用したようなもので、「国立」の名が泣いていた。最近つくば市に新築されたものの、当然維持費が出ない何時ものパターン。

「逢魔が時」という言葉があるが、自分も出会ってしまったのか???ついこの間まで、全て自分の力でタマムシの研究センターを作るつもりでいた。金も力もないのに大きな夢を描いていた。最近の便りが黒い縁取りのあるものになってきた。初めて将来について考えた。まるで中学生か高校生のようなのであるが、実はまったく将来について考えたことがなかった。将来は遠過ぎて考えられず、過去は忘れ、自分には只々今日があるだけであった。何故か国立科学博物館に電話を掛けてしまった。「自分の標本を科博は収蔵したいのか?」と。担当が「是非科博に」と言った。部門のトップがマイコレクションを見て「これはアメリカにもヨーロッパにも渡したくない。金は無い。寄贈して貰えませんか?」と言葉を絞った。フフッと思わず微苦笑が出てしまった。遠藤コレクションは国立科学博物館に行くことになった。夢はまだ続く。将来、研究センターができることを祈念して、筆を置くことにする。

以下は遠藤コレクションです。



## お気楽3人組

3部 小川 素明、小林 千秋、林 重男（2023年9月27日）

古希記念誌の原稿は文章を書くのが不得手なので、書かないつもりでした。ところが9月26日（火）にゴルフ場から河西編集長に飲み会の誘いの電話をいれたら、「ゴルフなんかして遊んでいないで、原稿を書いてくれ」と言われたので当日のゴルフの写真とちょっとした文章で、3人1組で参加させてもらいます。

そのゴルフ場は三井の森フォレストカントリークラブ(茅野市)で、標高1,400mの高原に展開する展望の良いコースです。当日は晴天の元、杉田隆俊君（1部）を誘って4人でプレーをし、ビールを飲んで懇親を深めました。



我々3人が一緒にゴルフをするようになったのは、最近のことです。きっかけは2021（令和3）年11月1日に今井柳平君の呼びかけで「小林正和（万十）君を偲ぶ会」で再会したことです。

古希を過ぎ、平均寿命まで後10年、健康寿命も近づいてきています。「命短し恋せよ乙女」ではないですが、人間死んでしまったらおしまいです。

我々3人は現在、一線を退いて悠々自適の生活をしています。いろいろなことを深く考えず、くよくよせず、だいそれたことには挑戦せず、お気楽に生きています。このお気楽こそ長生きの秘訣かもしれません。さて我々3人は誰が一番最後まで元気に生きながらえることができるでしょう。もう皆で会える期間は限られています。我々お気楽3人組と是非ゴルフを楽しみましょう。



## 宇宙デブリ問題:宇宙開発を困難にする宇宙のくずの急激な増加

3部 帯川 利之 (2023年9月25日)

「宇宙デブリ (space debris)」という言葉を目にしたことはないだろうか。デブリは「くず」であり、宇宙デブリは主として宇宙開発により宇宙空間に放たれた人工物のくずを指す。運用が終わった人工衛星も 1 個の宇宙デブリである。一方、自然に形成された宇宙空間の物質はその大きさによって流星物質 (meteoroid) や隕石 (meteorite) と呼ばれる。

宇宙デブリがもたらすトラブルは、宇宙デブリの衝突による人工衛星の損傷である。宇宙空間での衝突速度は秒速 10000m 程度に達するため、指先ほどの小さなデブリであっても甚大な被害をもたらす。こうした理由から、東京工業大学で所属学科の名称が機械物理工学科から機械宇宙学科に変わったことを契機に宇宙デブリの衝突を想定したアルミ飛翔体の超高速衝突を学生の研究テーマのひとつとして取り上げることにした。本稿は、こうした経験から宇宙デブリの現状と課題について手短かに紹介する。

ところで、機械宇宙学科では、希望する学生に対し種子島の宇宙センターの見学会を毎年実施していた。1997年には学生と現地集合で種子島宇宙センターを訪問し、ロケット発射台の脇の格納庫に収納されていた H-II ロケット 6 号機や地下の指令室を見学したのも懐かしい思い出である。さらに当日、現地で組み立て調整中の技術試験衛星 VII 型「きく 7 号」(ETS-VII) や熱帯降雨観測衛星 TRMM などの人工衛星も急遽見せていただけることになり、学生と一緒に見学会を存分に楽しんだ。ETS-VII は将来のランデブ・ドッキング技術の修得を目的とした「おりひめ・ひこぼし」の愛称で呼ばれる人工衛星であり、後日、TRMM と一緒に H-II ロケット 6 号機で打ち上げられた。

ここで、宇宙デブリに話を戻そう。人工衛星、特に、宇宙ステーションのような有人機には宇宙デブリの衝突による損傷を軽減・防止するためバンパープレートが取り付けられている。自動車であれば、車の前後にバンパーが取り付けられるが、宇宙空間では宇宙デブリの飛来方向が特定できないため、人工衛星は本体部分がバンパープレートに包まれた構造となっている。ただし、ロケットのペイロードに影響するため、バンパープレートに厚く強靱な装甲板を使うことができない。そこで、従来、薄いアルミ板がバンパープレートに用いられていたが、宇宙デブリに対する貫通抑止力を高めるためケブラー繊維複合材やセラミック複合材などが使用されるようになった。一方、人工衛星の本体から張り出した太陽電池パネルやアンテナは覆うことができないので、むき出しで無防備の状態にある。

実は、バンパープレートを取り付けても人工衛星の本体が十分安全に守られているわけではない。バンパープレートは大きさが概ね 10mm 以下の宇宙デブリの衝突に対してのみ有効であり、それ以上に大きい宇宙デブリに対しては軌道を修正して衝突を回避するしか方法がない。「三十六計逃げるにしかず」である。このため、人工衛星の最大保有国である米国は人工衛星の損傷を防止するため、以前から宇宙デブリのデータベースを作成していた。このデータベースは極秘情報となっていたが、2007年に中国が自国の人工衛星をミサ

イルで破壊して膨大な量の宇宙デブリを発生させたこと、また 2009 年に米露の人工衛星同士の衝突により大量の宇宙デブリが宇宙空間に飛散したことから、米国は本データベースの公開に踏み切り、2013 年、日本の JAXA は宇宙デブリの情報に関する協力協定を米国と結んでいる。

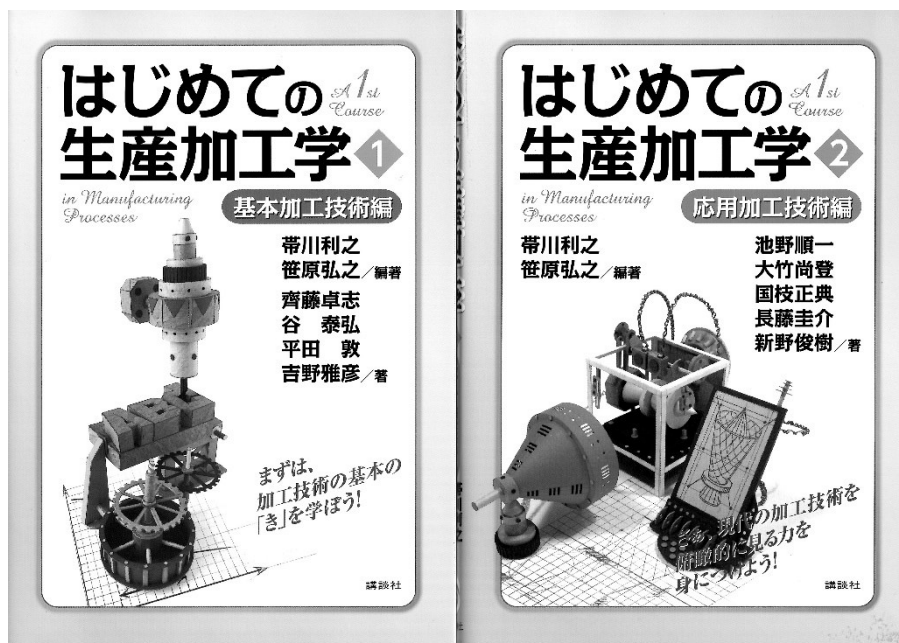
The European Space Agency によれば、現在、地球を周回する宇宙デブリの想定数は 10cm 以上のものが 36500 個、1~10 cm のものが 100 万個、1cm 以下の小さなものが 1 億 3000 万個である。その内、23000 以上の物体が登録・追跡され、衝突確率の高い衛星に対して 1~2 週間前に警告が発せられている。今後、デブリの総数は確実に増え続け、国際宇宙ステーションでの船外活動を含め宇宙開発の危険度は間違いなく上昇する。将来、Kessler Syndrome と呼ばれる大きな宇宙デブリ同士の連鎖的な衝突が発生した場合には地球を周回するデブリの密度が非常に高くなり、地球の外に有人機や人工衛星を打ち出せなくなると予測されている。このように宇宙デブリに対し厳しい目が向けられるようになったが、それにも関わらず、2019 年にインドがミサイルによる人工衛星の爆破実験を行うと予告し、世界中の大反対を押し切って実施に踏み切った。

ウクライナ侵攻で世界的な認知度が高まっているが、電気自動車の Tesla 社や旧 Twitter の X を所有する実業家のイーロン・マスクは民間の宇宙開発会社 Space X においてロケットの打ち上げによる宇宙輸送サービスの他、人工衛星を用いたインターネット接続サービス Starlink の提供も行っている。彼はロシアのウクライナ侵攻直後に大きなダメージを受けた同国のインターネット通信網の代替えとして Starlink サービスを無償で提供した。ウクライナのフォードロフ副首相がツイッターでマスク本人に直接要請し、Starlink が赤字であるにもかかわらず、その要請に対し迅速に同国を支援したのだ。現在、Starlink は 4000 機以上の衛星を運用し、毎日 140 回ほどの衝突回避のアクションを起こしているとのことである。数年内にさらに 12000 機を追加する方針であり、そうなれば毎日 560 回、2.5 分に 1 回程度の割合で衝突回避アクションが必要になる。おそらくアラームの頻度が高いので、かなり低い衝突確率でも安全を優先して軌道を変更しているのだろうと想像する。

日本にいと、我が国が官民で打ち上げた人工衛星の数が非常に少ないので、宇宙には余裕がまだ十分にあると感じてしまう。少し古いデータではあるが、2016 年の 1 年間でデブリが JAXA の衛星に近づいてきそうだという情報が 9 万件、軌道変更の準備を始めたケースが 30 件、実際に軌道を変更したのが 5 件ということである。宇宙デブリへの対策を含め世界の宇宙開発は加速しており、我が国の存在感を高めるため喫緊の課題である H3 ロケットの商用ベースでの早期運用を願っている。H3 ロケットの打ち上げ費用は約 50 億円を想定しており、これは H-II ロケットの打ち上げ費用 140~190 億円の約 1/3、H-IIA ロケットの 85~120 億円の約 1/2 である。国際競争力を持つ打ち上げ費用の実現には生産における技術革新が大きく貢献していることはいままでのない。

話は大きく変わるが、2016 年 6 月に編著者として出版した大学生向けの教科書「はじめでの生産加工学」について追記したい。本書は下の写真に示すように基礎加工技術編と応用

加工技術編の 2 分冊で構成され、伝統的な加工技術から最新の 3D プリンティング（学術的な正式名称はアディティブマニファクチャリング (additive manufacturing, 略して, AM)）まで広く学べるようになっている。本書は、比較的多くの大学で採用されたため、2023 年 2 月に基礎編は第 9 刷、応用編は第 6 刷と版を重ねることができた。基礎編はほぼ毎年増刷されている。生産加工に関する学問は細分化されており、全てに精通している教員はいないといっても過言でない。そこで、執筆を依頼した著者の原稿に、実質的な内容を変えずに、極端な言い方をすれば、教員が一夜漬けでも教えられる程度に分かりやすく赤を入れたのが功を奏したようである。ちなみに、もうひとりの編著者は私の教え子です。彼は 50 代後半の教授であるが、私と二人で並ぶと、私の方が彼の後輩のように見えてしまうのは何とも残念なことである。





## 「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」か？

3部 河西 朝雄 (2020年11月30日)

2020年(令和2年)は新型コロナウイルスで世界中が大混乱に陥った。日本でも安倍晋三首相率いる自民党政権の対応は後手に回り、初動対応を間違ったとしか言えない。3.11 福島原発事故においても同様に、菅直人首相率いる民主党政権の間違った対応が原発の爆発という最悪の結果になった。



政党に関係なく政治家がいかに無能かを露呈した。日本はマニュアル通りなら的確に実行できるが、突発的な事項には対応ができないということである。我々はいわゆる全共闘世代に属する希少種である。学生運動をしている者もしていない者も、反権力や反戦平和という志向が刷り込まれたように思う。しかし、年を重ねるごとに、若かりし頃の思いは変わり「長い物には巻かれろ」となる。今の安倍政権は強力で、権力の番人であるべきマスコミは徐々に手懐けられようとしている。そして国民もまたそのマスコミにより手懐けられていくことに危機感を感じる。日本が太平洋戦争へと突き進んでいった「いつか来た道」が来ない事を願う。いや、そうならないように最後の声を上げることが老兵の役割なのかもしれない。

### ■いつか来た道

ここで言う「いつか来た道」とは戦前の軍国主義国家への逆戻りを意味する。安倍政権は「戦後レジームからの脱却」を唱え、「特定秘密保護法の制定」、「集団的自衛権の行使容認の閣議決定」、「安全保障関連法(安保法)の制定」など数々の制度変更を着実に進めた。残るは「憲法改正」で、こうした流れは戦前の軍国主義国家への逆戻りに道を開くことになる。昭和初期、大日本帝国はなぜ悲惨な戦争へと突き進んだのか。大政翼賛会を中心に太平洋戦争下での軍部の方針を追認し支える翼賛体制の元で教育現場、マスコミが積極的に加担したことにより物言えぬ国民を作り上げた結果なのである。戦争体験を持つ多くの人が「私はあの戦争に反対だった。でも、そんなことを言える雰囲気ではなかった」と言っている。戦場に行った人のほとんどは90歳を超え、戦争に対する歴史認識が欠ける若い世代が増えることで、安倍政権が進める「いつか来た道」を信じてしまう若者が増えてしまうことに大きな危機感を感じる。

### ■みんな手懐けられていく

我々の世代は「反権力」であった。それが青臭い「批判精神」であったとしても、そこには「未来へのマグマ」があったように思う。しかし今はどうか、すべてが権力への忖度で動いている。モリカケ問題など独裁政権の腐敗を正せなかったのは何故か。それは政権

がマスコミや検察を手懐けたからである。マスコミはジャーナリズム精神を手放した。ワイドショーなどで御用コメンテータが国民のガス抜きをするように誘導する。そして国民も手懐けられていく。そこに「批判精神」はなく、「長いものには巻かれろ」という精神が蔓延する。「大本営発表」を信じてはいけない。独裁という単一性はある断片では効率が良いけれどいずれ滅亡へと進む。求められるのは多様性である。多様性は自然界において重要なもので、多様性がないと進化もないし、種はいずれ滅びる。社会においても多様性は社会の変化と発展に不可欠な要素である。「それっておかしくないですか」という批判精神を忘れてはならない。

### ■苦手克服という呪縛

子どもの頃は、先生や親から、自分の苦手科目はなにかをみつけて、自分なりの努力をなさいと、「苦手克服」という呪縛をかけられる。小さいうちはある程度、人並みのことはできた方がいいと思うが、ある程度の年になったら、なんでもできる必要はないと思う。今の学校教育はみんな均一の金太郎飴を作ろうとしている。私は基本的に不器用である。運動も音楽もまったく得意でない。何かを作らせても綺麗にはできない。清陵では音楽を選択させられた。桶先生がピアノで和音を弾いて、10問中何問できたかを毎時間やる。これがまったくわからないので、適当に書くときたい4問以下の正答。10問できた人から手を上げていくが、6問正答位で大半は終了なので、私は手を上げたことがない。別に和音がわからなくなつて、人生に関係ないと思いつつも、気が重い授業だった。今になって自分をふり返ってみれば唯一得意なことは、頭を使って考えること。私がライフワークにしているプログラミングはまさにその典型で、頭の中のイメージをコンピュータに伝えればよく、何か目に見える物にする必要がない。不器用でもできるのである。

「人生はできる事に集中すべきであって、できない事を克服することではない」と最近思えるようになった。

### ■デジタルかディジタルか

菅内閣の目玉の一つが行政のデジタル化を進める「デジタル庁」の新設である。この「デジタル」という言葉は「デジタルカメラ」、「デジタル時計」、「地上デジタル放送」、「デジタル教科書」など巷に溢れている。さて「デジタル」の元の英語は「Digital」であり、JISの情報処理用語では「ディジタル」と定義している。ところが「デジタル」と表記する背景には、元々の日本語で「ディ」と発音するものはなかったからで英語教育を受けていない年寄りはこの「イ」の発音ができないので、「D」は「デー」、「T」は「テー」としか発音できないのである。しかし、いまどき「Disneyland」を「デズニーランド」など呼ぶことはなく、「ディズニーランド」である。「Tiffany」も「テファニー」でなく「ティファニー」である。それなのに科学技術における主要用語の「Digital」を「デジタル」と表記するのは、グローバル化社会に逆行することである。多くの人が元の「Digital」を知らずにカタカナの「デジタル」という言葉だけが独り歩きしてしまっているのである。特に日本の将来を担う子どもたちに「デジタル教科書」はないだろうと思うのだが。

## これでいいのか日本のプログラミング教育

3部 河西 朝雄 (2020年12月1日)

2020年(令和2年)から小学校でプログラミング教育が必修化される。これを先取りする形で、茅野市ではScratch(スクラッチ)を用いたプログラミング教育を実施して来た。市内9小学校の5年生、6年生全員に総合学習の時間を利用して学年ごと45分授業を6回行っている。学習指導要領では以下のようなことが求められている。

- ・教科化はせず、総合的な学習の時間や算数、理科などの既存の科目を活用する
- ・プログラミング教育を通して、「プログラミング的思考」を育成する
- ・コーディング技術を身につけることが目的でなく、論理的な思考の育成を目的とし、社会のインフラがプログラミングによって動いていることを体験的に学ばせる



しかし具体的な方法は学校まかせである。「頭でっかち」な理想ばかりで現実的でないのである。プログラミング教育を行うための教科書もない。これで小学校の先生にプログラミング教育をやれというのは無理難題というもの。

そこで茅野市では「小・中学生のための Scratch プログラミングに挑戦、河西朝雄著、本文92頁、オールカラー」というテキストを作成した。テキストは1冊が240円(ほぼ原価でこちらの儲けはない)で、市と保護者で半額ずつ負担する。全員がこのテキストを元に授業を受けるのである。

都会では学級崩壊などという言葉をよく聞くが、茅野市の小学校はそんな世界とは全く異なる。児童はプログラミングの授業を楽しみにしていて、「説明するときはこっちを見ろ」というと一斉にこちらを向く。休み時間も休まず集中している。子供の能力には大きな可能性があり、プログラミングという新しい分野では先生を超えている。

海外でのプログラミング教育はもっと進んでいる。たとえばイギリスでは、教科「Computing」を設けて、アルゴリズムの理解やプログラミング言語の学習などを行っている。その他にも、米国、フランス、ドイツ、スウェーデン、ロシア、韓国、香港、インドなど多くの国で本格的なプログラミング教育が推進されている。日本のプログラミング教育はやっとスタートラインに立った状態で、先進的諸外国から大きな遅れをとっている。茅野市のようにきちんとやっている所は全国で少ない。プログラミング教育を「教科」に位置付けなかったことが、日本のプログラミング教育は腰が引けていることを示している。

とはいえ、私にできることは目前の子ども達にプログラミングの楽しさや考えること想像することの楽しさを伝えることである。茅野市の小学校の1学年は9校合わせて500名程いる。毎年これだけの児童に教える事に意義と責任を感じながら、楽しく授業をしている。

## 二足のわらじを履いて

3部 河西 朝雄 (2023年8月19日)

一番最初に世に出た本はLCVのテレビ講座に出演したときに使った「LCV9ch パーソナルコンピュータ講座 BASIC 入門(1982年:昭和57年)」である。この本がきっかけとなり、技術評論社、ナツメ社などのメジャー出版社からプログラミング関連の書籍を書く機会を得た。以後工業高校教員としてプログラミング教育を行いながら物書きという二足のわらじを履いて114冊の本を出すことができた。以下はその一部の本の表紙である。



高校教員は56歳で早期退職したが、諏訪東京理科大学で14年間非常勤講師を勤め、今年で定年退職となった。しかし茅野市の小学校(9校ある)でプログラミング教育は行っていて、これはいましばらく続けるつもりである。古希を過ぎた今もお陰様で、出版社からの依頼があり、ロングセラーの「C言語によるはじめてのアルゴリズム入門(初版1992年)」の改定5版、新たに「Pythonによるはじめてのアルゴリズム入門」が出版予定である。

余談であるが、私が住む地区の歴史をまとめた「上原区誌:オールカラー、300頁、頒布価格1,500円」を執筆中で今年の秋には発刊予定である。高校時代の歴史は丸暗記するもので面白味を感じなかったが、歴史というのは自分で調べ出すと面白いものである。これはプログラミングで問題を解決して行く作業と通ずるものがあるのかもしれない。

古希を過ぎた今、物書きとプログラミング教育という二足のわらじを履き続けることができていることに感謝している。これを続けるには健康がなによりである。酒は好きで休肝日はないが、夜は9時半に寝て、朝5時半に起きて田んぼの水見に行くという規則正しいルーチンを守っている。

## 少年法適用年齢引き下げ問題について

3部 北川 和彦 (2020年9月1日)

少年法の適用年齢を20歳から18歳に引き下げる法律改正が進んでおり、近々国会に上程される可能性があるとのことである。

この少年法改正は、全ての単位弁護士会、日弁連、弁護士会連合会がこぞって反対しているが他に目立った反対がなく、これを審議している法制審議会でも反対は弁護士会が主で、他に反対は少ないとのことである。

知り合いの保護司の話では、問題であることは判るが、監督官庁の手前、政治的な発言は難しいとのことであった。

長野県弁護士会では今年5月26日にシンポジウムをしたが、改正による弊害を知れば知るほど反対せざるを得ない。「なみの会」の皆さんの理解を是非得たいと思い、駄文を披露することにした。

1 選挙権年齢を18歳に引き下げる公職選挙法改正は平成27年6月に成立し、成人年齢を18歳に引き下げる民法改正は同30年6月成立している。国法上の統一の要請から少年法も適用年齢を引き下げる必要があるのではないかということが改正の動機である。

2 成人と少年の処遇の違い

(1) 罪を犯すと、成人は、在宅での捜査の他に、一部は逮捕・勾留という身柄拘束を受け、捜査の終了時に起訴・不起訴が分けられ、罰金、執行猶予、保護観察付執行猶予、実刑等の判決を受ける。

(2) 少年は、罪を犯した少年や不良行為がある少年を対象として、警察が捜査した全件が家裁に送致され(全件送致主義)、家裁調査官や少年鑑別所での資質や環境の調査を経た上で、不処分(教育的措置)、保護処分(保護観察、少年院送致、逆送←成人と同じ扱いに戻る制度)といった処分が科される。結果だけで判断せず矯正可能性を見て判断される。

(3) 少年院は、自由時間が少なく、担当以外の教官からも教育的働きかけがあり、集団で生活することでの気付きが期待できる。一定の成績がないと出院できない。これに対し、刑務所には刑務作業以外は自由であり、教育的働きかけは少なく、刑期が終われば出所する。

少年は成人と違って可塑性に富むから、性格の矯正や環境の調整によって更正が可能との考えから戦後、家庭裁判所と共に新設された。

3 改正の必要性の検討

(1) 少年事件は2003年から2016年の13年間で74.3%減少しており、殺人や傷害致死事件は2000年から2016年の間で3分の1以下に減少しており、凶悪化もしていない(警察白書)。

再犯率は、18歳以上の少年院出身者が12%に対し、20～25歳の刑務所出所者は30%で、少年院出身の方が遙かに低く、成人扱いにして厳罰化する必要性がない。

少年法は有効に機能している。

(2) 引き上げられるとどうなるか？

審判をうけた少年の40%、少年院送致処分を受けた少年の50%は18、19歳であり、適用年齢が引き下げられると、半数は成人の扱いとなる。

少年の場合、41%が少年院送致、保護観察、刑事処分を科され、処分の前後にわたって性格の矯正や環境調整等がされるのに対し、成人の場合、起訴されても資質や環境の把握などの家裁調査官調査の対象外となり、立ち直り、再犯防止の機会が失われる。

また成人事件の51.3%は起訴猶予であり、8%ある正式裁判のうち26%は執行猶予であるが、起訴猶予や保護観察のつかない執行猶予では、第三者による立ち直り支援は法的には想定されていない。

(3) 法制審議会では、若年者に対する新たな処分として、起訴猶予とされる約50%の対象者を家裁送致とし、調査官調査を経て保護観察等にするという制度を考えているとのことである。

しかし成人扱いにしながらか他の年齢の成人と違う扱いをする理由が不明であり、成人では行為責任の原則(責任はなされた行為の範囲内にとどめる)が適用されるのに、新制度はこの原則を越えてしまい、少年法の適用から外した意味が失われる。

#### 4 結論

法律における年齢は目的毎に定めるべきで、国法上の統一といった理由は少年法を改正する立法事実にはなりえない。

長野県弁護士会で、平成24年に少年事件を扱った県内の弁護士にアンケートをとって非行原因の調査をしたが、県内の子ども達の自己肯定感是一般が50%弱に対し、非行を犯した少年は23%しかなかった。

また性格の傾向として他人に流されやすい性格の少年が最も多く、離婚、親への拒否感、貧困等の家庭環境の問題も重要な背景にあり、必ずしも本人に帰責できない事情があることや環境調整によって更正の可能なケースが多々あることが明かとなった。

再犯の防止には、本人の性格の矯正、環境の調整が必須であり、特に協力雇用主による就労支援、医療・福祉的支援、きめ細かな相談窓口の設置その他の充実が必要である。

私は、恐喝事件を犯し、身寄り血のつながらない兄だけの少年の未成年後見人を務めたことがあるが、知的に問題があって、給与は即日使い果たして金に困り、私や妻が繰り返し言っても、他から借金を繰り返し、そのため運転免許取得の資金が作れず職場が限定され、どうにも生活が安定しない少年の対応に苦労した経験がある(本来保護司がつく案件であり、亡父の遺族年金の管理のため、保護司の仕事を兼ねて家裁が弁護士を後見人につけたもの)。

成人であれば単純な執行猶予の事案で、立ち直り支援の機会が保障されない案件であった。

家裁の保護処分は、70年近い運用実績の中で少年の立ち直りに大きな成果を上げてきた。18、19歳には少年法を適用すべきである。

以上

## 虐待等の暴力から子どもを守る

3部 北川 和彦 (2020年9月1日)

今年1月の野田市の小学4年生の心愛(みあ)ちゃんの虐待死事件は衝撃だった。学校のアンケートに父親からの暴力が記入されていたが教育委員会はその回答のコピーを父親に渡してしまう。保護者の態度に児相、学校、教育委員会が負けている。しかも関係機関において情報が十分に共有できていなかった。

それぞれの関係者がすべきことの第1は、自分を子どもの目線に置き、状況や何が必要か想像力をはたらかせることである。保護者が子どもに合わせようとしなければそれだけで怪しいし、親が恫喝する場合はその行為自体に疑問を抱くべきだ。DV被害者は子どもより加害者を取るという心理への理解も不可欠だ。

他方、児相職員や学校だけでは判断や対応が困難だ。医師の関与は必須であり、警察との連携、弁護士にいつでも相談できる態勢が必要である。関係者は自分の内に閉じこもらず、他機関に助言を求めて欲しい。

私は、諏訪児相のアドバイザーを25年以上続けているが、児童虐待は法律問題の宝庫であり、教科書しか出てこない事例や教科書にも載っていない事例が多く、いつも悩まされる。

現在、子どもはいじめ・虐待・体罰・性暴力など様々な暴力に置かれている。

背景は劣悪な環境、多産家庭、虐待の連鎖等いろいろあり、多角的な対応が必要である。政府も重い腰を上げ、児童福祉法に子どもの権利条約の精神を盛り込み、弁護士の配置を決め、ここで体罰禁止条項を盛り込んだ法改正も上程されている。しかし関係者の意識改革が第1のように思う。

## 亡小林正和君の思い出

3部 北川 和彦 (2020年10月18日)

小林正和君が令和2年4月20日に亡くなった。

卒業50周年の際は元気であったし、腎臓の持病のことは聞いていたが、突然のことだったので愕然とした。最近、相次いで友人の死に目に会う。

小林君は、クラスでの席が私のすぐ後ろで、いつも話していた。私は文系、彼は理系で学

習のクラスは違ったが、ホームルームや昼食後のすき間時間にクラスの後ろのスペースでプロレスごっこでじゃれあっていたグループの一員であった。

私は中学時代から機械いじりをしてラジオやステレオのアンプの組み立てなどを趣味にしており、アマチュア無線にも興味があって、免許をとろうと思い小林君に話したところ、彼も免許をとるつもりだと話した。私は免許をとっても機材の購入に金がかかることや試験勉強が面倒になって結局断念してしまったが、小林君は初心を貫徹して試験に無事合格した。商船大学や商船三井ではその知識は役立ったことと思う。

高校卒業後やりとりはなかったが、私が岡谷の実家に帰っていた際、偶然岡谷病院の二階の窓から小林君がパジャマ姿で外を眺めていて私を見つけて声をかけてくれた。私の実家は岡谷病院のすぐ隣で庭に出ていたところを見つけてくれたものである。

慢性腎不全で、生体移植をしなければならぬがドナーが日本で見つからないのでフィリピンで提供を受けてきた、ホームページを立ち上げて腎臓のドナーの提供が円滑にできるように運動をしているとのことであった。

勤務先の商船三井では一番の英語の使い手だが、治療があるので陸にあげてもらっているとので、大変な苦勞をしているのに恬淡としていた。

10年位前、メールだったと思うが、息子が司法試験に合格したので、一度会って話を聞かせてくれとの連絡が来た。所要で上京した際に中華料理を食べながら長男の万真（かずま）君に会った。

早稲田大学の教育学部を卒業したが、教員にならずに一念発起して司法試験に挑戦したとのことであった。法律はすべて理屈の世界なので、その考え方になじむまでが大変で、教育学部からの挑戦は勇気のいることだと思うが、父親もよく許したと思う。法曹人口が増えて弁護士も就職先を見つけるのに苦勞をし始めていた時期で、私にその紹介をとの意味もあったと思うが、良い就職先の紹介もできず、大したアドバイスもできなかった。万真君自身で就職先を見つけて順調に弁護士業をスタートさせた。小林君のその時のうれしそうな様子が印象に残っている。

タンカーの船長として多国籍の人間相手にいろんな体験をしたと思う。人懐こいが腹が据わって度胸がある人間で、難しい人扱いをうまく処理していたと想像する。

その経験を聞いたかったが、諏訪と東京にいて親しく話をする機会がなく、卒後30年、40年、還暦等々と会う機会があっても、じっくり話す時間もなかった。

そろそろ仕事から離れてこれから時間が取れると思う矢先だったので、死の報せに心が痛んだ。

コロナ禍とはいえ、私たちはもっと会う機会を増やし、互いに話しておくべきだと思った。



## 思うこと(杞憂)と近況

3部 古村 功 (2023年9月16日)

いまだに、何か考え、文句を言いながら生きている。その一つ。昨今は、50年に一度と言われる災害が、国内でも毎年何件も起きている。世界的に見ても火災、水害、台風軒並みである。そのうえ、子供の頃には普通に見られた生物(ドジョウ、げんごろう、トンボ等)身の回りでは明らかに減っている。ウナギは絶滅危惧種だという子供の頃には川でウナギが取れたのだ。地球上の生物の半数以上が減少している。過去に最低5回はあった大量絶滅に相当する絶滅状況、第6回目の大量絶滅の真ただ中に今いるとも考えられる。今までの5回は、火山活動とか隕石落下などの自然現象からであろうが、今回のものは気候変動も大量絶滅も原因は人だ。人が都合よく生きるために、多くの人間が生きるために、大量な資源を掘り起こし使い、地球上の生息可能地の約半分にも当たる大量な土地を使い、食べ物を作ってきたためだろう。人間の都合で乱開発をして、地球が壊れると叫んでいる。たぶん過去には何度かアイスボール状態となったこともあるしぶとい地球が少しの気候変動等で壊れることはないだろう。ただ、人間が生きるのに不都合となるだけだ。これが問題化した時には、わたくしも、クモの糸の韃陀多のごとく人を蹴落とし我先にと極楽に向かってクモの糸を上り続けるのだろう。そして、プツリと切れる。お釈迦様は悲しそうに微笑んで去る。

このような状態を回避するためには、今の価値観を温存しながら少しずつ変えていくようなことで間に合うのか?大きな変革が必要と思える。今の価値観では対応できない状態にある。広い愛、ヒューマニズムよりもずーと広い愛、自然を愛し、自然にも全ての権利と主張を与えるくらいの価値観の変化が必要だと思える。「人類に都合よいものが良い」から「人類が生き残るのに都合よいものが良い」になるくらいの大きな価値の転換が必要だと思える。政治的にも経済的にも各個人の感性的・主観的にも、生き延びるか、死に絶えるかの選択なのだからいくらかの都合などぶっ飛ばさずだ。近い未来にこのような価値の転換が来るように思える、来ないとなるまい。大きな価値の転換となれば、今まで恵まれていた者も、その社会的な地位もガラッと変わるのだろう。

ところで、私は?私がしていることは、これからの人生、都合よく生きることができるよう少しの仕事(非常勤講師)をし、わずかな不労所得を頂こうとその仕組みを作る、姑息な悪党である、少しでも長く生き残ろうと運動と実益をかねて三本刃一本で借りた畑を耕し、そして時々山に登る生活だ。今の価値観に染まり、それに従ってどっぷりと漬かってきた私には鉄槌を振り上げることはできまい。「腐鼠の奴ばら」である。いつの世も若い者がその主導権を担い行動をおこす。それでも変革が起こってきた際には真っ先に白旗上げて、それに従い後ろからついて行こう。そして、ほっとして微笑もう、良かったと。そして、少しは人類が生き残れる道に貢献しよう。

近況報告、晴耕雨読時々仕事時々山。

## 農に勤しむ

3部 津金 敏三 (2023年9月28日)

親が農業者であったお陰で、定年後農作業を引継ぐ事が出来ました。それまで見よう見まねでやってきたお米と野菜の栽培を自力で始めました。

大変な作業は、草刈りです。草刈りは、農に勤しむ上で避けて通れない最初の関門です。段々田んぼと畑の畦畔と土手の草刈りです。その他に、林の周囲の草刈りをします。林は、中の草刈りや木の間伐をして、陽の光を入れないと、良い木にならないのですが、手が回らないので、恥ずかしながら、草が生えないよう間伐をしないで陽が当たらないようにしています。同じところを年6回行います。

種蒔きと苗植えは、収穫時期が重ならないようお米は、種蒔きを4月、田植えを5月、野菜はブロッコリーを4月から5月に植え、コーンは4月末から5月初めに蒔きます。この時期は、霜の心配をしながら、雨の降らない日に最優先で行います。仕事をこなすことだけに充実と自己満足を感じてやっています。そのあとは、追肥に土寄せ、除草剤、殺虫剤、殺菌剤等の散布を行いながら、成長を見守ります。

6月の下旬から7月上旬にブロッコリー、7月末から8月上旬にコーン、9月の後半にお米の収穫を行います。販売相場を見ながら、予想以上の価格で売れることを期待して作業に勤しみます。販売できない撥ね出し品を近所の人達に分けて上げて、美味しかったと言って貰った時の喜びは、何にも代え難いものがあります。

自家用野菜も春、種を蒔きます。カボチャ、夕顔、ネギ、ホウレンソウ、二十日大根、レタス、キャベツ、キュウリ、トマト、ナス、ピーマン、枝豆、インゲン豆、ニンジン、ジャガイモ、サツマイモなどです。夏には、大根、白菜、蕪、野沢菜、タマネギの種蒔きをします。秋には、ニンニクの種を蒔き翌年の6月に収穫します。大根は沢庵漬、野沢菜は野沢菜漬にします。上手く出来ないものも沢山あります。無農薬・減化学肥料・有機堆肥栽培を行いますが、野菜の葉っぱは幼虫のせいで穴だらけになり、水をくれながら取り除くのですが、大半は葉っぱの陰に隠れて取り除けません。蛙が住み着いて幼虫を食べて助けてくれます。我々は、虫に食われたキャベツや白菜を食べることになります。雨の降らない日の水くれ、草取り等手間は、販売作物以上に掛かりますが、農に勤しむ楽しみは、自家用野菜にあると思っています。一番の楽しみは、出来たものを子や孫と食べる事。食べ切れないほど出来るので近所の皆さんにお裾分けすること。肉体的苦勞は多いのですが、半自給自足の快適な食生活を送っています。味の方は、気候や標高（高い方が日中と夜間の温度差が大きく甘みが増すと言われています。）土壤によるので、経験を積みれば良くなるという訳には行かず、今年は美味くないと家族から言われることがあります。70代も、健康で体力を維持し、半農半<sup>エックス</sup>の新しいスタイルで農に勤しみたいと思っています。皆さんにも遣り甲斐が在って、いずれは楽しくなると思われる家庭菜園をお勧めします。

## 京都の話

3部 中島 毅 (2023年9月13日)

私はこれ迄仕事の異動に伴い、二度の大阪での生活を送った。最初は三十代の終わりに一年、二回目は四十代半ばに行き、六年半を過ごした。

東京からの異動であったので、当時は関東とまったく違う感覚に非常に興味が沸くと共に、仕事・生活面でいままでのやり方では通用しないという戸惑いも多くあった。こういった感覚の違いに、やはり「習うより慣れろ」という考えの基、大阪をはじめ近隣を歩いて廻った。その一環に京都散策があった。

京都という街は、桓武天皇が唐・長安の律令制度にならい長岡京に続き平安京で都を開き政治を行った処だ。街は御所を中心に中央に朱雀大路が延び、道路は碁盤の目の様に敷かれた。都の内部は、御所と宮中に関連する人の住居のある「洛中」とそれ以外の一般の人が住む「洛外」に分けられ、その周囲を右から東山、北山、西山の三山が囲んでいた。

私が散策の中で一番気に入っていたのが「洛東・東山」への散策で、東山を訪れるには四条河原町で電車を降り、四条大橋を渡ると参詣路が東へ延びている。通りは両側に祇園の街が広がり、華やかな雰囲気が漂う。

つきあたりの八坂神社を通り「ねね」が秀吉を弔った「高台寺」を経て進むと、その先に観光客にも人気の「二年坂」「三年坂」がある。道の両側はお土産物屋、おしゃれなカフェ、食事処が並び参詣客を誘っており、昔を思い起こさせる街並みが続いている。坂を上ると清水坂へ出、あの懸崖造りの舞台で知られる「清水寺」へと至るのだが、この祇園から清水へ続く参詣路は、京都らしくあでやかで風情にあふれ、歩いていて楽しい場所だ。

明治の歌人、与謝野鉄幹の妻、晶子がこの界隈を歩いた時に詠んだ歌に

### 「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」

というのがある。鉄幹との新婚生活の喜びを通り過ぎる人に照らしたものとされているが、何かそんな情景が出てくる様な気がする。

清水寺の上方には鎌倉時代創建の「南禅寺」が建つ。三門も方丈庭園も立派な寺なのだが、一つおもしろいのはすぐ脇に赤レンガ作りのアーチ形の水路がある。これは明治時代、京都府が京都の近代化の為に工業用水、生活用水を必要とし、琵琶湖からひいた疎水だ。「水路閣」と呼ばれ、この後形を変え京都市中へ続いて行くのだが、最初に見た時は「何故こんな所にこんな物が」と違和感を覚えた。しかし何回か見ていると何となく馴じんでくるから不思議だ。ここには鎌倉時代と明治時代が併立して共存している。

更に上方に進むと疎水の土手沿いに「哲学の道」が続いており、自然の中の散歩道で非常に気分が良い。確かに物思いにはよい処だ。

道を上り切ると、今度は室町時代に建てられた「慈照寺（銀閣寺）」が現れる。この寺は八代将軍・足利義政が戦乱の世に嫌気がさし、政治を捨て文化を取り、月を観て過ごそうと開いた寺だ。質素な寺の前には東山から昇る月を写し出す池があり、横に月の光を照らす「銀沙灘」（ぎんしゃだん／花崗岩の砂利からできた白い庭）がある。

「わび」「さび」にも通ずるといってしっとりとした落ち着いた佇まいだ。

ここ迄三つのコースを歩いたが、これは東山の一端に過ぎない。京都の街というのは、歴史の中の時代、時代が重なり合い、古代から近代そして現代迄もが併立、併存している。訪ねて行くと一つ一つの時代の重みと千年と言われる長い歴史の重厚さをひしひしと感ずる。

大阪に住んでいる時にある関西人が「関東はたかだか徳川以降の四百年だろう。関西はそれ迄の歴史がある。」と言った。（その人は鎌倉は除いている）確かにその通りだ。徳川幕府が江戸に政治・文化を開き日本の中心を持って来たが、それ迄の中心は関西にあり、宮廷のある京都であった。この重みと長さを感じずには歩いて見ないとわからない。

さて、私の異動当初の戸惑いもこういった散策で大分和らいだ。そして、楽しませてくれ、生活も賑やかになった。付け加えるならば、散策の帰りに居酒屋に立ち寄って食べた京風味の料理はとてもうまかった。いえ、美味しかった。

## 名札

3部 ニツ木（伊東） 淳子（2023年10月3日）

あァー、アレ何だっけ・・・画像は浮かぶのに名前が出てこない。

あ〜気になる。

近所の生垣の植栽名が思い出せない。この前、仕事で使ったばかりなのに、何だっけ。

顔は出てくるのに名前が出てこない、映画のシーンは鮮やかに、それもどうでもいいディテールまで出てくるのに、題名が思い出せない。（こういう事、最近多くないですか？）

あ〜ホントに気になる。

そこは広いとも狭いとも言えない畑のような場所。境界さえもはっきりしない広がりには10cm角ぐらいのキューブが縦横に数限りなく並んでいる。キューブは柔らかい土をギュッと型に詰めて抜いたようなもので、よくよく見れば形や色が少しずつ違っている。

渋谷のスクランブル交差点を上からみると群衆だけれど、歩道に下りればひとりとして同じ人はいない、そんな違い。

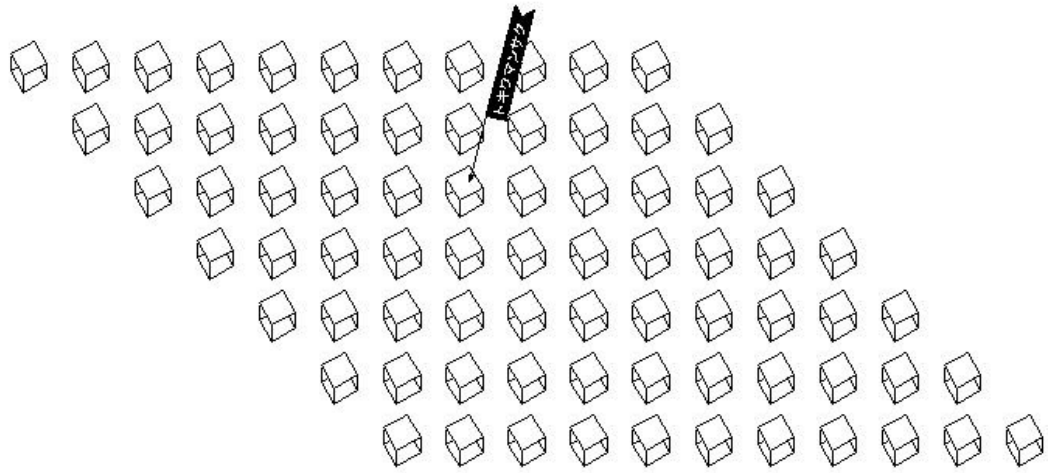
キューブはまだしっかり形を保っているもの、カチカチに固まって石のようになったもの、ひび割れて風化しながらも元の形をかるうじて保っているもの、複数が合体してひとつの固まりになってしまったもの、様々な有り様のキューブが延々と並んでいる。なかには昔ここにキューブがあったんだなという痕跡だけの場所もある。キューブが作られた時は一つ一つに名札がついていたのだが、最近その名札が取れて行方不明になることが多くなり管理人の私は名札を探してキューブの敷の間を行ったり来たりしていることが多い。これ、私の頭の中にある記憶のイメージです。

痕跡だけ残して消えたキューブはおそらく数学ⅢB。（とにかくあれいらい一度も使ってないし。）最初に名札をつけ間違えるとそれ以来ずっと間違っただまになる。恥ずかしながら未だに「おおざとへん」と「こざとへん」、「借方」と「貸方」、「オルチニン」と「オルニチン」は何度でも間違ふ。あまり何度でも間違っただ修正、修正しては間違ふを繰り返すので、更に混乱している。もう人生も残り少なく使う機会も減るだろうから恥はこのままにして人前で使うのはやめておこうと思う。

そのうちにキューブは風化してサラサラの砂状になり畑はたぶん砂地になっていくのかもしれない。それはそれでいいのかもしれない。

通りがかった時にたまたま剪定をしていた生垣の家主に名前を聞いてみたら、「トキワマンサク」という答えが帰ってきた。早速、キューブに名札をつけておいた。

あ〜スッキリした。



改装した小児科の壁に絵をかいてというリクエストがありおチビさん達を驚かそうと原寸大で鯨を描いてみましたが、あまり驚いてはくれませんでした。子供は正直ですね。最近の建物は既製品の組み合わせばかりで既視感のあるものが多いです。昭和人としては物足りなく思うので手仕事のスパイスをちょっと加えています。(蛇足ともいうらしい)

## てんてこ舞いの毎日

3部 松田 光明 (2023年9月28日)

我が家は今年正月からてんてこ舞いの毎日です。

正月に埼玉に居る娘がこちらに戻ることにした、そのために裏(我が住居のとなり)にある建物を取り壊して家を新築したいと言い出しました。今は亡き両親が住んでいた建物で、私が別荘兼アトリエ兼道具置き場・作業場として使っていました。両親が使用していた物もまだ残っていました。息子・娘の学生時代の荷物もそのまま置きっぱなしで、冷蔵庫・洗濯機合わせて6台ありました。

6月頃の解体が決まり、1月から親の物、自分の物、子どもの物を片付け始めました。清陵時代に使用したノートも、教科書もありました。出来の悪い数学のテスト用紙もありました。懐かしく読んだりしていると時間ばかり過ぎ、肝心の整理は進みません。

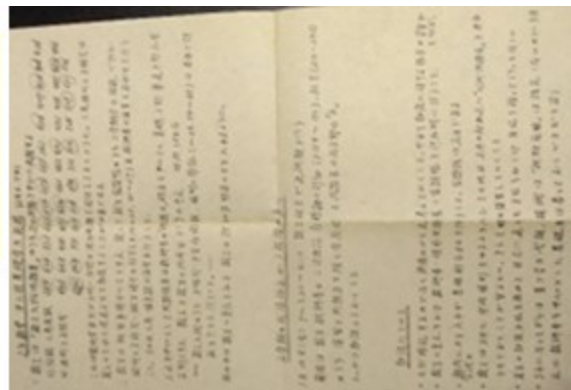
そうこうしているうちに、2月に娘から妊娠したと連絡がありました。なかなか子供に恵まれず家内と孫は無理かなと半分あきらめかけていました。出産の予定はちょうど古希の会の頃です。この年で初孫です。無事に生まれることを願っています。

暖かくなり家の外の片付けも加わり、草木も芽吹き始めると例年の草刈り等の作業も始まり一層忙しくなりました。整理作業によるストレスの為かGWに突発性難聴で右耳が全く聞こえなくなりました。入院治療を断り自宅での薬服用で何とか回復しました。

解体は終わり、今月から新築工事が始まりました。娘はリモート勤務も終わり産休に入り里帰り出産のため現在は同居しています。

新築工事は施主でもない私が工事関係者と交渉して落ち着かない毎日です。

コロナに対する感染症対策のため今はあまり出歩かないようにもしています。身の回りの整理は早めに取り掛かることが重要、意外と時間がかかります。昔を懐かしみ廃棄に迷います。妻や子と趣味や価値観が異なると、残された「物」は負担になります。てんてこ舞いの毎日ですが、これからの「物」に対する姿勢を考える機会となりました。



左：教科書 右：2年数学第二回基礎学力の範囲 中ほどに2学期の成績評価が1段階の者は追試と下段には勉強についてが記載

## 女の子、女子生徒学生、女性・・・、ジェンダーフリー、、、 などなどイロイロ変わって女性進出めざましい今を振り返る

3部 マディーン啓子 (2023年9月16日)

皆様お元気ですか？

2023年異常な猛暑が続く秋です。先日岸田改造内閣発足前に女性閣僚が何人入るかとか、諸外国と比較して話題になっていました。が巷では、会社、工場、営業所、各事業所などで女性の進出はめざましく、ところにより女性だけで回している仕事場もあります。

当方は年齢もあり医師としての医療第一線は危うく、退いて人間ドックと会社等の健診のみの健康管理センターに務めております。最近ビックリしているのは、会社等の健診で来られる方の半数近くが女性、また料金の高い人間ドックでも管理職/経営者/外国駐在員等一昔前には考えられなかった領域に女性がかかりいることです。またタクシー会社のドライバー雇用時健診には若い女性も増えております。つまりは若いチャーミングな運転士のタクシーが結構走っているのです。大型長距離トラックの女性運転士も健診に来ます。どうも女性進出が遅れているのは政界が一番かもしれませんね。

私たちが清陵に通っていた頃は、女学生は少なく、女性陣だけスミッコで小さくなっていった時代でした。体育も女子だけ軟式テニスに追いやられ、やっと男子に混ぜていただいたサッカーでは、男子がびびって引いていました。スミッコで小さく萎縮していたのは私だけ??? かもしれませんが、大学に行っても男子学生の注文は結構聞いてあげて、控えめにしていた気がします。

最近、男女平等（いえジェンダーフリーも）と言われますから万人平等の雰囲気があり、家庭で食事を作る男性もいますし、朝必死に子供を保育園や幼稚園に自転車で送っているお父さんも結構な数です。時代は変わりました。

ところで女性の社会進出を支えてきたのは、なんと言っても進化を続ける家電製品の一助もあります。私たちの10代は、家庭の主婦がタライで粉/固形洗濯石鹼と水で手洗い洗濯⇒そのうち一槽式手絞り装置の付いた洗濯機⇒程なく二槽式洗濯機（今も販売在り）⇒そのうち一槽全自動洗濯機⇒家によってはドラム式乾燥機能付き洗濯機を使い、水に触らずに洗濯し、他の仕事をする時間が持っています。料理は、七輪/かまど⇒そのうち一口の石油/ガスコンロ⇒二口ガスコンロ⇒システムキッチンガスコンロ/IHクッキングヒーターとなり、電子レンジも登場。料理しなくてもスーパーでお惣菜が買え、冷凍のパック食材は電子レンジでチーン。なんとウーバーイーツを使うヒトまでいます。食事の準備は楽に。昔はかまどの火起こしから大変でしたでしょう、女性が仕事に就くなどほとんどあり得なかったでしょう。女性の正規時間の勤務も楽ちんラクチンになりました。

ここで思い出したのは、昔の子供雑誌、主にマンガ雑誌ですが、将来宇宙に行ける頃にはロボットが調理してくれる話が出ていました。ロボットではないものの電子レンジはま



さに魔法の調理器、冷凍のパック食材は電子レンジでチーンして料理完成です。子供の頃の夢は宇宙旅行より先に、料理の世界で現実化しました。アア、すごい時代をアレよアレよという間に過ごしてしまいました。50年前の浦島太郎が現れたら腰を抜かすことでしょうね。

と、とりとめのない話になりましたが、最近ビックリしたお話などを書きました。

浦島啓子でした



🇮🇹 大型客船 COSTA VICTORIA  
(約7万5千ト/全長約253m  
/全幅約32m) の接岸を担う乗組員。彼女の立つ場所は船首真下の  
の印部分 (下の写真)

📷 写真提供：窪田敏 (2点)  
Capt.KOBAYASHI (小林正和君・3部) からこれらに「イイね」あり

🇮🇹 出港の放水セレモニー@横浜



## 余生と第二の人生

3部 矢ヶ崎 崇 (2022年9月30日)

古希を過ぎて思うこと一齣。以前は定年後の人生は余生と言われていましたが、定年後三十年余りがあり昨今これは余生ではなく第二の人生と言われていました。第一の人生で失敗しても第二の人生をうまく過ごせばその人の人生は成功でしょう。いかに第二の人生を歩むかが大事になります。人生の前半は自分や家族の生活を守るのに精一杯であり、多かれ少なかれ社会や他人に迷惑をかけたたり世話になっています。せめて後半は社会に恩返しをする時代かなと思案しております。

歴史の上では過去のスキルを活かして活躍した人、全く違った世界で業績を上げた人など様々です。前半生でうまくいかず後半生で名を残した人をみますと鴨長明は歌人としての名声は得られず失意(?)ののち隠居し「方丈記」を遺した。

江戸時代の俳人滝瓢水は富裕な船問屋を没落させたあと俳人として名を残した。「浜までは海女も蓑着る時雨かな」「手に取るなやはり野に置け蓮華草」など

他に晩年の偉業としては伊能忠敬が五十歳で家督を譲り測量の勉強を始めた。ゲーテが「ファウスト」を書いたのが八十歳。カントの「名著」は七十四歳です。当時の年齢は現在の七掛けといわれるので五十歳は今の七十歳位。まだまだ楽隠居は早い。

我々に残された時間は十年?二十年?過ぎ去った年月とこれから感じる星霜とは違うとしても、いずれにしても早く過ぎ去ってしまうことでしょう。

時の流れが早く感じるのは現代人だけか。光陰如箭、露往霜来、日月逾邁、烏兔匆匆、兔走鳥飛など時が過ぎ去るのが早いことを示した語が幾つもあります。これは時間がゆっくり流れていたであろう古代においても、当時の人々は時の流れを早く感じていたことになります。

今後十年がどのくらい早く過ぎるか、十年前の出来事を見てもみますと、松井秀喜の引退、ロシアはプーチン、韓国は朴槿恵が大統領に、中国は習近平が国家主席にそれぞれ就任、東京スカイツリー完成、ロンドン五輪、第二次安倍内閣発足、山中伸弥氏ノーベル賞受賞など。あれから十年、あっという間かな。二十年前はというとソルトレークシティ冬季五輪、首相官邸完成、日韓共催ワールドカップ、小柴・田中両氏ノーベル賞受賞、中国は胡錦濤が国家主席に、韓国は盧武鉉が大統領に就任、北朝鮮から拉致被害者五人帰国など。これはちょっと昔の感があります。同じ時間が過ぎればもう九十歳。(既にもいないかも)

五歳児の一年は人生の五分の一だが、七十歳の一年は七十分の一のため、年とともに時の流れは早く感じるようになる、と何かの本にありました。このスピードで十年二十年が経過するため、第二の人生もどのように過ごすか早く決めて実行していかねばと思っています。それまで生きていければの話ですが。

## 今の自分

4部 赤羽 博巳 (2023年10月5日)

まず紙面を借りて報告します。

前回の会の宴席に於いて、体重の話がでて、「自分は、これから10kg減らす」と言ったところ、周りからは「無理、無理」との声が大半でしたが、見事(?)ピークからは15kgの減量に成功し、ほぼ年に1kg程度、今も減り続けています。ズボンのウェストサイズは「-9cm」。72歳となった今まで、入院するような大きな病気もせず、何とかここまで来たと思うこの頃です。

さて、人に出会いまた集まりでの近頃の話はまず、「健康に関する事」が一番の話題となっています。男性の平均寿命81.05歳、自立した生活ができる期間と言われる健康寿命72.6歳と言われることから自ずと避けられない話題と言えます。認知症が大きなニュースとなっている中で、健康寿命の平均に到達していることに恐れを抱かざるをえない状況にあり、誰にも迷惑をかけず、自分が自分であることをわかっているまま、「ぴんぴんころり」が出来たらと「心の中で」願っている自分と言えます。

今の生活とさらに健康状況についていうと、まだ会社勤めをし、毎日出勤し、休日は5月から10月頃までは、家の周り・留守の隣家の周り・町内のボランティアの草取りに明け暮れ、11月から2月頃までの休日は「蕎麦打ち」をすることが多くなっています。少しでも動くことが、大事と思っていますが、ここ数年歩くことがだんだん困難になってきてしまった状況にあります。何年前か、名古屋への出張で、名古屋駅から会場まで歩いているときに、突然「右足の力」が抜け、歩けなくなり、しばらく道端で休んだところ何とか歩けるようになったという経験をしました。「何が何だかわからず、このまま動けなくなったらどうやって帰ればいいのか」一瞬途方に暮れた自分だったと言えます。今年の年賀状の中に2歳上の先輩が、階段から落ちて半身不随となり今は車いす生活をしているという便りがあり、ゴルフの好きな元気な人であったことを思い出すと驚きとともに、自分も階段を上り下りする時に足の力が突然なくなる可能性があることから、必ず「手すり」に頼れる状況を意識している今日この頃です。

数年前、脳ドックでは「あなたは脳の血管が原因の病気の可能性は無い」と言われ、毎年の健康診断では、ここ2年ほど急に「要観察」が2カ所できてはいるものの、まだまだやりたいことを見つけ、元気でいたいと考えています。大リーグの大谷選手をはじめ、近頃、いろいろな日本のスポーツが、世界レベルになってきていることに勇気をもらい、相当な努力をして体作りをしているのだろうと思いをはせ、自分にもまだまだできることがあるはずと考え、今度は「体力増強」を目標に掲げ、次回の会に報告できるようにしたいと考えています。

## 「若さ」と「健康」を保つには

4部 和泉 桂子 (2023年9月26日)

私の趣味は、合唱とアゲハの産んだ卵を幼虫→蛹→蝶へと見守ることだ。

合唱は所属合唱団の年1回の定期演奏会の練習と、今年はモーツアルトが結婚式をあげたウィーンのシュテファン大聖堂でモーツアルトの命日12月5日、永眠したとされる0時から行われるミサでモーツアルトのレクイエムを歌うための練習にも参加している。

歌うことは呼吸機能維持、長時間立って演奏するためには脚力維持、音取りや歌詞を覚えることはボケ防止に良い。

アゲハの幼虫はほっておけば勝手に蝶になるのだが、狭いベランダでは過保護にケアする必要がある。始まりは30年近く前、息子が中学1年の時「定点を決めて1年間観察すること」が理科の課題となったことだ。自宅マンション駐車場の隅にある小さな植え込みの金柑の木にアゲハの幼虫がいたのでそこを観察することにした。課題が終わった翌年からは、ホームセンターで幼虫の付いたミカンの木を買ってきてベランダでケアを始めた。柑橘類を食べたら種を植えていくとベランダは柑橘類の木だらけになった。そのうちに我が家のベランダも「蝶の道」になったようだった。お母さん蝶は軟らかい新芽に卵を産むので、幼虫が大きくなると大きな葉っぱに移したり、隣の枝に橋をかけたりして蝶が飛び立っていくまでの過程を楽しんだ。10年ほど経った時、向かいの家の屋上にスズメが巣を作り、幼虫が食べられてしまうようになった。親鳥は青虫にならないと食べないが、スズメの子は餌取りの練習のためか青虫になる前のまだ小さい黒い幼虫を取って床に擦りつけるようになった。色々試みたがスズメには勝てず、一旦ミカンの木をすべて処分した。

数年間やめて花作りをしていたが、ベランダにあまり出なくなってしまう、時々アゲハが飛んでくるのでまたミカンの木を買ってきて再開した。食べた後の種を植えることを繰り返しベランダは以前にも増して柑橘類だらけになり花がほとんどなくなった。夫には「うちのベランダは葉っぱばかりで色気がないと」言われるようになったが、幼虫が大きくなり、立派な蝶になって飛び立って行くのや、蛹が越冬して春旅立っていくのは見送るのは本当に楽しみだ。

青虫には蜂が卵を産み付けるので蜂も来るし、蛹の周りにはクモが巣を張って羽化するのを待っているし、小さなベランダだが自然には驚くことがたくさんある。孫や園医をしている保育園に幼虫や蛹を届けて、子どもたちも楽しんでいる。

子育ては終了したが、「育てること」「誰かのためや何かの役に立つこと」は“元気”でいるための秘訣だと思う。「若さ」と「健康」を保つには、出来るだけ長く趣味を楽しむための体力、健康を維持し、周りの人達とその楽しみを共有することだと思っている。



## 湿原聖地(短歌)

4部 小口 信治 (2023年8月23日)

### 湿原聖地

#### 踊場湿原

登りつめふいに開ける視界には湿原のあり 踊場といふ  
湿原は神の田圃か麦草のなびくなかゆく女男(めを)の見えつつ  
湿原は黄褐色にはや変はりしづけき空の光ぞしづむ  
池塘(ちとう)には谷地坊主あまた赤み帯び夕陽のなか影を濃くする  
池のくるみ かつて嬬歌(かがひ)の行はれいかなる踊りを女男はしにけむ  
カボッチョとふ円き小山も褐色に変はりゆくかな夕陽あびて

#### 八島湿原

湿原を聖地としたる時代あり嬬歌求めて女男ぞ来れる  
さざ波は醜き顔を映したり「山彦」おもふその悲嘆はも  
みづからの容姿(すがた)に見とれ「杜若」池のへに花と化すもあはれぞ  
杜若の死を追ひ溪に身投げせし山彦の声今も聞こゆる  
雪残る湿原の風つめたくて風の光りて頬をすぎゆく  
湿原に雪解けはじめ風の這ふ池塘の泥炭(どろ)はいまだ凍てつつ

「短歌」(角川文化振興財団) 2019.5 より

### 御射山・湿原

御射山やときたま梅雨(つゆ)のかぜ吹きて齒朶の波立つ段丘も見ゆ  
茎細く小(ち)さき黄の花揺れをりて梅雨の草地の丘を下りぬ  
梅雨雲の池塘に降(お)りる夕べにて蛙の声は底ごもりつつ  
浮島に白点々と咲ける花梅雨の曇りに星のごとしも

「朝霧」2018.3 より

### ガボッチョ焼けて

曇りたる黄の茅原のつづく果て焼け焦げて黒き影となる山  
山火事にガボッチョ山の裏側の黒く焼けたり頭巾のごとく  
煤けたる笹をしばらく見てゐしが心ぞ重く踵を返す  
山火事の及ばぬ辺り今年またニククウキスゲの芽は出ではじむ  
もともとは野焼きによりて保ち来し霧ヶ峰なり火入れを願ふ

「現代短歌新聞」2023.7 より

注：以上は、筆名、茅野信二の発表による

## 夜の諏訪湖

4部 小口 信治 (2021年12月16日)

夜のバイトを終え、諏訪湖沿いの道を駐車場まで歩く。ほんの百メートルほどの距離だが、湖から来る風がけっこう寒い。おのずとジャンパーの襟を立てた。湖沿いに並ぶ比較的大きな桜の木を白い電飾が飾り、その木の形を縁取っている。ホテルの庭には緑色の草をおもわす電飾がともし、またツリーの形に青い電飾が彩っている。冬の街の趣である。それらを眺めると、いっそう寒さが際立つ思いがする。

湖岸の道を歩きつつ、対岸の、下諏訪や岡谷の街、湊地区のあかりがちかちかと静かに点っている、それを目に追うと、心がいつしか凍てつくような気がする。

月が雲に入って久しい。くろい波が立ち岸に打ち寄せるのが、かろうじて分かる程度である。闇の静けさの中で、その音だけが聞こえる。初島という人工島がもっこと黒く膨らんで見える。まるで鳥の栖のようだ。

月の見えず、闇の中に横たわる湖は、対岸の街のあかりがあるため、真っ暗闇ではないが、どこか原始に還ったような趣がある。原始の諏訪湖はもっと広く、真っ暗闇の中を怪しく横たわっていたのだろう。古代の人々は、どんな思いで湖を見たのだろうか。

## 霧ヶ峰とオオカミ

4部 小口 信治 (2022年8月26日)

私は、霧ヶ峰に来る度に、鹿が増えてしまったことを思わないわけにはいかない。すでに、車で霧ヶ峰線を上っているとき、鹿が二、三頭、道路沿いに固まっていたり、道路を横ぎるのに、しばしば遭遇する。角間新田地区を過ぎたあたりから、気をつけているが、あるとき、けっこう大きな鹿が目の前で道路を横ぎり、右手の雑木の藪の中に消えていった。その大きな肉付きのよい尻をほればれと車窓から眺めたが、それは雌鹿に違いないと思った。今でも、ときおり、その尻が浮かんでくることもある。

霧ヶ峰高原は、ニッコウキスゲの一大群落で全国的にも有名であるが、鹿が、花の咲く前の芽の出るころ、その芽を食い荒らすことが大きな問題になって久しい。やはり、鹿が増えすぎているのだ、天敵もなく、どんどん数が増えていくのだろう。そこで、霧ヶ峰車山肩に山小屋を創設し経営する手塚宗求氏が、霧ヶ峰にオオカミ——無論、ヨーロッパ産の——を放ったらどうかと、提言したことがあった。しかし、残念ながら、それは今日まで実現していない。恐らく、オオカミが人に危害を加えることなどが心配されたのだろう。氏も亡くなった。

私は、かつての霧ヶ峰を想像する。それは、今や絶滅したニホンオオカミが、群れをなし、鹿を追い詰め噛み殺す景である。なだらかな高原の斜面を鹿の群れが逃げ、オオカミが追う、その場面をいくたび想像したことか——。結局、私の考える霧ヶ峰は、もはや現実にはないのかも知れない。

## 岩森にアパートを借りて

4部 小口 信治 (2020年11月17日)

蕪崎の駅のホームに立ち、上り電車を待つ間、ちょうど真ん前には、金ヶ岳や茅ヶ岳などの山脈が見え、左手に目を移すと八ヶ岳連峰の赤岳、権現岳等が見える。そして、冬場は、その八ヶ岳の方角から諏訪口にかけて厚い冬雲に覆われていることが多い。また、冬から春にかけては、まさに八ヶ岳嵐といってよい冷たく乾いた風が吹き荒び、立っているのも危ういほどのときがある。

私のアパートは、甲斐市岩森というところだが、塩崎という駅の北口を出て、すぐに急坂をのぼったところに八幡神社の小さな境内があり、そこからやや平らな土地が続くがまた坂になり、その斜面のすぐ下の所にある。すぐその斜面の上を県道が走っている。私のアパートからは、直接、甲府盆地の夜景を見ることはできないが、外に出ると、中央線の線路を隔てて、モール・アピタとラザウォークの建物の明かりが正面に見える。そうして、その辺りから、左手にかけて甲府盆地が広がり、その夜景がいたく心をとらえる。

また、私のアパートは、二階建てで、私は二階への階段をのぼったすぐのところの1号室に住んでいるが、狭いワンルームである。南側に窓が付いていて、帰宅するとまず窓を開け換気する。台風の折だけでなく、冬から春にかけても、まさに八ヶ岳嵐で、突風が吹き荒れることが多い。ただ、窓は南側にあるので、音を立てるものの、窓ガラスが壊れるというほどではない。トイレは狭く、かたちばかりのウォシュレットが付いているが、そこに居るとき、換気扇の口から、風のびゅうびゅう鳴る音が聞こえてくることがある。どのような作りになっているかわからないが、空の風の音がよく聞こえるのだ。

岩森の私のアパートのすぐ下には、あばら屋と呼んでよい人の住んでいない家があり、そこはトタン屋根だが、ところどころはげ上がり、それを抑えるために石が幾つも置いてある。ただ、風の強い日にはその石がはずれトタンの切れ端が舞い上がりこちらに飛んで来はしないかと、その脇の道を歩きながら、身構えることがある。

その道のすぐ近くが三叉路になっていて、反対側の隅に馬頭観音の古びた石碑があり、その横に小さな石地藏が七体——これも相当摩滅しているが——並んで居る。多分、江戸時代のものと思われるが、風雪に堪えてきた面影を感じさせる。また、その道は急に坂道になっているが、その手前の右側の庭——といっても空地といった感じで石がごろごろとあるが——その隅に、古びた石祠が二体あり、その後ろに神さびた檜の樹が化け物のように立っている。私には、これはミシャグジ様ではないかと思われるが、確かなことはわからない。またその庭の反対側には、山梨によくある、丸石が幾つか積まれていて、この辺りが、相当古くからの地域であることが窺われる。

山梨県には、丸石道祖神や丸石の置かれた塚が多く、中沢厚氏の研究もあるが、これが諏訪に入ると、石棒になるのも、興深い。否、むしろ、山梨の丸石神の方が珍しいかも知れない。そして、石棒は男根を暗示していることは確かだが、丸石が何を意味しているかはいまいち分からない。それにしても、山梨県に丸石が多いのは、なぜであろう。山梨県に山から



下る河川が多いことは確かであるが、長野県も、それなら、同じであろう。もっと、人種とか宗教的な事柄が絡んでいる気がしてならない。

「住めば都」というが、岩森にアパートを借りて、六年。諏訪とともに愛着を深める昨今である。

## 線路の上の傘

4部 小口 信治 (2020年11月17日)

梅雨の雨が降り続くなか、一日の授業が終わり、講師の私は傘をさしながら日野春の駅まで来た。4時55分発の電車だが40分にはホームに入ってくるので、その時間を計って来るのである。改札口から駅構内に入り跨線橋を渡って2番線ホームまで来たとき、すでに十人ほどの生徒がそのホームに群れていた。雨はやや小降りになったとはいえ、まだ降り続いていた。ホームの先のホームのとぎれるちょっと先にいつもの電車は止まっていて、どうしたのだろう、と思うやいなや、その前の二本のレールの上に、女ものの深緑色の葉っぱの面の描かれた傘がちょうどこちらに向けて、開いたままの状態で見捨てられていた。その近くのホームの上に、傘をさしていないわが校の女子高校生が心配そうに佇んでいた。私の教えない見知らぬ生徒だった。私は近寄ると、駅員に知らせたかと聞いた。すでに知らせている旨をその生徒は話した。ただ、三、四分経っても、駅員が来る気配はなかった。しばらくして、線路の上の傘をこれから撤去します、という館内放送が流れた。しかし、一、二分経っても、駅舎から駅員が駆けつけてくる気配はなかった。すると、また、同じ内容の放送が流れた。——と、私の思っていたのとは違い、電車から、運転手らしい男性と車掌らしい女性の駅員が小走りに走って来た。そして、その傘を線路から取りあげると、ホームにいた持ち主の女生徒に渡し、また、小走りに電車に戻っていった。その女生徒へのお咎めはいっさいなかった。私は、少し安堵した。その後、電車は、ホームにゆっくりと入って来て、私たちは、電車に乗ることができた。線路の傘の撤去と確認のため出発が遅れて申し訳ございません、との車内放送があり、電車は約五分遅れで駅を後にした。

恐らく、すぐに駅員が駆けつけて来なかったのは、それなりのマニュアルがあるからなのだろう、また、駅舎には、駅員も少なく——もしかして二名ほどか——、その場を離れるわけにも行かなかったのかも知れない、そんな風に私は思った。傘一本のために、思いがけない迷惑を掛けることもあるのだ。お咎めのなかった女生徒も、何かを感じたに違いない。

## 古希を経て

4部 小澤 龍太郎 (2023年8月23日)

昨年お蔭様で古希を迎え、コロナの流行に遭遇し生活も大きく変わりました。サラリーマン真っ盛りの時期でなかったものの「検温」に始まり「消毒」「人数制限」「あべのマスク」「PCR」「オミクロン株」「在宅勤務」「リモート会議」「オリンピック他の延期」など新しい対応に多々接することになりました。本来ならば、平穏な日々を過ごしていたかもしれませんが、私の古希以上に、この三年は世界の歴史にとっても大きな変化をもたらした時期であったと感じます。

私事ですが、コロナの危機を感じ令和二年埼玉県から岡谷市にUターン生活になりました。鶴の一声でなく孫の一声で家族諸共八人が埼玉県から岡谷市へ転入致しました。場所は、家内の実家のある岡谷市湊で岡谷南部中学校の裏です。近所には牛山尚也君が在住、清陵ではないのですが、南中出身の濱てる・濱今朝平さんの近くになります。近所づきあいの中で南中出身者の話題がよく出てきます。

Uターン生活といえども、年金頼りでなくアルバイト会社を創業し十年目に入りました。長野県・東京都・埼玉県他で月に十日程仕事しています。中央道・圏央道・首都高を気儘にドライブ、特急あずさを使えば、都内へのアクセスも気になりません。逆に諏訪の自然に50年ぶりに浸かることでリフレッシュし、新たな発見が多々ありました。

春は山菜、例えば蕨のあく抜きには、小池忠男君生産の蕨用灰(一袋200円程)がJA諏訪田中線にありました。普通、蕨のあくを抜くには重曹で一晩かかりますが、数時間であくがぬけ柔らかくなります。大変驚きました。是非ともお買い上げ頂きお試してください。また、お酒の美味しいこと、特に「高天」。ワインの塩尻桔梗ヶ原産がSO<sub>2</sub>無添加で身に優しくベストです。つまみは鰻・鯉。野菜はトマトも含め旬のモノがJA諏訪で一年通して販売されています。50年間、大都会の大味な野菜に慣れ、今、諏訪の旨味のある春夏秋冬の野菜を再発見致しました。

人生五十年と言われたのは、私たち時代が生まれたころの話です。今は健康長寿の時代で次の八十・九十・百歳も夢ではない時代になりました。数年前TVで119歳の女性の方が言っていました。オセロ・オロナミンC・男が秘訣だそうです。茅野市の市議員をされた丸茂伊一さん(95歳)は、今なおスピードスケート500m・1000mにチャレンジされているとのこと、来年の海外の大会で完走すれば、「ギネス」転倒すれば「ギブス」と発言されています。

人生は、気楽に・楽しみながら前進したいと考えています。

## Beatles と Bob Dylan の名曲について

4部 小松 大蔵 (2020年3月8日)

邦題「ノルウェーの森」原題「Norwegian wood」

written by Jhon Lennon

典型的な邦題の付け間違い。wood (家具), woods (森)、直訳はノルウェー製の家具 (素晴らしいらしい)

曲の内容は、失恋の歌で別れた彼女の部屋にはノルウェー製の家具があったという追憶の曲。3拍子の名曲です。

邦題「時代は変わる」原題「For The Times They are A-Changing」

written by Robert Dylan

For (なぜかという) ,changingのあとに thingが省略されている。複数形の時代という主語を、単数形の変わりつつある物で表している。時代が変われば勿体 (的確である物) そのものが変わってしまうものだ。この曲を20代そこそこで歌ったデイラン なんという感性! 天才!

## これから生きる

4部 小松 大蔵 (2020年3月8日)

ホーキング博士は生前、50年ぐらい経過すると地球上には以下の2タイプの住み分けが、明確化すると予見された。

1 カプセル都市の中で生活する。(現在考えられているすべての便利さと経済性を満載した都市地域の内部)

2 自然の中で自給自足を中心とした田園生活者。

もっと早くにこんな世界が来るような気がする。

“なみの会”の諸君のこれから予想。あと20年生きられれば次の3タイプになっていくような気がする。(男性の場合。)

1 今まで生きてきた(日本的な資本主義)の妄想に、取り付かれた生活をそのまま続ける。

2 親から受け継いだ物や、自分が定年まで、あるいは他の職業で形作った物を整理してマンション住まいになる。

3 持ち家で中途半端、どっちつかずの生活をする。1と2の中間的な生活者。

とりとめのないことを並べ失礼をばいたしました。

## 最近はやりの「多様性の認証」と「勿体」について

4部 小松 大蔵 (2020年3月8日)

勿体 (もったい) とは、～をつける ～ぶる などと言われるが、(重要でない、取るに足りない、的確でない、とんちんかん) の反対の意味で使い、その物 (地位) にふさわしい、ちゃんとした様子、と辞書にある。もったいない というが考えてみれば納得がいく。

一億総活躍時代 (現政権が掲げている) 多様性の認証は、日本が第二次大戦を行い、日本的な資本主義の道を突き進み、生活水準が向上して、多種多様な考え方や、生活スタイルに溢れる現状を、都合よく言い換えた政治的用語になっている様に感じる

戦争に突き進んでしまった時代には、「勿体」の数、種類ともに少なかった。「勿体」の「勿」それ自体が時代 (時間の経過) によって変化するのだ。

どんな物や人が、取るに足りない、つまらない物、つまり not suitable であるか整理したり再考する必要があると感じる。もう日本には、右肩上がりの経済成長はあり得ないんだから。

## 清陵と私

4部 小松 大蔵 (2020年3月8日)

記念誌第1回の卒業写真の諸君で、卒業後も麻雀をしたり、酒を飲んだりしている諸君を1部から7部まで確認してみた。(同窓会など全体的な集まりの後の二次会などは除く)

合計16名である。さらに男子で撮影時に学生服で写っていない諸君を数えてみると、

1部10, 2部9, 3部7, 4部13, 5部10, 6部6, 7部5, 合計60名にて4部(私含む)がダントツに多い。写真のコメント(平林重夫君)のように、4部は個性的な生徒が多

かったのか?

先に述べた、卒業後も麻雀や酒の付き合いのある諸君で、16名中13名が学生服で写っていないかった。

清陵生としての服装に無頓着な者、あるいは高校生より上の年齢の服装をまねていた者、あるいはファッションセンスに敏感な諸君などなどだったのか?

私は、自然と(考えなしに) 既成概念にあまりとらわれない諸君と気があったのか?

それとも、その頃の世間の常識、高校生像、日本の未来、自分の夢、目標などに無頓着なただの18歳だったのか?

卒業後50年を過ぎた今では、本当のところは分からない。

4部 清水 光昭 (2023年9月20日)

『ウィズ・エイジングー何歳になっても光り輝くために…』(鳥羽 研二 グリーン・プレス 2011)は、2011年7月に出版された本の題名である。「ウィズ・エイジング」とは、当書籍の著者であり高齢医学を専門分野とする医師でもある鳥羽研二が、これまでの臨床と研究や思索を通して提唱している新しいエイジングの考え方(理念)を指している。

行き過ぎたアンチ・エイジングの愚を痛烈に批判しつつ、年齢を重ねることに積極的な価値を見出してゆくこと、何歳になっても、友人を作り、思考を深め、世の中の不条理に対しては声を上げ、社会の変わりように対応してゆくことが、超高齢社会で生き悩む私たちを光り輝かせる…と語りかけている。その主張は、私たちに柔軟な説得力を持っている。

私たちは、この本の刊行に仕事として関わった。編集者は岡崎保と田山雄二の2名。デザイナーとアルバイト編集者1名。仕事を進める間に、この新しい考え方は、超高齢社会をすぐそこに迎える私たち日本人のまさに私たちの世代にとって真に有益で、様々な悩みを解決し勇気づけてくれる考え方ではないかと、より深く思えるようになった。

しかし「ウィズ・エイジング」という考え方は、まだ広がりを持つには至っていないし、この本も、まだまだ多くの読者に必要とされていづつも、その存在が十分には知られているとは言い難い状況にある。そこで今でも彼らに会うと話題になるこの本を読み解いてみた。

### ウィズ・エイジングという言葉の意味と初出

「ウィズ・エイジング」とは何か?著者の言葉を借りれば、「加齢を包括的に理解し、年齢に寄り添って、年を重ねることに積極的な価値を見出しつつ、それぞれの心身の個性に対応して上手に老いてゆく…という考え方(理念)」ということになるだろうか。

自分の心と身体そして社会とのつながり…加齢とどう向き合っていけばいいか、何をどのように知っておけばいいか、この本には手掛かりが十分にあると思う。

「ウィズ・エイジング」という考え方が著者によって発表され、はじめて多くの人の目に触れたのは2009年5月31日付の朝日新聞朝刊「私の視点」欄だった。しばらく後に朝日新聞の1面コラム「天声人語」で肯定的に紹介された。編集者の岡崎は鳥羽の寄稿内容を読み、すぐに出版を考えている。

### 瞬間の謳歌から時間軸の畏敬へ

編集者は著者といろいろな場面で対話を重ねた。そして、理解を深めていく。すなわち、ウィズ・エイジングは、年をとることは避けられないこととして受け入れる。否定的に受け入れるのではなく、年はとつてもいいところに光を当て積極的な価値を見出していこうとする。時の経過に対してみだりに抵抗せず尊重しようとする。「時間軸への畏敬」である。

編集者の解説がわかりやすい。岡崎は、「以前からアンチ・エイジングには疑問がありました。『いつもでも若くありたい』と言う気持ちはわかるのですが、それはほとんどの場合『あの人よりは若くありたい、社会一般よりは若くありたい』と言う競争意識です。こういう意識から自由にならない限り安心とか平安とかいう境地は得られないと思います」と述べ、また「子どもは大人の準備期間ではありません。子どもは大人になるために生きているのではないのです。子どもはかけがえのない子どもという時間を生きているのです。同じように、老人はただ死への必然的な時間を生きているわけではありません。消化試合をやっているわけではないのです。老人は、70歳、80歳、90歳という、それぞれかけがえのない年齢を生きているのであり、70歳には70歳の、80歳には80歳の、他の年齢では経験することのできない時間を生きています。80歳の人間が50歳になろうとしたり、40歳の人間が20歳になろうとすることに何の意味があるのかわかりません。

長命は目的ではありません。長命は結果にすぎません。

上記のような考え方を持っていましたので、鳥羽先生の朝日新聞への寄稿を読んで、わが意を得たりと思い、編集者として本にしたいと思いました」(岡崎)

子どもは子どもという時間を生き、60歳は60歳の70歳は70歳の時間を生きている。それぞれがかけがえのない時間なのであり、消化試合をやっているのではない…というのだ。非常にストレートでわかりやすい。人が生きる時間の意味を示してくれる言葉だと思う。

鳥羽の寄稿内容、編集者岡崎の考え方、双方がウィズ・エイジングという考え方を良く理解させてくれるのではないか。

### 健康観、死生観とウィズ・エイジング

編集者、田山雄二の話も分かりやすい。「正確な比喻ではないかもしれませんが、100メートルを10秒で走る人と20秒で走る人と、どちらが健康かといわれれば、10秒の人でしょう。10秒の人を健康とするなら20秒の人は病気であり、治療の対象になります。つまり、健康はゼロであり、それ以外の人はいマイナスなのです。逆に、20秒ぐらいで走るのが健康だとすると、10秒で走る人は明らかに異常であり、やはり治療の対象になる……、これが健康の思想です。本書でも書かれていることですが、20歳の健康と70歳の健康は違います。突き詰めていけば、その人のベストな状態を健康というならば、それは一人一人違うものです。若いから健康などとはいえず、少しでも若くなろうなどというのはナンセンスです」。「ウィズ・エイジングは、こうした健康観から、もうそろそろ卒業しようではないかという提案であり、これまでの医学が死を敵視していたとすれば、死と仲良くしていこうという医学のすすめだと思います」

### 日本人の自然と風土に対する著者の感受性

編集者の岡崎と田山は、長い時間と何回もの対話を著者と重ねている。2人の編集者が共通して指摘するのは「ウィズ・エイジングには日本人の季節感覚、時間感覚が底流にあるこ

とが特徴だ」という点だ。そのバックボーンには医師である著者の臨床と研究があるのはもちろんだ。だがそれ以外に、著者のこれまでの生活人としての経歴や思索も大きく関わっていると思われる。

鳥羽と色々の場面で対話を重ね、話を聞いたという岡崎は、さらに次のように述べている。

「鳥羽は長野県で生まれ、厳しくも美しい信州の風土を身に感じながら育った。父親は内科の医師であったが、俳句を詠み、自然風物を愛する人であったらしい。こうした環境は、鳥羽に大きな影響を与えていると思う」

本書には、著者が別のところに発表したエッセイが部分的に収録されている。「私の紹介を兼ねて」という見出しの部分に掲載されているが、『晩秋安曇野、諏訪スケッチ 俳句カルタから』というそのエッセイ抄録は、自身の成育を内面的に語っていて、ウィズ・エイジングという考え方に繋がっていることを想起させている。

最後に、印象的な著者の言葉を掲出しておきたい。

「これから超高齢社会になって、いいことなどひとつもないと思っている若者に、新しい価値観を創造して、“年を取ることも悪くない”と思ってもらえるようにしなければならない。遅きに失した感はあるけれど、どうしたら明るい超高齢社会を迎えることができるか、若者と議論し、譲れるところは譲り、譲れないものはあくまでも主張し、貫き通していかなければならない。日本は世界のだれも経験したこのとのない超高齢社会に入ってゆく。どこにも参考書はない」

---

上記の原稿は、しばらく前に書かれた内部関係者向けのレポートから、ほんの一部を抜粋したものです。今回、清陵 73 回生の「古希の集い」に合わせて、同時に当書籍の著者の講演会が開催されることになったのにちなみ、この資料を読み返してみました。少し時間的なズレはありますが、超高齢社会を迎えている状況に全く変わり無く、この本がますます必要とされているのではないか、と思えます。『ウィズ・エイジングー何歳になっても光輝くために・・・』を読んでいただければ幸いです。

紙幅の事情でレポートの紹介には制約がありました。関心をもたれた方のために、QRコードをクリックすると、全文を読んでもらえることになりました。大変にありがたいです。



URL は Web ブラウザの URL 欄に入力してください。

<https://docs.google.com/document/d/1u3fmeBHZWGpLyXjxXRBmsfKNXs4dulE-xpGtCzYkkxo/edit?usp=sharing>

## 私と清陵 一追加文一

4部 瀧澤 伸介(2019年11月16日)

昨年の会は全員殆ど50年ぶり、私の中では昔が静止していたのにもかかわらず途方もない距離感に遭遇し、会の間中ずーと眩暈がしていた気がしていた。

そしてその全く変わってしまった皆の姿を見るにつけ、自分の変化も改めて意識した。

信州に住んでおらず駒ヶ根の自宅に帰る途中たまに諏訪と清陵を訪ねる事はあっても、現実に向き合うのは今回が初めてだったからだ。

そこが地元において何らかの機会があり、少しずつ記憶の変更をしてる人のと違う所だと思う。

そして若かったあの時代と自らが思い出され、最近特に感じる様になった我々はもう本当に終わりが近づいているんだなと言う事を再認識した。

親世代の同級会を見てても分かったが、これから段々人がいなくなって最後には全員いなくなる。

そこで会の印象と前文集の言い訳も含め、書き足りない部分を書く事にした。

私は箕輪中出身で上伊那は辰野中等を除いて進学で清陵へ来るのは自明の事ではなく、1学年上に2人、同学年は私1人のみである。

あの年代で信州の田舎では得られる知識も限られ、進学に関してはもっと多様なルート、今にして思えば大学入試検定等もあったなと後で分かった。

やはり清陵=中途半端な進学校はどこでもあの学習法は私には合ってなかったと思う。

これはその人の性向にも因ると思うが、一つ一つの学習項目をもっと深く掘り下げた=ネチネチしたやり方が合っている。

例えば英語を例にとると一つの単語についてはその語源、背景、派生語、使われ方、時には脱線してよもやま話も含め何でも(子供にはその方法で教えた、最悪は豆単)、物理では法則の理解に微分積分の立場=大学教養から等々。

これは記憶や理解が人間の場合一対一対応のコンピューターと異なって複雑に絡み合った情報のセットになっているからだと言えよう。

清陵の授業では表面的でやたらに早く感じ、一つ一つが未消化のまま同じ事の繰り返したと言う印象で、色々の方法を試すが学習効率は上がらず、絶えずじりじりしていた記憶がある。

そこでそんな不満を担任にぶつけたら、ピントが外れていると言われてしまった。

あの卒業の最後の登校日には、既に浪人する事が決まっていたにもかかわらず、もう学校と付き合いを自由にする喜びからか世の中が急に明るくなった様に感じたのを覚えている。前も書いたがその意味で放って置かれる超一流高か3流高は最適なのだ。

しかし最近コンピューターの活用に因りその人に合った教育法(ティーメイト教育)が



行われる様になって来ており、この様な問題も今では解決されつつある事だと思う。  
学習法についてばかり書いたが、我々は良きにつけ悪きにつけあの多感な時期を清陵で過ごしたという事は事実なのだ。  
そしてもう二度と若い時代に戻れない現実があると言うのも事実だ。  
ただ只の通過点とあの時代は考えていたのに、今は「清陵」は私の記憶の中で大きな位置を占めている事は確かだ。  
悪い例で恐縮だが戦争の記憶も大きい様に。

## 歴史には if は無いと言うが

4部 瀧澤 伸介(2019年11月16日)

先日11日007に登場したメテオラの修道院から鉄道でアテネに戻る途中、ペルシャ戦争で有名なテレモビレー古戦場に立ち寄った。  
100万のペルシャ軍にスパルタ王レオニダス以下僅か300人で対抗し、最後は全員が壮絶な死を遂げた所だ。  
幹線から少し外れたラミアで下車し、往復30km余りの平坦な道を持参の自転車で行った。  
戦況から推察して崖の中腹の隘路で、自転車で行くのは坂道が多く大変だろうと前もってグーグルマップで調べたところ、坂が無いのに初めは理解が出来なかった。  
行って見て分かったが、崖と海の隘路で現在はその海が後退していたのだ。  
目的地に近づいて古戦場の看板に引かれて道路から200m位入った山の麓まで行ったところ、白い湯気が立ち昇っているではないか。  
良く見たらそれはかなりの水量の温泉の川が後背の山の谷から流れ出ていて、数人の人が浸かっている、こちらが近づいたところ「入れ」と言う。  
実は私は温泉は結構趣味で、昨年イタリアでも山の中まで片道50kmも自転車で訪ねた程で、早速洗って乾いて無いパンツに履き替えて入った。  
泉質は硫化水素で、湯温は少し熱い程度で露天風呂としては最適だ。  
後で調べたらテレモビレーの由来は、テルメ+ビレー(多分「谷」の意)だそうで、これなら納得が行く。  
話が脇道に逸れたが、300人の全滅死は決して無駄だった訳では無く、その後のアテネを中心としたギリシャ軍の整備に時間的余裕を与えた様である。  
そしてもしギリシャが負けていたらと想像してみると、ギリシャ文明そして西洋文明ひいては科学その物の発達が無かった可能性があり、我々日本人も全く異なったシナリオを歩んでいただろう。  
タイトルのif~と言う言葉は言い換えれば歴史はほんの一寸した事で大きく変わりうると言う事を言ったと思われ、これはその一例だと思う。

ちなみに先々週2、3日には私はスパルタを訪ねており、スパルタ教育ではないが尚武を尊ぶ気風？は残っていて、丁度疑似トライアスロン（障害物競争と仮装行列を組合せた様な変な物）の大会が開かれていて、世界中から参加者があった様だ。  
本格的なトライアスロン大会は別にある様なので、もし興味のある方は参加してみてもうだろう。

2019年11月16日記

## 私の徘徊癖

4部 瀧澤 伸介(2023年9月19日)

私は旅行が趣味で、方法として自転車、歩き、バックパッカー、それと遊びの登山のいずれもやっていて、退職後9月で16年目に入るが、毎年数ヶ月は家を離れている。

6年前は5ヶ月日本にいなかった事もあった。

自転車は、退職前に少し始めた日本の海岸線を忠実にたどる一漁師の傍らを走る一を目標に、

北海道を除き季節のいい春秋に通算10年で達成した。

これも語ると色々長くなるが、テント 寝袋を持参で廃道になるような道までも行った。

鹿児島の大隅半島では、昼間からイノシシが出て来て驚かされた。

10年位前に日本を一応卒業したので、外国はまず台湾次に韓国と回った。

今はドナウ川をドナウエッシンゲンからルーマニアの黒海の出口まで、一般には1ヶ月半かかると言われており、フライブルクで中古の自転車を購入してウィーンにおり、今回でヨーロッパ滞在も、何だかんだで1年8ヶ月近くになる。

1つ心配はウクライナ情勢で、ドナウ川の出口はウクライナとルーマニアの国境なので、最初は旅行自体を諦めていたが、ルーマニア側のみ通る事にしている。

5年4年前はリスボンから南イタリア、次の年にアテネと地中海の海岸を忠実に辿って計6ヶ月で回った。

尤もこの時は歳を考えて列車、バス併用だったが、今回は自力で走る予定である。

歩きは一昨年、昨年はスペインーイギリス人の道、サナブレスの道、銀の道とフランスーアールの道のカミーノの道を歩いた。

これまで他のカミーノの道はフランス人の道、北の道、ポルトガル人の道、ルピュイの道を歩いたので計8本歩いた事になる。

3年前はコロナで国外に出られず、北海道 富良野と熊野古道を歩いた。

バックパッカーは若い頃から国内は結構やっており、国外は中国、インドは頻繁に行ったが、6年前カルカッタから列車とバスを乗り継いで、インド半島を2ヶ月回ったのが印象に残っている。

尤も最近は自転車、歩きの後に、付帯的にバックパッカーをやることがよくある。

一昨年、昨年歩きの後イタリアおよびモロッコを1ヶ月回ったが、今回ももし時間的な余裕があればブルガリア、トルコを少し回りたいと思っている。

では何故このように出歩くかと言うと、勿論 違う風景及び異世界の 雰囲気の影響が最大であるが、他に面白い人たちに会えるという事がある。

世の中にはとんでもない人々がいて、エトナ山と一緒に登ったアメリカの80歳のおばあちゃんは、その前あのエボラ出血熱で有名なコンゴの何とか言う3000メートル以上の山に登って来たとか、72歳のドイツ人でケルンを真冬の2月に自転車で出発し、タジキスタンまで行き公共交通機関を使わずそのまま戻って来て、10月クロアチアで会った。

尤も私が彼に会ったのは68歳の時だったのでこの年齢だと驚いたが、今は私とその72歳になってしまった。

もし人に会うのが楽しみな人ならば、マスコミで広く取り上げられており知っている方もいると思うが、カミーノの道の特にフランス人の道歩きをお薦めする。

というのはまず歩く人の絶対数が多いのと、彼らは結構人に触れ合うことが好きな人が多いので面白いと思う。

それと初日のピレネー越えは少し大変だが、施設等が整っていて宿間の間隔も短く、初心者でも取っ付き易い。

まあ私も自転車はもう歳で少しふらついて来ているので、今回最後になるだろうと思っている。

## 私鉄沿線

4部 鳥羽 研二 (2023年9月30日)

「改札口で君のこと いつも待ったものでした」ではじまり「この街を越せないまま君の帰りを待ってます」で終わる野口五郎のヒット曲「私鉄沿線」をご存じだろうか。

ある事情で、この歌を家で歌っていたところ、女房から「なんて未練たらしい歌なの」と響感を買った。

2005年に、杏林大学で物忘れセンターを開いた時、運動療法と並んで、音楽療法を始めた。好評で、まだ続いているから20年近くになる。患者さんと、娘さん、場合によってはお孫さんの5家族くらいが、音楽療法士のエレクトーンにあわせ、懐かしい歌を歌い、当時のことを思い出して語るといった趣向である。「若い時、どうでした？」と聞いても、「さあ、あまり覚えていないね」といった反応の患者さんが、歌を歌ったあとは、別人のように目を輝かせ、「そういえば、あんなこと、こんなこと、いっぱいあったわね」と話し、つられて周りも話し出す。

音楽は心の琴線に強く訴え、回想法の最たるものと実感していた。

しかし、音楽それ自体が生物医学的な作用をもつとは全く考えず、またそのような報告もなかった。ところが、数年前、人に聞こえない低周波を齧歯類に聞かせると、脳内のアミロイド蓄積が抑制される結果がNature という雑誌に掲載された。

野口五郎さんは、心を動かすことが歌の使命、と若い時から思っていたという。進んだ認知症のお母様を、自分のコンサートに連れて行ったところ、普段は会話もなく、無表情だったのが、「五郎、すてき」と声援し、話も弾んだことから、音楽の効用に確信をもったそうである。人の声には聴こえない周波も含まれる。海外の論文にヒントを得て、「人に聴こえない周波」を混ぜた音楽演奏機器の研究を思い立った。

医師会の重鎮から、9月に「野口五郎に会ってくれないか」と頼まれた。下調べしたところ、研究は進んでおり、私の後輩の秋田大学教授が、軽度認知障害(MCI)の認知機能に効果があるという英文論文を出していた。

お会いしてみると、五郎さんは非常に真面目に取り組んでおり、「学会で発表して、医療関係者に広く知っていただきたい」と話が盛り上がった。席を辞そうとしたら、歌の歌える店で二次会を、と誘われ、断わりきれず少しだけ、お付き合いをした。その店で、「私鉄沿線」を野口五郎の前で歌う羽目になった。高音部は十分に出ないし、リズム音痴だったが、五郎さんは「上手」とお世辞を言ってくれて大恥をかかずに済んだ。

余韻で家でも口ずさんだのが冒頭のくだけりである。汗顔の至り。

## 仕事場通い

4部 原 聰 (2023年9月24日)

コロナ禍の昨年3月に70歳で定年退職した。40年の大学教員の仕事人生が突然の如くなくなり、一体何をしようかと、いささか途方にくれた。しかし、現役時代の仕事の延長がいくらか残っており、裁判の鑑定意見書作成を行なっている。その名残の仕事を行うために、仕事場を借りて、その仕事場通いが毎日の日課となった。

仕事場は隣町に求め、電車に乗って通っている。これまでは自家用車での通勤、通学も自転車か徒歩の経験しかないので、人生で初めての電車での通勤（もどき）は、私にとってすこぶる新鮮。毎朝、いそいそと出かけている。電車は、通学や通勤のラッシュを避けて利用しているので、利用客もほぼ同年代の老人が中心。これは少し寂しいが、帰宅時には高校生も多く乗り合わせてきて、電車の中もいくらか華やぐ感じ。清陵時代の自分や友人と重ね合わせながら彼らを眺めて、羨んだり、感心したり、心配したり。

駅までの坂道は歩くことにした。これまでの自動車移動ばかりのツケだろうが、歩き始めて数ヶ月の間は、膝が痛くなったり、足首を痛めたり。しかし、半年ぐらい経つころからこれらの痛みも消え、今では快適で、駅までの足は軽い。この夏は、猛暑が続き、さすがに老体全身を太陽に晒すことに耐えられなくなり、はじめて日傘を購入した。これが太陽の直射を防いでくれて、すこぶる快適。日傘をさして歩き始めると、気分がルンルンになるようなのだ。

ただ、歩くことが中心になると、服装や靴は軽装になってしまう。すると、これまで着ていたスーツや革靴をほとんど利用しなくなり、これをどうしたものか。処分するしかないのだろうか。そうそう、10年ほど前に訪れたロンドンで見かけた、80歳を優に超えた老人を見かけたが、その老紳士は、グレーのピンストライプのスリーピース、胸にピンクのチーフを差し、ジョンロブを履いて、ステッキを揺らして歩いていた。あんなふうに歳を取れるものだと感心し、自分も真似しようなどと考えていたのに・・・。

仕事場では、昼食を自炊している。当初は料理が楽しく、とんかつ、焼肉、天ぷら、野菜炒め、麻婆豆腐、ホイコーロ、チャーハン、唐揚げなどを、YouTubeを見ながら作った。ぬか漬けや白菜漬けなどにも挑戦した（漬物は難しい）。しかしこれが過食気味で、ずいぶんと肥えてしまった。これはまずいと、軽食にと考え、最近はパスタにハマっている。ペペロンチーノ、ボンゴレ・ピアンコ、アマトリチャーナ、プッタネスカ、バジルソースなど、これもYouTube先生に教わりながら挑んでいる。パスタは、ご飯のようなもので、いろいろな食材を使うことができ飽きることもない。そのせいか、体重も増えた分の半分程には減量することに成功したが、あとの半分はどうしたものか。

仕事場を借りる費用はいくらか余分な出費ではあるが、退職後は予定や行くところがある、いわゆる今日用（教養）と今日行く（教育）が大切とのことで、しばらくはこの生活を続けるつもり。通うこと自体が仕事のようにあるが・・・。

## コロナで思う事 その1

4部 原 秀男 (2020年11月30日)

また、コロナの大波がやってきている、今日は11月30日。昨日、GOTOではあるが、Open Airを優先して、三浦半島の付け根にある、八景島シーパラダイスに孫を連れて行ってきました。思ったより人が少ない。東京ではコロナの感染者は多いが、公私ともに「在宅派」がかなりいることを実感しました。

実家の母(95歳)は一人暮らしですが、数年前の5月の連休、大ゲンカしながらメール通信のやり方を教えた。それ以来、毎日メール交換。彼女は毎週デイケアセンター(かりんの里)に行っています。先日、諏訪市地域包括支援センターの、ケアマネジャーの方と話した時、コロナ多発の都会から家族が訪ねてきたときは、その後1-2週間はケアセンターへ来ることはできないルールになっている、と言っていました。諏訪地区は、徹底していますね、だから、コロナ発生数は、少ない長野県の中でも特に少ない。諏訪発祥の有名企業の知り合い(東京在住)が、たまたま諏訪の勤務者が東京に出張に来た後、諏訪でコロナ感染が確認され、大騒動だったと言っていた。私が諏訪出身だと知っていたので、「原さん、諏訪地区の感度は、半端じゃないですよ」と連絡をくれた。

改めて、「病原菌」は、保有者(ホモサピエンスとは限らない)の移動によって拡散することを思い返しました。地域の風土病が、他の民族を滅ぼす。インカ帝国は、スペイン人の天然痘で、ネイティブアメリカンは入植者たちのスペイン風邪(インフルエンザ)で、大半が死滅しました。これは、「侵略」と同時に、生物学的な「進化」とみるべきなのでしょうね?長い目で見ると。

対面や、移動が容易にできない今、中高生がNPOを支援する、チャリティームービープロジェクトを、企業ボランティアとして、支えています。もし興味があれば、下記にアクセスください。当然ですが、No Obligation です。

<https://www.philanthropy.or.jp/charitymovie/>

まだ機会に恵まれ、常勤で働いています。春以降、約2/3は在宅で、いろんな世代とWeb Conferenceをすることが大幅に増えました。対面の会議では、雰囲気や顔色を見ながら発言する事が出来ますが、Webでは司会が一人ひとり指名しながら、意見交換が進みます。ある意味より公平な会議進行。そこで気づいたこと、普段はあまりしゃべらない人が指名されて、その意見を聞くと、すごく良い事・深い洞察がある事を話す、その人のパフォーマンスを理解する機会となりました。結構たくさんの方が良いパフォーマンス能力を持っていることを確認。一方、対面ではよくしゃべる人、Webでじっくり聞いてみると、ほとんど内容がない!?こいつ、普段は「政治で発言」している、という新たな発見

もありました。こんな新たな環境で Work するのも、長い目で見たら、「進化」の過程ではないかと思っています。

そこで、これは私の会社ではないのですが、Web 会議の声のトーン「音色」で、参加者の「心理的安全性」(psychological safety)を測ろうというプロジェクトに参加しています。ダーウィンの言う環境への適合とは、実は種や種の集団としての「心理的安全性」を求めるプロセスではないか？という仮説です。Web 会議で声を録音して、AI で声のトーンと参加者の顔色(温度、表情、動作)を分析しました。なぜ声(トーン)か？声は音から学習し、音は 24 時間、生まれる前から聞こえているから。進化の仮説にたどり着くには、当分時間がかかりそうですが、面白い発見がありました。声を測ると、その人の Motivation (やる気や満足度)が分かる。本人とのインタビュー結果と合わせてみると、顔の表情よりはるかに確度が高いことが分かりました。おまけに、ある特定の人の声は、他の人に与える影響が圧倒的に強いという事です。影響力の強さは、地位や資格とはほとんど関係ないようです。この続きは、新たな結果が出るだろう時に、またの機会があれば、その時に。

コロナで思ったことをちょっと書きました。(終わり)

## 古希に寄せてー「かじまやー」

4 部 原 秀男 (2022 年 9 月 29 日)

約 1300 年前、杜甫「曲江」の中の一句「人生七十古來稀」、これが「古希」の由来との事。当時四十歳といえは長寿の仲間、日本は奈良・飛鳥時代、平均寿命は三十歳くらいの様だ。その時から寿命は 2-3 倍になっている、ホモサピエンスは、生物学の世界では特異な種という事か？

私の母は、「かじまやー」(風車)、沖縄で九十七歳のお祝いの事。長寿で子供に返る(風車で遊ぶ)の意味、と沖縄の人が教えてくれた。一方、天文家によると、太陽暦の 97 年は、太陰暦の 100 年との事、どうやら九十七歳のお祝い「かじまやー」は、太陰暦と風車から来ているようだ。

その母親は、長い間一人暮らし、自活も出来ていた。しかし御柱の時母から、「歩くのが段々大変になり膝も痛く、今年の冬を一人で越すのは辛い、どこかに入居したい」と言ってきた。6 月に入り、ケアマネージャーや、色んな人から情報をもらい、何回か母と一緒に打合せと見学もして、6 月下旬に入居施設を決めた。この間、本当に色んな人の助けを借りた、改めて諏訪地区の方々のサポートがとても暖かく、感謝している。

母は、7 月下旬に入居して、新しい生活を始めた。施設の人や、新しいケアマネージャーの助けも借りて、最近やっと落ち着き、生活のペースが出来、何人か施設の友達もできたようだ。また今までの主治医(矢沢虎クリニック)は遠くて行けないので、紹介状を書いてもらい、施設が提携している近くの共立病院の会員になった。病院への送り迎えは無

料でしてくれる、母は大感謝。地域の色々な団体が、協力し合って社会を支えている事を、実感として理解した。ただ、今はコロナで、面会もできないが、電話とメールで母と繋がっている。

所で、母が住んでいた家は、65年間家族を育んだ家。家族みんなそれぞれ、色々な思いが染みこんでいる家。最近この家を Close した。家の至る所に、写真や額縁があり、丁寧に整理。また押し入れの中には、過去帳、株券、権利書、契約書、卒業証書、通信簿、等々、こちらも家族の記録を大事に整理した。また、妹と私の「母子手帳」も出てきた。最後に、表札を取り外す。父は30年前に亡くなっているが、表札に残った父の影が、長い間家を守ってくれた。



我が家の菩提寺は、永久寺（湖南田辺）、久しぶりにご住職とお話をした。また毎年、永久寺に寄進を取りまとめている方を母から聞いて、その方とも今後のことを話してきた。

次はお墓、「竜雲寺山霊園」（湖南、中央高速の傍）。霊園のすぐ近くにある、「龍雲寺」と関係がある筈とお寺に連絡したが、管理はしていないとの事。JAの口座から、管理費が引かれているので、JA信州諏訪経由、管理組合の人を紹介してもらい、こちらも今後のことを話し合った。

母の施設入居を機に、人々の優しさや、住みやすさに触れて、将来諏訪地区に住むことも、考える様になってきた。今回色々考え、諏訪の人々にも触れて、良い転機になった夏でした。

最後に、母の施設は下諏訪町にあります。駅前、「日本電産サンキョー株式会社」の本社、下諏訪営業所がある。日本電産永守氏の「救済型」買収の成功事例の一つ。三協精機スケート部を、日本電産は心意気で引き継ぎ、平昌五輪で活躍。しかし、今年3/31廃部。ここにも諏訪の歴史が。

→ まだ「古希に寄せて」は続きそうですが、またの機会に、大崎にて 原



## 古希に寄せて その3 2023年夏の風景

4部 原 秀男 (2023年8月18日)

今年は猛暑が続く夏です。気候だけでなく、日本・世界でも国家・社会・個人の地殻変動が起こっています。自分の活動の中で経験した事や、考えた事を拾いました。

米映画「オッペンハイマー」：米国の Face Book の友人から、7月に映画「オッペンハイマー」が公開されて、大ヒット中だと連絡があった。「米国の忘れたい汚点」の作品が米国で製作され、公開された事が意外だった。作品には被爆地（広島、長崎）の映像は無く、オッペンハイマーの生涯を描いたものとの事。

ナチスドイツが核兵器を保有する事を恐れた、亡命ユダヤ人物理学者達が、アインシュタインの名前でルーズベルト大統領に送った書簡が契機、1942年ルーズベルト大統領により核兵器開発が承認された（「マンハッタン計画」）。プロジェクトのリーダーに選ばれたのが物理学者のロバート・オッペンハイマー。そして僅か3年後の1945年7月、人類史上最悪の「悪魔の兵器」が完成。

米国が原爆を投下した理由として、大義名分は「早く戦争を終結させて米兵の命を救う」というものだったが、真の理由としては、以下と考えられよう。

- (1) ソ連への威嚇。
- (2) 新兵器の実験。(実戦で威力を確認)
- (3) 核兵器の基礎資料取得。(広島はウラン型、長崎はプルトニウム型)
- (4) 日本を早く敗戦に追い込み、ソ連の参戦・占領を防ぐ。

戦争や諍いはあらゆる狂気が正当化される事を、改めて認識した。

ある映画鑑賞会で、『日本のいちばん長い日』を見た。1967年公開、監督 岡本喜八、原作 大宅壮一編（1965年に原作発刊、著者の半藤一利は、当時文藝春秋新社の社員であり、営業上の理由から「大宅壮一 編」として出版された）：

昭和天皇裕仁の決断により、ポツダム宣言受諾・日本の降伏を決定した、1945年8月14日の正午から、日本放送協会の玉音放送8月15日正午までの、長い一日。「宮城（きゅうじょう）事件」と言われる、宮城（皇居）で一部の陸軍省勤務の将校と近衛師団参謀が中心となって起こしたクーデター未遂事件。克明・丁寧に描かれた24時間の史実を観ながら、世界は、未だに帝国主義の亡霊・影を引きずっていると思った。

Z世代の人と話をした時の話題：

<銭湯「小杉湯」の事業責任者を務めるSさん>； 「仕事の人とはslackで、友人はSNSでいつでも繋がっているけれど、社会で起きていることは他人事。社会は遠いけれど、知っている人は近すぎる。間が分断されてしまっています。テクノロジーで世界中の

誰とでもつながれる一方で、知っている顔が町にいる安心感や自分の暮らしが街の中にある、という中距離な関係性が失われているんだと思います。この中距離な関係性こそ『心の健康を支えるベース』だと思っていて、その役割を果たすのが銭湯なんだと考えています」 → 中距離な関係性、この距離感が Well Being を育むと思った  
 <アーティスト / 音楽プロデューサーの T さん>; 「デフォルトとしてある絶望に、僕はもう結構飽きてきちゃってて。『何者かになろう』が瓦解して、『やりたいことで生きていく』にもみんな割と飽きてきている。次に来る Z 世代の欲望は『筋トレ』だと思っています」。「筋トレ」とは、「自分の手が届く範囲の世界をいかにコントロールして、積み上げていくか」という。 → これは 65 歳以上も同じだよ

人生 100 年 「金体食家住游学」(Nikkei Next Stage) :

項目	重要度	活用法と注意点
金	★★★★	イデコ、NISAや株式投資などによる金融資産形成 相続、ふるさと納税などの節税も
体	★★★★★	“びんびんころり”健康寿命の極大化はすべての資本3種のバランス良い 運動と睡眠含めた生活習慣維持
食	★★★	バランスと栄養価、順番、組み合わせを考えた食事 家での食事、控えめ少なめ、高かろう良かろう
家	★★	ZEH、C値、Q値、UA値。耐震性、耐火性、防犯性 メンテナンスが不要
住	★★★	病院等ヘルスケアインフラ、強固な購買力、公共交通機関の充実、 ハザードマップ、災害時のインフラ
遊	★★★★	趣味、旅行、外食、ゴルフと遊興費、コミュニティー参加 接待・交際費、飲食代
学	★★	学び直し（リスキリング）、資格・検定取得（排他性含む） チャレンジ、副業への知的インフラ

都市再開発の Workshop でテーマとなった「15分都市」; 理想的な居住環境の一つとして「15分都市」が世界的に注目されている。歩いて15分、あるいは自転車で5分の圏内で暮らせる、徒歩移動を中心とした生活環境を指す。～ 上記の中距離な関係性とも連動

澤円の本、「正解探し」の呪縛から自分を解放するべき理由; 「あたりまえ」を疑い、思い込みを捨てる / ルールや慣例などの「同調圧力」には価値がない / 正解を求めたら、イノベーションは生み出せない / 世の中は好奇心に駆られた変な人たちによってつくられている ← 「そのとおり」

以上 2023年夏 また Update します

## 今を精一杯生きる

4部 平林 重夫 (2021年2月11日)

私は今5つのことに集中している。

1つ目はテニス

朝は2時間程早朝テニスに行く。

7時から9時頃まで、週3回ほどの習慣である。

退職後運動不足解消のため始めたテニスは、10年経過するなかで少しずつ上達した。

とにかく、すぐには上手くなれないが長く継続することで少しずつ変われることを改めて学んだ。

2つ目は仕事

夕方5時～10時までの5時間、週三日上諏訪駅前ビル（すわっちゃオ）の貸しフローで仕事をしている。来訪者（90%以上が市内の高校生）の受付業務や、終了後の清掃・消毒作業がメインの仕事だ。

ここは夜9時半まで開いているので、高校生の多くはフリースペースで勉強をしている。

我々の後輩である清陵生も多い。中学生もいる。

冷暖房完備のうえに、飲み食い自由、腹が減ったら1Fのスーパーで買ってくればいい。

スマホ用の電源も自由に使えて、高校生にとっては夢のような世界だろう。

我々の高校生の頃と比べると、羨ましいことこの上ない。

最近の高校生はみんな大人しい。可愛いもんだ。

夜遅い仕事だが、彼らと話ができるのが楽しい。

75歳までは、この仕事を続けるつもりだ。

3つ目はペタンク競技

ペタンクは激しいスポーツではないが、体が丈夫でないとできない競技だ。

意外と頭を使う。

なぜか諏訪地方ではこの競技が盛んだ。

取っ掛かりは何となく始めたのだが、試合を重ねるうちに面白さにはまった。

県大会で優勝し、気の合う3人でチームを組んで「ねんりんピック」に2016年山口県大会、2018年富山県大会の2回参加することができた。

2022年には神奈川県で開かれ、総合会場が横浜ドームの予定である。

これに参加できれば、横浜ドームの真ん中を行進することができる。

なんとかこれに参加したい。

コロナ禍でどうなるかわからないが、この大会を目指して練習を続けている。

#### 4つ目は「すわっこいきいき体操」推進委員

諏訪市の社会福祉協議会で開発された体操を、各地で広めるボランティア活動である。公民館活動や、サークル活動、小学校の授業、介護施設などを訪問して紹介している。初めは、年をとってテニスやペタンクができなくなった時の準備のつもりで始めたのだが、少しでも長く健康でいるための重要な活動だと思えるようになった。不自由な体を、我々の動作に合わせてなんとか動かそうと一生懸命している方々を見ると自由に動かせることのありがたさを実感する。

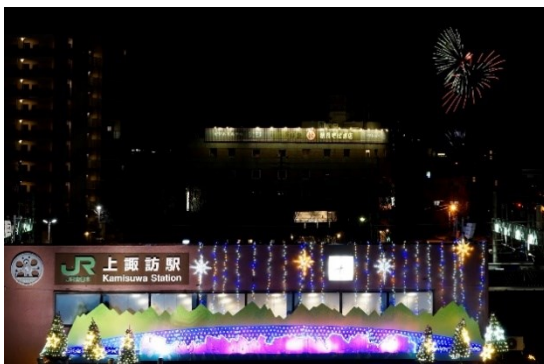
#### 5つ目が写真撮影

前項目のような状況のため、退職前から20年余り没頭してきた写真撮影はほぼ休業中。写真クラブに入会を勧めた松木君からは、責められるばかりの状況ではあるが、忘れたわけではなく何かあるごとにカメラを持ち出している。

#### まとめ

コロナ禍ではあるが、生活の糧を稼ぐ仕事をきちんとこなし、テニスで体を鍛え、来年のねりんピックを目指して頑張っていくのが今の目標である。

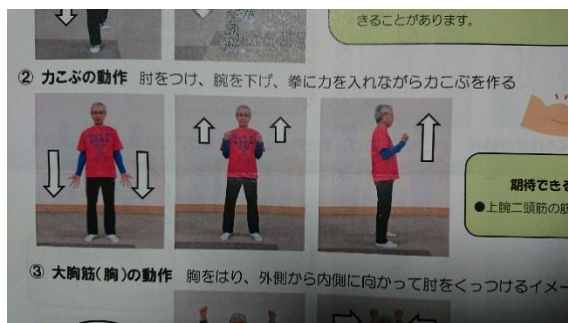
仕事場から見える夜景（上諏訪駅方面）



ねりんピック 2018 富山大会



#### すわっこいきいき体操パンフレット



## 70代を健康に過ごし、80代90代を元気に生きる秘訣？

4部 平林 重夫 (2022年9月23日)

ペタンクボールを握りしめて、今正に投げようとしたその時静寂を破って鳴り渡る異常な叫び声？

獣のようなその声は、早朝の静かな公園の中に響き渡る。

近くに居た幼児が、「ママ怖い！！」と母に抱きついている。

声の主を見て、「あの人少しおかしいんじゃないの？」という人がいる。

私は慌てて説明する。

「あのおじさんは、小学生の時は文鳥の研究で表彰されたり、今は諏訪市の選挙管理委員を務める立派な人ですよ。詩吟か何かをやっていて、発声練習を毎日しているですよ。」

(・・・なんで私がこんなところで、彼のフォローをしなければならないんだ。

と、思いながら・・・)

早朝8時頃の諏訪市中央公園内ペタンク場周辺での光景である。

早朝ウォーキングに訪れる人の多い中で、発声練習をしている。

やっている本人は気持ちよいと思うが、この声を聴かされる周りはたまったものではない。でも、多くの人は慣れっこになってしまっているようだ。

声の主は4部小松大蔵君。趣味と健康のために始めたようだ。

それにしても凄い声だ。

大声を出すことは、口を鍛え肺を鍛えることになり、70代を健康に過ごし、いつまでも元気である秘訣の1つだと思う。

発声時には周りに気を付けながら、これからも頑張ってもらいたい。

2022年6月 中央公園ペタンク場にて



## 「私と清陵」

4部 本田 稔(2019年11月9日)

私は 諏訪市清水町で生まれ育ち 18年間過ごしました。高島小学校～諏訪中学校～諏訪清陵高校時代の楽しい思い出が一杯ありました。その後 大学・就職・結婚と東京で過ごすようになり、現在の杉並区で45年以上生活しています。20代の時 両親が諏訪の家を処分し、千葉県のパ安市に移り住んだため、諏訪に帰ることはなくなりました。

東京を拠点として活躍していた金子博美さんや山田文雄さんが何度か声をかけてくれ、清陵時代の仲間が集まり 旧交を温める事が出来ました。清陵の73回生が幹事を務めるOB会が開催された時25年振りに諏訪を訪れました。懐かしい同期の仲間と会い、飲み歌い、諏訪湖畔で「金色の民」をやり、翌日は一日 市内散策、小学校・中学校・清陵・二葉を見てきました。以来、清陵の新校舎を見、清陵祭を見物して、なんとなく寂しい思いをしたこともあります。OB会にはできるだけ出席するように心がけ、延べ5回参加しました。皆 それなりに年を重ね、年輪を感じさせる風格の身に付いた仲間と、相変わらずいつもの昔話に花を咲かせる事はイイものです。

40才過ぎたころから、物思いにふける時、無意識に清陵の第二校歌を口ずさんでいる事があります。仕事に行きずまった時、無意識に「自反而縮雖千萬人吾往矣」が心に浮かび、自分を奮い立たせている事があります。高校時代を思い出すと恥ずかしい事ばかりで、昔の仲間と酒を飲んでいる時しか話せないような内容ばかりです。しかし無意識に第二校歌を口ずさみ、「自反而縮雖千萬人吾往矣」を思い出す。・・・それが私の清陵高校時代の思い出であり、心に残る宝物だったと感じています。

久保 正典さんが紹介してくれた新田次郎の「霧の子孫たち」を読みました。事実に基づいた環境保護運動の話で、清陵の大先輩の藤森栄一(考古学者)・青木正博(医師)・牛山正雄(清陵の理科の教師)が中心となって「霧ヶ峰の自然と文化」を守る為に、諏訪市長・下諏訪町長を巻き込み、長野県知事・企業局長や官僚を相手に反対運動をする内容である。実は、私は「地学」の授業が難しくよく理解できず、また牛山正雄先生の授業は、半分は面白可笑しい無駄話のように思い込んでいたので、いい加減な気持ちで授業に臨んでいましたが、「霧の子孫たち」を読んで牛山先生が「諏訪の自然と文化」の保護運動に真剣に取り組んでおられた事を知り、恥ずかしく、申し訳ない思いです。

現代に生きる我々の最大の課題である「持続可能な社会」の実現に向けて、清陵の大先輩達(「霧の子孫たち」の主人公)は「環境破壊」に対する抵抗運動の中核として市民を牽引し活躍しておられた。明治36年中島喜久平が作詞した清陵第Ⅱ校歌の「高い志」を牛山正雄先生たちが引継ぎ、その高い志を卒後50年の我々はどこまで引き継げたのだろうか。

## 諏訪の神 について

4部 本田 稔(2023年9月9日)

・2022年は「御柱祭り」の年にあたり、諏訪大社、祭神「タケミナカタの神」、「おん柱」とは何ぞや・・・何も知らないまま70歳になってしまった。そこで諏訪の歴史に詳しい4部の小口信治君に問い合わせたところ「信濃が語る古代氏族と天皇一善光寺と諏訪大社の謎」(関 裕二著)と「諏訪の神—封印された縄文の血祭り」(戸谷 学著)を紹介された。地元の方は何度も「御柱祭」を経験し、詳しく知っている方も多いと思いますが、「読み解き古事記—神話編」(三浦 佑之著)や「日本書紀—神代の真実」(伊藤 雅文著)なども調べ 自分なりにまとめてみました。

・日本の古代史は西日本を中心に議論され、北部九州から近畿 せいぜい尾張までの争乱と共存、建国と大和政権を軸に古代史は語られてきた。5世紀以降 関東地方は日本で有数の前方後円墳 密集地帯となっていたにもかかわらず、東日本の歴史についてほとんど関心が示されなかった。北部九州や出雲地方の海洋民族は 新潟地方の糸魚川や信濃川をさか上って信濃に入り、船を作るための大木をとり、また牧畜や農耕に適した関東平野や蝦夷地に抜ける 重要な交通ルートが信濃であった。

・諏訪地方一帯には まぎれもなく大規模な縄文文化が存在した。おそらくは東は八ヶ岳山麓から 西は木曾地方まで、北は安曇野から 南は飯田辺りまで。特に諏訪湖を中心とするこの一帯は 狩猟の必需品である黒曜石の大産地であり、諏訪湖の魚介類も豊かで大集落を形成していたようだ。発掘される数々の縄文土器や、ひときわ優れた造形の土偶「縄文のビーナス」(1986年：国宝)「仮面の女神」(2000年：国宝)が発掘され縄文文化の一つの中心地であったことを如実に物語るものだ。縄文(約14000年前から紀元前6世紀)を語るには 諏訪地方を真っ先に探訪しなければならないが、その後弥生時代(BC 6世紀)から 奈良時代までの1000年間の空白を埋める必要がある。

・諏訪信仰は 諏訪大社を総本社とし、分祀勧請された諏訪神社は全国に5000社以上ある。上社本宮と前宮、下社春宮と秋宮の 4社を合わせて諏訪大社という。主祭神は 6世紀後半以降 「タケミナカタの神」とさている。藤原氏一族による日本神道は1500～600年の歴史であるが、縄文以来の古神道は各地の固有の神道で 精霊信仰(アニミズム)であり、自然のあるがままを崇拝するのが本質である。山も川も海も神であり、太陽も月も神である。

一般に神社の社殿は 東西南北に正しくあわせ、大半は真南を向いているのだが、諏訪4社はばらばらである。上社本宮は北向き、前宮は北東向き、下社春宮は南向き、秋宮は南西向きである。それぞれが神社の形態にのっとりず、拝殿中心で、拝殿の向こうにある

山や奇岩や樹木を拜んでいる。これは縄文時代から連綿と続く土俗信仰と7世紀以降の日本神道が共存していることになる。

・上社本宮は御神体として奇岩（硯石）を祀り 古き神（ミシャグジ神）を祀ってきたが587年（用明天皇2年）古代日本の軍事と神道・祭神の守護者 物部守屋が、仏教推進派の蘇我馬子と聖徳太子に滅ぼされた。物部一族は 守屋の霊をまつるため 所領の諏訪・伊那地方に守屋神社（祭神：物部守屋大連）（上伊那郡高遠町 大字藤沢・字片倉）を建て 後背山の山頂（標高：1659m）に奥宮を設置し、神体山（守屋山）呼ばれるようになる。諏訪側の山裾の上社本宮には、物部守屋の霊位を埋葬したが 名は秘された。物部流神道ののっとり「建御名方神」という雄々しき名を与えた。物部一族は 製鉄を支配し 鉄製の武器を造る氏族で、守屋は 572年 敏達天皇により大連に任ぜられ 軍事・神道祭祀のトップであった。

・大和朝廷は 物部守屋の祟り神（タケミナカタの神）を手厚く祀り 軍事の守護神としたことで、諏訪信仰は「ミシャグジ信仰」から「建御名方神」に一変し、土俗信仰との二重構造になって現在に至る。「日本書紀」の持統5年（691年）の項に「使者を使わせて…信濃の須波（諏訪）、水内（善光寺付近）などの神を祀らせた」とあり、「須波」は諏訪大社を指している。7世紀には「諏訪・タケミナカタの神」は皇室に認知されていた。諏訪大社は信濃の一の宮となり 「信濃といへば建御名方神」となった。801年初代征夷大將軍の坂上田村麻呂が 諏訪大社の神意を受け 蝦夷征伐に成功した事が評判となり、850年 朝廷より従5位の神位を下賜され、940年には正一位まで上り詰めたことで、地方の土俗神が東国一の軍神として全国規模の大信仰となった。その後 源頼朝、武田信玄、徳川家康に至るまで 「建御名方神」の勇猛さをあがめたようだ。

・御柱祭とは・・・正式には「式年御造宮御柱大祭」といい、桓武天皇のころ制度化されたようである。12支の一回りである12年間に2回行われる（寅年と申年の二回） モミの木を 八ヶ岳中腹や八島高原から切り出し、里曳きし、諏訪大社の御柱を建て替える。（4社各4本 計16本を建て替える。）御柱年には 諏訪地方のほぼすべての神社で御柱の建て替えをする。 山・奇岩・樹木など自然物を 神の依り代として、4本の柱で囲まれたエリアを もっとも神聖な場所とする思想は 神道信仰の原型であり、地鎮祭で 青竹を4本立て しめ縄を張り巡らせて その中で祭祀を行うのも同様である。縄文時代から続く精霊神・ミシャグジ神を祀り、75頭もの鹿の生首を神前に供える「御頭祭」（上社前宮の神事）なども近世まで行われていたようだ。

明治政府の神道政策により 全国の神社に「鏡」を神体にするように強制されたが「鏡」のような人工物では 諏訪人が信じてきた「ミシャグジ神」の依り代にならない。ご神体は上社本宮が「守屋山&岩座（硯石）」、上社前宮が「岩座」、下社・春宮が「杉の木」、



下社・秋宮が「イチイの木」である。縄文時代に続く古神道は精霊信仰（アニミズム）で自然のあるがままを崇拝するのが本質である。また世襲の宮司も廃止され、中央（神社庁）から派遣された宮司制になった。

・ミシャグジとは・・・縄文から連綿と信仰されてきた神の名を「ミシャグジ」という。文字のない時代から祖先が口にしてきた言葉で、正しい表記はない。「ミシャグジ」の当て字には 漢音・呉音・ヤマト言葉が含まれている。一説ではヤマト言葉で ミ・御（敬称）＋シャクチ（裂ク地）。すなわち「裂け目」のこと。日本の南北を横断する巨大な裂け目（フォッサマグナ）のことである。諏訪湖は巨大断層のヘソ（断層湖）である。諏訪大社 4社は 東西南北を向いており、4社で断層湖を囲んでいる。

・大昔 大地が裂け、日本の真ん中を横断する巨大な裂け目ができる。人々は恐れて繰り返し「祟り鎮め」の祭りを行ってきた。奇岩や湖などの自然物は 地殻変動の結果として姿を現す。4つの神社は、4本の御柱でそれぞれの神域を封じ、さらにその4社で諏訪湖を封じ 「巨大地震の神」を封じているのかもしれない。

以上

## 古稀を迎えて

4部 矢島 健二 (2020年12月2日)

40年程昔、法事か何かで親類一同が会していた時のことである。父が何気なく、「俺も今年は70になる」と言った。それを聞いた叔父の一人が、「えっ、義兄さん70歳になる？たまげた」と驚きの声を上げた。病弱だった父が、そんなに生きられるとは誰も思っていなかったのである。

考えてみると、父方の祖父は満70歳で亡くなり、父の長兄は数えの70で亡くなっている。次兄は70を少し超えた年齢で亡くなり、先に「たまげた」と言った叔父(母の弟)も70代前半で永眠している。

伯父(父の長兄)が亡くなったのは私が高校2年のときだが、その知らせを聞いても特段驚きはしなかった。今だったら「70歳で死ぬなんて少し早過ぎる」と感じるが、その当時はそれが普通で、近所の小父さん達も70位で亡くなる人が多かったのである。

70歳という年齢は、私にとって少しオーバーに言えば、人生の区切りのような気がしていた。その年齢に私もいつの間にか達するのである。

ところで、70歳を「古稀」と言い、それは「人生七十古来稀なり」から来ていることは広く知られているが、この句の出典が何かはあまり知られていないかもしれない。これは杜甫の「曲江」という詩の中に出てくる言葉である。我々が清陵で勉強した漢文の教科書にはこの詩は載っていないから、授業でも教わらなかったと思う。

曲江とは、唐の都長安の郊外にあった行楽地で、曲折した池があるのでこの名が付けられた。杜甫は朝廷での仕事が終わると、着物を質に入れ、毎日曲江のほとりで酒を飲み、酔っ払って帰った。そのことを詠んだ詩である。この詩は、杜甫としては珍しい享楽的気分を歌ったもので、「人生七十古来稀」という句は、「人生なんて短くて七十まで生きる者は昔から滅多にいない。だから、せめて面白おかしく酒でも飲んで暮らそうではないか」という文脈で用いられている。

数年前、中国旅行のツアーに参加した折、自由行動の日一人で曲江を訪ねたことがある。苦勞して辿り着いたその地は、どこにでもあるような近代的で綺麗な公園になっていて、昔日の面影は全く感じられなかった。池畔に石碑が建っていたので近付いてみたが、彫られていたのは杜甫の「曲江」ではなく、知らない詩人の漢詩であった。

私の敬愛する陶淵明の「雑詩」(これは漢文の教科書にも載っているが、何も書き込みがなされていないところを見ると、授業では取り上げなかったのだろう)の中に、「時に及んで当に勉励すべし 歳月は人を待たず」という句がある。この句は青少年に対する勉学の訓戒として用いられるが、断章取義。実は、「人は時をのがさずに行楽すべき」ということを勧めたものだそうだ。

例の「自反而縮雖千萬人我往矣」を戒めの言葉として生きてきた清陵出身者は多いと聞く。申し訳ないが、私はこの言葉を後ろ盾にして事に当たったことは一度もなかった。

どうも私は、「自反〜」より、「人生七十〜」や「時及当勉励〜」の本来の意味の方に親

しみを覚える。実際、60歳の定年退職後は一切勤めを止め、他人に迷惑を掛けない範囲で好きなこと、やりたいことだけをして暮らしてきた。子供の頃から憧れていた海外旅行に繰り返し行き、好きな絵を描き、野山を歩き、興味のある歴史や古文書の勉強を続けている。そして、少しばかりの畑を耕し、収穫の喜びに浸っている。

さて、古来稀なる70歳まで生き長らえてしまった。あと何年生きられるか分からないが、この先どんな心積もりで生きていくのか。実は、私は退職後、12月から3月までの冬の間は東京で暮らし、4月から11月までは、諏訪の実家で独りで生活している。この生活は私の理想に近く十分満足しているのだが、家族からは75歳までと釘をさされている。独り暮らしで何時倒れるかもしれない。75歳になったら運転免許証も返納せよと言われている。孤独死されては家族が迷惑するし、ブレーキとアクセルを踏み間違えて人身事故でも起こされてはたまらないというわけである。一年四六時中東京の陋屋で燻る生活など考えただけでも気が滅入ってくる。残された田舎暮らしはあと数年。せめてこの間だけでも自分らしい生き方を満喫したい。今はそのように考えている。

※矢島 健二君は2023年9月13日に病気のため亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(事務局)

## 72才を前にして 晩夏酷暑・松戸市にて

4部 山田 文雄 (2023年8月20日)

- 自分は楽道家なのがあった、気分的にはいまだ青春かもしれない。  
いつまでも元気でいられると思っている。脳天気とも言うが・・・
- たくさんの記憶が頭の中に保存されている  
情景や顔がいつでも鮮明に蘇る。消去できないのが難点でもある。
- 仲間との思い出 記憶の中でいつでも会える。  
晝間清文君 60年を超える理解者だった。 金子博美君 畏友・悪友・怪物  
松本の電機メーカーの工場の同僚 山岡・伊藤各雀士 雀風は豪快・潔さだった。
- 先達たち  
両親、伯父伯母、叔父叔母、白澤先生、仕事などでの内外の諸先輩方  
自分は庇護されていたのだと今になってよくわかる。
- 良い時代を生きてきたと思う 戦争経験無く、右上がりの世の中で大半を過ごせた。
- 今、心配なこと  
買い負けて魚貝類の良質適切価格の物が国内に供給されない これでは駄目だ  
人口減の中で生活の質を維持するにはインフラの集約が必須と考える。
- 居住マンションで修繕委員をしている。500戸44年目で郊外立地の典型例である。  
コミュニティー継続等が目的の建替えや耐震診断改修は費用面から全く無理で、築80  
年100年以上先まで大切に使うと決めている。某ゼネコンが威信をかけて建築したシ  
リーズの式番目の物件にて丈夫にできていると思うのも抛りどころではある。  
幸い諸先輩方が適切に修繕・改修を行ってきているので建物・設備の状態は良好であ  
る。  
維持改善に努めて次世代に引き継ぐべく有志の皆さんと一緒に奮闘している。
- これから (もう何年かは週5日出勤が続きそうだが・・・)  
気楽に長生きすると思う。  
再訪したい所 尼崎・石垣島・沖縄・高知・博多・金沢

## 清陵エピソード・アラカルト

4部 渡邊 博保(2019年10月21日)

70歳手前まで生きてきた人生を振り返ると、清陵時代の記憶がかなり多く思い出される理由は、非常に濃い3年間であったということか。その幾つかをこの場で拾ってみた。

### ①出身中先輩からの洗礼

清陵に入学して間もなく、同じ出身中(茅野市永明中)の先輩からの歓迎(実は洗礼)行事が2回あった。1回目は公民館風の場所で、1人ずつ強烈な質問責めに合った。先輩からのイジメ攻撃であったが、きつかったのは自分の順番が来るまで頭を上げずに這っての移動を科せられ足がパンパンになったことだった。2回目は夜中に永明寺山でロープを頼りに1人ずつ歩かせられ、ロープが無くなると先輩を呼び肝試しの恐怖体験を受けるのである。それが終わると清陵生の自覚が持てるのかと変な気分になったが、自分が上級生になって新入生に行う洗礼行事は余り良い気分ではなかった。

### ②学習について

自分も数学は好きだったが、テストは授業で経験の無い問題ばかりで高得点は取れなかった。150点満点で100以上は1回も無かったが、原秀男君が1度見せてくれた答えは6問中5問正解で125点だった。流石だと感心し今も忘れない。

その数学の授業中、白澤先生が板書を書き間違えると、途端に皆が机を叩いてあの「シー」が始まった。先生の間違いを探そうと皆集中しており、先生と真剣勝負の授業だったあれは面白かった。

そして担任だった白澤先生への感謝も忘れてはならない。現役受験は失敗し自宅浪人したが、秋頃からか夜八時頃に白澤先生のお宅に行って数学を教えて貰った。確か平林重夫君と一緒にいったと記憶しているが、卒業させた生徒の指導を自宅で夜に無償で指導する熱意には感謝以上の言葉を捧げたい。お亡くなる一年前に先生のご自宅を訪ね、思い出話ができただことはほんとに良かったと思う。

### ③行事について

昼食後の昼休みには、体育館に直行してバスケットをして遊んだ。宮坂君は身長が高くシュートが上手かった。鳥羽君や増沢君の印象も強く、晝間君の素早い動きも忘れない。私の身長は今でこそ173cmであるが当時は160cm位しかなくバスケは好きでもシュートは入らなかった。ただ体育の授業でバスケの試合をし、ゴール下で宮坂君のガードを徹底して行い彼のチームに勝ったのを覚えている。

また諏訪湖一周駅伝ではアンカーを最終順位で受け、ヘルメットをかぶりゲバ棒をタスキ代わりに持って走った自分を、宮坂君はずっと自転車で伴走してくれた。ありがとう。

修学旅行の帰路、名古屋駅構内で全員で跳ねた「金色の民」は鮮明に覚えている。だがなぜか他の場面の記憶はあまりない。もっと書きたいが紙面制限のためこれで終わる。

## 校訓

4部 渡邊 博保(2019年10月21日)

千葉大学園芸学部を受験し一度は失敗したが、経済的余裕がなく自宅浪人をして再度受験した。数学や化学は得意だったが、国語は苦手で古文や漢文はどう勉強してよいかお手上げ状態だったのでそれらの問題は半ば投げっていた。

ところが本番の入試で、漢文問題を見て驚いた。何と「自反而縮、雖千萬人吾往矣」この意味を記せであった。諦めていた漢文問題に、これしか知らない母校の校訓が出題されたのだ。こんなラッキーなことが有るとは、神様を信じて感謝するだけだった。合格後、清陵の同期とこのことを改めて話さなかったが、覚えているかなあ。

そしてその後の人生に、校訓の精神が強く影響した。最初9年間は飼料会社に勤め、その後宮城県で28年間高校教諭をしたが、逆境の時でもストレスを感じることなく、よく考えて自分が正しいと思ったことをやればいいのだと、強い意志を持って臨めた。丁度退職の年に、百年以上農業教育の歴史を刻んだ高校で最後の農業科生徒を卒業させ農場を閉鎖することになり、孤軍奮闘した最後の行動は校訓が自分の心を支えてくれたからできたことであった。

## 家と稲作農業

4部 渡邊 博保(2021年1月10日)

私の実家は農家で、清陵に入学するまでは稲作の手伝いをした思い出が鮮明である。まずは4月、田起こしから始まった。トラクターはまだなく、牛を使っての鍬作業は、自分が牛の鼻先の棒を持って誘導し、父が鍬を操作するのである。鍬の刃幅で水田を何回も往復するのに牛も慣れたもので、Uターンの時だけ注意すれば後は真っすぐ歩いてくれる。だから子供心にこの作業は辛くはないが面白くもなく、牛に合わせてゆっくり歩く様はのどかできにかく眠かった。

次に水を張った後、牛に代掻き車を引かせての代掻き作業だ。これは子供が手伝う所はなく、両親だけで行った。でも5歳頃と記憶しているが、父と一緒に代掻き車に乗せてもらったことがある。遊園地の回転木馬ではないが、父の膝に座りゆっくりのんびり田んぼの中をぐるぐる回った思い出は、幸せの1シーンだったと言えよう。

小学校時代には田植え休みや稲刈り休みが1週間あった。実家の田植えは毎年6月上旬と遅かったため、5月下旬の田植え休みには母方親戚の手伝いであった。家族総出の手植え作業は辛かった思い出よりも、いところ達としゃべりながら美味しい夕食をごちそうになった楽しかったイメージの方が強

い。また、鎌で手刈りする収穫作業も楽しかった思い出。我が家では50アール程の水田を数日かけて刈り取り、ハゼかけした作業は苦労だったはずであるが、家族一緒に田んぼで食べたおにぎりがとにかく美味かった。小規模農家で家族を養う父親の精神的苦労は大変だったろうが、子供心に貧しい生活は当たり前で不満はなく、それよりも家族や兄弟と一緒に農作業をすることに楽しさを感じる時代であったと思える。家族全員で田植えや稲刈りを一緒になってやり遂げ、それで暮らしが成り立っていることが自然と感じられ、幼な心にも自覚と強く生きる力が育てられたと今になってしみじみと思うのである。

昭和30年代まで、農家の平均耕地面積は1ヘクタール以下で、それでも家族経営的な農業で何とか成り立っていたが、昭和40年代には高度経済成長が更に進み農業の機械化と共に農家の様子が大きく変化していったのである。

清陵時代も、農作業を少しは手伝ったはずであるがあまり記憶はない。多分土日の休日だけで、勉強の方が大事だった(?)高校生活の為かもしれない。その後の大学と民間勤務の期間15年程は稲作の変動から遠ざかっていた。大学では農業(畜産専攻)を学んだが、稲作の機械化進展を確認していなかった。田植え作業は左手に持つ苗束から右手で2~3本に分けて3本指で摘まんで植える作業で、機械では絶対に無理と思っていた。しかし今では10条植えの大型機械も有り、2人いれば30アールの水田を30分程で終了できる性能がある。更に近年は小型ヘリ(あるいはドローン)による直播栽培の技術も進み、田植え作業もなくなるものと予想され、数ヘクタールの水田も1日で直播可能となるであろう。また初期の収穫機械(バインダー)は、手刈り10人以上の速さで刈ることができ、更に最近の大型コンバインでは、作業は2人で可能となり1枚の水田を作業するのに1時間もかからずに脱穀作業までやってしまう。

このような機械化によって、稲作の経営規模はどんどん拡大して企業化経営も現れた。そこではかつて家族でのんびり行ったような農作業ではなく、効率よく合理的に行う機械的作業である。逆に機械を購入できない農家は委託するか止めざるを得なくなり、どんどん大規模経営に集約化されていく。

このような稲作農家の発展(?)は、喜ばしい変化であろうか。

機械化によって、家族皆で協力する必要はなくなり、少々無理しても田植え機やコンバインを購入しなければ米作りはできない。また小規模では家族を養えず、出稼ぎや兼業しながらの稲作経営が多くなることも必然的時代変化である。そのため家族経営としての家の機能がなくなった農家となり、家とは家族が寝食を共にする単なる住宅と化してしまう時代の流れである。更

に少子化も重なって後継者不足から、とうとう農村では空き家が増加しているのである。若者は農業から離れて都会に流れ、農村には子供が居なくなって年寄りだけが残る限界集落化する現実、全国的傾向である。

私の実家（茅野市豊平上古田地区）も100件程の集落であるが、空き家は3割以上となり、小学生が0人の学年もあるそうだ。自分たちが子供の頃に行った「どんど焼き」や病害虫を追い払う収穫祈願の火祭り「ひとぼし」などは、今や子供が少ないため大人が手伝う羽目になっているそうだ。各地区の小さい社の御柱祭も、縮小あるいは実施不可能になっている状況と聞く。地域文化が衰退し、3世代が暮らす家が無くなり老人だけが暮らす地方の生活環境で、果たして幸福を感じられる人生が送れるであろうか。

我々の世代は終わりに近いので今更変えようもないが、子や孫の世代が幸福を感じるために必要な文化や精神を伝え残さないといけない。幸福感を満足させる為には、何が大切か何が必要か難しい問題であるが、金と物があって経済的に満ち足りているだけでは不十分なことは確かであろう。そして先ず欠かせないことは、家族や地域社会との繋がりであることは間違いない。家族の繋がりも、前記した稲作農家のように現在は弱くなっている。10年前の東日本大震災は、多くの命と建物だけでなく、地域文化や社会の繋がりまで破壊してしまった。それからの復興には、生活環境の整備に加え、人々の繋がり（＝絆）が大切であると叫ばれている。まず第一に、人々がいつでも気軽に集まれるコミュニティーの場が作られているのだ。

私は、20年程経過した仙台の新興住宅地に住んでいる。農業教員を退職後、町内会の班長や役員を続けて10年目となる。手作りの夏祭りには2千人以上が集まり、8種類の屋台も自前で対応し、その労力は大きなものであり協力体制の組織は貴重な地域財産である。自分が思う大切な生き方として、このような地域社会の文化を次世代に繋げることが重要と思い、副会長を続けている。



## 不滅の魂に導かれて

5部 朝倉 一善 (2023年10月4日)

### 生まれ変わりの「藤蔵の墓」

都下の京王線・高幡不動を下車駅にして45年余り暮らしてきた。地元の高幡不動尊（高幡山明王院金剛寺・真言宗智山派別格本山）にはよく足を運ぶ。平安時代の不動明王像（重文）をはじめ鎌倉時代の不動堂、古文書といった文化財。境域は紅葉や、紫陽花・彼岸花の大群落、鳥や昆虫、ここに書くわけにはいかない貴重生物など四季折々の豊かな自然、“生命のほとけ”に満ちている。境内の裏山を散策していて小綬鶏の親子連れに出会ったこともある。

無名のころは石田散薬というブランドで家伝の薬を行商していた地元出身の英雄・土方歳三の銅像や書簡資料、著名俳人の句碑、境内で毎月開かれる骨董市、新選組まつりなどの年中行事でも知られる。私の関心が高いのは、何とんでも生まれ変わりの“藤蔵の墓”である。江戸の幕末、国学者の平田篤胤らが注目し、世間の耳目を集めた“再生譚”の元となった須崎藤蔵の墓があるのだ。

高幡不動尊・大日堂の脇に案内板が立っている。「ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語 勝五郎の前世『藤蔵の墓』と記念碑」とある。案内板に従って進むと高幡不動尊の檀家である、日野市程久保の小宮家の墓所に行きつく。藤蔵の須崎家に養子に入った小宮鏡治郎氏の代から小宮姓を名乗って今日に至る。藤蔵没後200年を記念して誌された解説板や、分かりやすいパンフレットも置かれている。

生まれ変わりの物語とは――、文政五年（1822）十一月、中野村（現八王子市東中野）の八歳になる小谷田勝五郎は家族の者に、自分が程久保村（現日野市程久保）の六歳で亡くなった（須崎）藤蔵の生まれ変わりであるという話をした。このことが近隣に知られると、おかしなことを言う子供として“程窪小僧”という仇名まで付き噂になったが、藤蔵の家は実在し六歳の時疱瘡で亡くなっていた。祖母つやが勝五郎を連れて程久保村を訪ねると、勝五郎は一度も来たことがない道を先に立って歩き藤蔵の家に入っていった。祖母は藤蔵の両親に勝五郎が語った一部始終を伝えた。藤蔵の家の様子は勝五郎が話していた通りで、その前の家の屋根や木が以前はなかったことなども言い当てて一同を驚かせた――というのだ。勝五郎の生まれ変わりの話は地元止まらず江戸にも伝わった。元因幡若桜（わかさ）藩主の池田冠山（定常。冠山は号）は末娘の露姫（六歳）を藤蔵と同じく疱瘡で亡くしていたこともあり、文政六年（1823）三月、江戸から勝五郎の家を訪ねてきて祖母つやから話を聞き『兒子再生前世話』（勝五郎再生前生話）という筆記にまとめた。冠山はこの書を、江戸時代の代表的随筆集『甲子夜話』や『剣談』などの著作で知られる元平戸藩主松浦静山（清。静山は号）、泉岳寺の貞鈞和尚といった文人仲間に見せたので、“生まれ変わりの話”は江戸でさらに評判となった。

こうした噂の広まりに、中野村を知行所とした旗本の多門（おかど）伝八郎は流石に無

視できず、勝五郎と父親の源蔵を江戸屋敷に呼び出して問い糺し、その内容を文政六年四月十九日付けの届書として御書院番頭・佐藤美濃守に報告した。

そのころ幽冥界の研究をしていた平田篤胤は、冠山の『兒子再生前世話』を見る機会があったようである。“勝五郎生まれ変わりの話”に一方ならぬ興味をいだいていたに違いない。多門が支配頭に提出した届書の写しも見ていたという。勝五郎親子が江戸に出てきていることを知ると、多門家の用人谷孫兵衛を通じて父子を自分の学舎・気吹舎（いぶきのや）に招き文人仲間も立会わせて話を聞いた。篤胤は、既に異界（仙境）の話を聞いていた天狗小僧寅吉こと嘉津間や、妻と娘に勝五郎の相手をさせて自分は物陰からそのやり取りを聞くといった具合に、勝五郎の心のまま語らせるように仕向けたので、勝五郎は心を開いたようである。父子は四月二十二日から四日間連続して気吹舎に足を運んでいる。篤胤は文政六年六月に聞書きの内容を古今の類話と比較し批判を加え『勝五郎再生記聞評論條々』として著した。

### さて、その一部始終は

勝五郎が篤胤に語った生まれ変わりの様子は――。『新修平田篤胤全集 第九卷』（昭和五十一年十二月刊 名著出版）所収の「勝五郎再生記聞評論條々」によると、

（藤蔵が）息をひきとるとき何も苦しいことはなかったが、次に少しの間苦しく、その後苦しいことが全くなかった。身体を桶の中に強く押し込められるときに（魂は）飛び出して傍らにいた。山に葬られたが、（自分＝魂は）白い被いの掛かった厨子の上に乗っかって行き、穴の中に桶が落とされる時大きな音がひびいたのを覚えている。僧たちが読経したが何にもならない。彼らはすべて銭金を騙し取ろうとすることばかりで役に立たない。腹立たしいので（藤蔵の）家に帰り机の上にいる。人に話しかけても聞こえていないのだった。その時白髪を長く垂らした黒衣の翁が現れ、誘われるままにだんだんと高きところに向かい、綺麗な芝原に行き遊んだ。花々の咲き誇るところで一枝手折ろうとすると、小さな鳥が出てきてひどく威すのでとても怖かった。家では親たちが話すのも経を誦えるのも聞こえた。供えられた食物を食べることはなかったが、温かい物の湯気が香うとその美味さを感じることができた。こうして遊び暮らしているうちに、ある時翁と歩いて通りかかった家を翁が指差し「この家に入って生まれよ」と言った。教えのままに翁と別れ、庭の柿の木の下に三日間佇んでいた。窓の穴から家の中に入り、竈（かまど）のそばにまた三日間いた。母がどこか遠くに出かけるということを父と相談しているのを聞いた（源蔵の話では、相談していたのは勝五郎が生まれた年の正月で、家計を助けるため妻が江戸へ奉公に行くというものだった）。その後母の腹の中に入ったと思うが、よく覚えていない。母が苦しむだろうと思われる時は腹の中で脇に寄っていたりしたことは覚えている。（源蔵が語るところによると、妻は三月に江戸へ奉公に出たが懐妊していることが判り、奉公先の主に暇を願い出て家に帰った。孕んだのは正月のことで、月経で文化十二年・1815 十月十日に勝五郎が生まれた）生まれる時は何も苦しいことはない。このほか様々なことを四つ五つになる頃まではよく覚えていたが、だんだんに忘れてしまった。あ

の世では腹も満たされ暑くもなく寒くもなく、夜もそれほど暗くはない。歩いても歩いても疲れるといことがない。翁のもとに居さえすれば何も恐ろしくはなかった。(藤蔵が亡くなって)六年目に生まれたと言われるが、あの世では少しの間のことであった――。

藤蔵の体から魂が抜け出すこと、白髪黒衣の翁の存在は、現代人の所謂“臨死体験”に登場するという、体外離脱やお迎え体験と共通のものであろうか。高きところの花々が咲き誇る綺麗な芝原は、これも臨死体験でよく語られるという“お花畑”を彷彿させる。

### 嬉しき、楽しき、有難き

文政六年の七月に篤胤は上洛し、『勝五郎再生記聞評論條々』は公家の富小路治部卿貞直を通じて御所でも評判になった。同書の序によると、時の光格上皇もお読みになったという。明治の御代になって、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が自著『仏の皇の落穂』の中に「勝五郎の再生」を記して欧米に紹介した。現代の“生まれ変わりの研究”を牽引してきた感がある故イアン・スティーヴンソン(享年88)は、バージニア大学精神科の主任教授時代にハーンの著作を読み勝五郎の生まれ変わりを知って、世界の事例44の中から7例を選んだ論文の最初に紹介。この論文を見た人物から資金援助を受け本格的な研究をスタートさせたという。高幡不動尊に墓がある藤蔵の“魂の生まれ変わり”の話が、こうした世界的な潮流の端緒になっているのだ。

それにしても、魂とは如何なるものなのだろう。万葉の時代から、人のからだに宿り心の働き・精神活動を司る不滅のものとして信じられてきた。輪廻転生するものという。真の宗教者とは斯くありなんとされるほどステキな齋藤一人さんは「生まれかわること十万回」とまで仰る。魂の存在は、進化する科学によってどのように証明されていくのか。

今のところ人間の身体は肉体と魂からできている、と私は考えている。齋藤一人さんの説によれば、人は魂の向上のために何度も生まれ変わるのだという。記憶はしていないが私にも前世があり、そのまた前世がありというのが実態ならば、魂は神様の分霊(わけみたま)という概念も少しは得心されてくる。死ですべてが終わり、というのよりも「我が魂は永久に不滅です」を信じた方が嬉しき、楽しき、有難き生き方ができるというものだ。せっかく神様が創ってくれたのだから、魂の再生という実相にふれて、自分に優しく他人に優しく、世のため人のために明るく生きる。沢庵さんが「心こそ 心迷わす心なれ 心に心 心許すな」と言うとおりの、コロコロ変わる心に振りまされず、愚痴、怒り、恨み、嫉み、憎み、貪りといった悪感情を打消し打消し努力していきたいと念じている。

「人間の魂の修行の中で二つやらなければならないことがあるとしたら、一つは知ってる事を勿体着けずに教えること、もう一つは知らない事を素直に聞けること」(齋藤一人)

参考文献・検索案内として『仙境異聞 勝五郎再生記聞』岩波文庫、『前世を記憶する子どもたち』角川文庫、『前世を記憶する子供たち2』日本教文社(各イアン・スティーヴンソン著)、『輪廻転生一驚くべき現代の神話』人文書院(ジョエル・ホイットン他)

URL:<https://umarekawari.org/> を挙げておく。

読者の皆さんとは来世でもご縁がありますように 合掌。

## 近況(野菜作り)

5部 伊藤 正陽 (2023年9月24日)

### 野菜作り①カボチャ栽培

ひよんなことから今年畑の管理をしなければならなくなった。8畝(8a)の広さである。稲作ならそんなに大変ではなさそうだが8畝の畑である。

手がかからず収穫できそうなカボチャ(西洋カボチャ)を植えることにした。

畑作は元肥が重要。堆肥をしっかり入れ化成肥料も多少足した。

苗は購入。5月の連休明けに12本植え付けた。栽培方法は独学というかインターネットから知恵を借りた。(今までもカボチャを育てたことがあるが、植えっぱなしにしていた。)

それによると、摘芯をし蔓(枝)を伸ばしてそこに実をつけさせるらしい。理屈では理解しても一本一本の生長は違ってややこしい。

6月末開花。交配は自然任せ。ミツバチが結構飛んできていた。

私が育てた西洋カボチャは一本の蔓に雌花が続けて2つ咲いた。これはカボチャからすれば種の保存のためかと思いつつ、小さい方の実を摘果した。

今年は梅雨明け後ほとんど雨が降らなかったが幸いにも畑は乾燥せずにカボチャは順調に育った。

この畑は肥えていて追肥をしなくても生長は止まらなかった。

8月末収穫の時期を迎えた。まずは試食。この種はほくほくでなかなかおいしい。

一株に4個ならせれば50近く収穫できる。自分で食べるには多すぎる。

私の住んでいる「米沢」には直売所がありそこに出荷し販売してもらうことにした。この販売方法は自分で値段を付ける仕組みになっている。値段が高すぎると売れないし、安すぎると他の生産者に迷惑を掛ける。初出荷の時は悩んだが一個350円の値段を付けた。市価の半値だがこんなものかと思った。

出荷したカボチャが全て売れるとは限らない。でも売れているとやはり嬉しいものである。

今後、春から秋は畑に通う毎日になりそうだ。

### 野菜作り②

農家に生まれた私だが稲作は手伝ってはいたものの野菜作りは全くの素人である。

教員になって1年目、小学校3年生の担任になった。私が赴任した学校は3年生は「一人一鉢」の取組が行われていた。

児童一人一人が植木鉢をひとつずつ持ち、3年生は三本仕立ての菊を育てることになっていた。

春、養土を用意し、小鉢に入れ、菊の苗を植えた。苗が生長すると大きな鉢に植え替え管理した(させた)。そうは言っても私にとって菊づくりは全くの素人。春の管理は摘芯と枝

を3本を分けて経たせることがポイント。そこまでは何とか出来た。隣のクラスの先生に教えてもらいながら生長を楽しみにしていた。学校で菊を育てるとき大変なのが夏休みの管理。家に持ち帰らせず、当番を決め、水遣りさせていた。当番はきちんと水やりを行い、枯らすことなく休み明けを迎えた。

しかし、隣のクラスの菊と我がクラスの菊の生長がはなはだしく違った。隣のクラスの鉢は菊の葉の色が濃く、我がクラスのそれは悪く言えば黄緑色ぽかった。今思えば肥料不足である。隣の担任は固形肥料を追肥していたのを知らなかった。

秋が来たが3本の伸び具合が芳しくなく短いまま蕾を付けた。咲いた花も小さくみじめそのものだった。土づくりと追肥の重要性を知った一年だった。

4年生以上は鉢には植えず畑に直播したので「一人一鉢」の取組はなかった。

学年が変わり一年生の担任になった。一年生の一人一鉢は「アサガオ」。夏休み前に固形肥料を一人ひとりに配布し追肥をするよう課した。そのせいもあって夏休み明けのアサガオはよく生長し咲いた花も多かった。ほっとした夏になった。

そもそも小学校1年生が作るアサガオの鉢はアサガオの生長にとって土の量が少なすぎる。かといって土を多くすると管理が大変になる。そのことを理解して始めないと「私の失敗」と同じ結果になってしまう。

転勤し中学校勤務となり「一人一鉢」はなくなった。一方中学では「園芸委員会」の顧問となるが多かった。花壇の管理が主な仕事だが「土」との付き合いはずっと続いた。

生まれ育った実家の隣に住むようになり両親が撤退した畑を管理するようになった。当時はジャガイモ、サツマイモなど手のかからない根菜類が主だったが転機となったのは「家の中で苗を育てる現場を見た」ときからである。

4月、学校の家庭訪問の時お勝手の温かいところで箱の中に種を蒔き育苗をしている方に出会ったことだ。考えたこともなかったが自分も試みてみた。

種を蒔き発芽する。移植して生長を待つ。手を掛ければかけるほど立派な作物が育つことを体感した。はまってしまった。

退職し時間的余裕ができ、作る作物の種類を増やした。とは言っても自家消費でありカボチャと大根以外販売はしていない。

少し話がそれるが、野菜作りでの「たたかい」は害虫が主であとは病気にかからせないことだ。最近の品種は病気にかかりにくくなっていて、害虫対策が中心となる。自家消費の場合は多少の虫食いは我慢しようと思えばできる。むしろ「虫も食わない野菜」こそ殺虫剤多加を疑いたくなる。

戻して、春は大根から始まる。春大根は「臺が立つ（とうがたつ）」と言われているがこれも品種改良で春蒔き大根が農家で日常的に栽培可能になった。蒔いて2ヶ月で収穫できる。3月下旬に蒔けば5月下旬には食することができる。何回かに分けて蒔けば、晩秋まで食べ続けることができる。

とは言っても大根は晩秋のおでんが一番だ。

5月の連休明け、霜に当たらない時を待ってナス、トマト、スイカ等の夏野菜の植え付けをする。インゲン、大豆などの豆類も5月中旬の蒔きつけだ。

こんな具合に時期を見て種まきをし、作付けを行う。

野菜作りで何が面白いのか!!。これはやったことのない人にはわからないと思うが、種まき後の発芽の瞬間である。朝起きて苗床に行くと一斉に芽が出ている。その壮観さは見事であり、喜びである。花が咲き、実を付ける。実が生長し食べられるようになる。これも止められない訳のひとつだ。

またまた脱線だが稲の種は一斉に発芽する。野菜の種はもちろん一斉発芽だが、一方、不揃いに発芽するものも少なからずある。速く発芽するものは(めったに)ないが、遅く発芽する種(たね)もある。「種の保存だ」とウシマサ(牛山正雄先生)が生物の授業で話してくれたこと思い出す。

買った方が安い、野菜作りの道楽から抜けることは難しい。御年72歳、あと10年でできればいいと思っている。(以上)



カボチャ畑



直売所に並べた収穫したカボチャ



米沢の直売所



ほくほくの煮カボチャ

## 市議会議員 8年・9条の会

5部 伊藤 正陽 (2023年10月5日)

2015年の統一地方選挙で茅野市議会議員になり、今年(2023年)の4月まで2期8年間市議会議員を務めた。

その中で私の私にとって印象に残ったことを主に書きたい。

### 議会全員協議会と保育園統廃合問題

茅野市議会は月例で全員協議会(以下全協)を開催している。市からは新たな取り組みなどが報告されている。

全協が毎月実施に至る経過はこうだ。市長は毎月定例会見を行い新しい事業実施などを語っていた。しかし、議員は寝耳に水で、困惑すること多々であった。この問題で先輩議員の方が、全協を実施し議会に報告してから記者発表することを市長に要請。月一回の全協実施となった。

地元新聞社も、市の動向が分かると必ず取材に来ている。

2017年「市立保育園の統廃合」案が報告された。市立保育園2園を廃止し統合するという案だ。(※当時茅野市内の幼児・保育施設はほとんどが保育園で市立保育園が16園、私立保育園が2園。他に幼稚園が1園)

全協では私も含め何人かが「どう住民合意を得るのか」など質問した。市から「住民説明会を開催し合意を得たい」との答えを引き出した。

翌日の新聞は「茅野市保育園統廃合計画」と大見出しで問題を伝え、関係地域では大問題になった。

以降、二地域では反対する会などが立ち上がった。その後、市の地元説明会の実施と「市と地元住民」が参加する協議会が設立され、協議が進められた。

2園のうち一園は「(この地域は)子どもの数があまり減少しておらず今後10年は存続する」となり、もう一園は地元の強い要望で「民営化」しての存続となった。

民営化により「ユニークな保育」をアピールし園児増につながった。保護者負担金は若干増えたが、諏訪地方全域からの入園者を得、存続している。

### 市立保育園に男性職員用トイレを／保育士の多忙化解消を！

地域を歩けば要求要望に当たる。近年男性保育士が増え、居ることが当たり前になっている。しかし昔建設された保育園には男性職員の専用トイレは無い。市民社会では当たり前のことが出来ていない現実を全協などで質した。その結果、市の保育園整備計画に男性専用トイレ建設を盛り込むことができた。併せて、更衣室、ロッカーの整備も進むことになった。

また大規模な保育園に事務職員配置が実現した。これは大変喜ばれている。

## メガソーラー建設中止を求める運動

霧ヶ峰高原の一角に株式会社L o o o pが、メガソーラー建設を計画。事業面積は諏訪湖の面積の7分の1に匹敵する196.5ha。そこに31万枚のソーラーパネルを並べ、20年間発電・売電する計画。開発予定地は牧場あと地で現在は植林され林になっている。この約半分の森林を伐採し、発電する計画。

ここは私の地元茅野市米沢を流れる横河川の上流域で、1983年（昭和58年）の豪雨で大災害が発生している。

また、開発計画地域は茅野市の上水道の四分の一を担う大清水湧水に近く、更に諏訪市の酒造メーカー5社がくみ上げている水の水源でもある。大災害や水環境の変化が危惧される開発計画だ。

県の環境アセスメント条例改正で、大規模ソーラー発電事業が環境アセスの対象となった。

この問題で私は一般質問を3回行い市が住民の願いを聞き、専門的内容の相談に乗って貰うこと。環境アセスで住民の願いを市長意見として県に届けるよう要請。市長も住民の願いを県に正確に届けた。

住民は議会に「建設反対の決議」を上げるよう陳情した。議会では意見書を主旨採択とするに留まったが、住民の声を最大限活かすよう取り組んだ。

結果的にL o o o pは「建設撤回」を表明し、数年続いた開発計画問題は解消した。地域住民の粘り強い取組が功を奏した結果となった。本当に良かったと今でも思っている。

## 「教え子を再び戦場に送らない」の思い・・・「茅野市9条の会」

私らが高校卒業・大学入学した1970年は大学の民主化闘争の渦中であった。

当時、文部省（中央教育審議会）は国立大学の授業料の（10年後？の）20倍化の方針を打ち出し、これが大きな問題の一つにもなっていた。そうした中で「大学の自治」「学問の自由」等を真面目に考えるようになった。

教員になり、教職員組合の役員も経験した。憲法・教育基本法等の法律も改めて学んだ。憲法前文、9条はいつ読んでも新鮮であり輝いている。

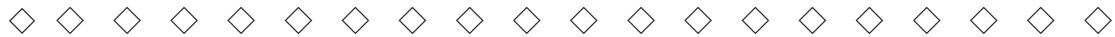
茅野に戻り平和憲法を守れ、のもと、茅野市9条の会事務局長を承った。教え子を再び戦場に送らないの思いを運動として取り組むことになった。

昨年（2022年）12月政府は安全保障3文書を閣議決定した。日本が「戦争への備え」を本格的に進めはじめた。しかしそのことは相手国にとっては「脅威そのものになるのではないか」と茅野市9条の会は茅野市議会に「平和、くらしを壊し、国民に負担を押しつける大軍拡、増税の中止を求める意見書の提出を求める陳情書（下記資料）」を提出。本会議で賛成多数で可決し、意見書として政府等関係機関に送付された。

これから先何年元気で過ごせるかは不明であるが、70を過ぎたころから病院通いが多く



なった。外ならず「健康で長生きしたい」がいまの思いであるが、と同時に何よりも戦争のない平和な世の中であってほしいとの思いは一段と強くなっている。



【資料】 茅野市 9 条の会が提出し、採択された陳情文 (2023 年 3 月)

平和、くらしを壊し、国民に負担を押しつける

大軍拡、大増税の中止を求める意見書の提出を求める陳情書

政府は、2022 年年末に「安保関連 3 文書（国家安全保障戦略、国家防衛戦略、防衛力整備計画）」の改定を閣議決定しました。他国に直接の脅威を与え、先制攻撃も可能な敵基地攻撃能力を持とうとするものです。

2015 年の安保法制を実践的に具体化するもので、現憲法制定以来、政府自身が守り通してきた専守防衛をふみにじる憲法違反です。

政府は、「『専守防衛』に徹し、他国に脅威を与えるような軍事大国にならず」といいます。しかし、世界第 3 位の軍事大国になり、他国攻撃ができる長距離ミサイルを持つことが、周辺国の不信をあおり、脅威をあたえ、軍拡競争を過熱させることは明らかです。安保法制下で可能としている集团的自衛権行使により敵基地等を攻撃すれば、日本が攻撃されていなくても他国を攻撃することになり、相手の報復攻撃をまねき日本が戦場になりかねません。

政府は、軍事費について 2027 年度までの 5 年間の総額を 43 兆円とし、27 年度には GDP（国内総生産）比で 2%と現在の 2 倍にするとしています。財源確保のために大増税と国債発行を行うとしており、くらしを直撃します。軍事費増で、いまでも不十分な教育費や社会保障費への国の支出が減りかねません。これらの結果、くらしも経済も立ちいかなくなることは戦前の歴史が示しています。

不確実性が高まる国際情勢のもとで、憲法 9 条を持つ国としていま行うべきは「戦争の準備」ではなく、対話と外交によって「戦争をさける努力」です。それこそ政治の責任です。

この国のあり方を根本からくつがえし、くらしを壊す大軍拡を開かれた論議もなしに閣議決定ですすめたことは民主主義、立憲主義に反しています。

以上の趣旨から、下記事項について政府・関係機関に意見書を上げていただきますよう陳情いたします。

【陳情項目】

- 1 平和、くらしを壊し、国民に負担を押しつける大軍拡、大増税を中止してください。
- 2 大軍拡などを決定した「安保関連 3 文書」改定を撤回してください。 以上

## 拙句披露を兼ねて

5部 窪田 敏 (2023年9月10日)

### みちのくの海をも照らせ牡丹焚<sup>ぼたんたき</sup>

2011年 中澤康人氏選評：初夏に美しく咲いた牡丹は、その美しさを讃えるべく命終の尽きた枯れ木を焚く。青い炎や香気を風雅として牡丹供養と言う。折しも3・11の東日本大震災を想っての「みちのくの海をも照らせ」に、かすかな炎ではあるが津波や地震に遭遇して亡くなった人々に対しての痛恨の思いがこめられている。

### うつくしまふくしま戻せ紫雲英蒔<sup>むらさきうらなまき</sup>く

2011年 黒田杏子氏選評：福島はうつくしまとも呼ばれていたのです。何と口惜しい、何と残念な事態でしょう。紫雲英蒔く。ここがこの句のいのちですね。言葉に流れないたしかな句となっています。うつくしまは世界の祈りです。

### 銃弾をルージュに替へよ白泉忌<sup>はくせんき</sup>

2019年 秋尾 敏氏選評：白泉忌は渡辺白泉の忌日で1月30日。新興俳句の旗手だったが、俳句弾圧事件に連座し執筆停止。戦後は俳壇と関わらなかった。「戦争が廊下の奥に立ってゐた」は教科書にも載る。その白泉の五十回忌に、銃弾を形の似たルージュに置き換えよという平和への願いの句はふさわしかろう。一方で、ルージュは血の色でもあり、熱情や恋情の象徴でもある。単純な句ではない。

### 白泉と三鬼<sup>さんき</sup>に学べ樫若葉

2015年 加藤耕子氏選評：日本の国土が焦土と化し太平洋戦争は敗戦に終わった。戦争へと急ぐ軍部の独走を戦前の日本は止めえなかった。現在は戦後の戦をしない平和な七十年である。窪田氏は、戦前の時代に抗って人間としての叫びをあげた渡辺白泉と西東三鬼の句に今こそ学べと断じ、新しく生命を芽吹いた樫の若葉・即ち若者に向かって言挙げている。季語「樫若葉」の持つ象徴的働きと共に平和を願う意義ある一句となった。

### 卒業<sup>そつぎょう</sup>子「障り」は社会君でなく

### 秋果盛るみんな違って当たり前

僕が初めて「障がい者」との触れ合いを体験したのは、二十歳を過ぎてからであった。身内にそのような人がたまたま居なかった。【就学猶予・免除】との名目で、その子達を学校教育から排除していた時代でもあったので、学び舎で接していたのは「普通」の子ばかり。そんな僕が高校卒業後、友人の紹介で訪れた知的障がい者入所施設での体験が端緒となり、多様な個性との邂逅に恵まれる人生が始まる。その後は福祉作業所や通所・入所施設へと知り合いの輪が広がり、横浜に移ってからは、市内の或る特別支援学校での写真

撮影ボランティアにと、縁が繋がる。(添付写真は当人家族の掲載許可を頂いています)

昨今は誰もが手軽に写真や動画を撮影可能にも拘わらず、この僕が児童生徒の身分証用顔写真まで頼まれるのは嬉しくもある。とは言え、誰もが快く被写体となって下さってはいないのは承知している。そもそもレンズを向けられるのが嫌な人、その意思を他者に伝えられない人、TPOに関わる事情等々。万人を傷つけることなく撮るのは難しいね。

因みに、我が国では「特別支援学級」と「普通学級」とに分けるが、「インクルーシブ教育」が当然となる将来、健常児のみの学ぶ場が「特別」で、障がいのある子もない子も一緒に集う教室が「普通学級」となるであろう。



撮影：2016年

### 髪染めず遺影を撮りし室の花

2021年 念願が叶い僕のヘアドネーション初回を達成。その髪型が常に四本のお下げだった訳ではなく、これは切り離す直前の姿。後に極端な短髪での肖像写真も撮ったが既に用意した遺影とは差し替せず。そうそう、献体の手続きも済ませておかねば。



撮影：マディーオン（今泉）啓子

## ヨコハマ猫歩き五七五

5部 窪田 敏 (2023年9月30日)

### 野良猫で徹する矜持春近し

「吾輩は地域猫と呼ばれている。名前は複数ある。民家の玄関先を拠点に暮らすから、道行く人々、新聞・郵便配達員さん、クロネコさんからもそれぞれ異なる名で呼ばれる。ネーミングはほぼ十人十色、こちらは一匹三色なのに」だってさ。



### この新樹見つめ横浜空襲忌

1945年5月29日、横浜の焼け野原に立った猫は既にもいないが、国外の随所には今以て人間と共に空爆に怯える猫がいる。ペットばかりでなく人間も。某犬好き独裁者を含む一部の連中が、躊躇なく人を殺傷する。何時になったら已めるのだ。

### 出自ノラ飼い猫なり麦の秋

山手界限ではボランティアの活躍で、TNR (Trap Neuter, Return) が浸透している。そこから、家の一員に迎えるお宅も少なくない。我が家も受け入れ準備はあり、二三の猫が屋内を探索に来たが、何れも長居せず。どうやら私達二人の加齢臭が気になるのか。因みに、パートナー啓子 (旧姓今泉・3部) は地域猫への餌やりが日課。その中の何匹かは右の園に暮らす。ここには、愛猫家である大佛次郎の記念館がある。



### 鴉にも白き息あり中華街

鳥類を苦手とする御仁がせっせとカラスに餌を撒く。猫の食事を邪魔させない方策だ。誰もが猫好きではない。庭に入って不埒な所業に及ぶ彼らは更に厄介者に。余談だが、非喫煙者のいる家に侵入する紫煙もまた疎ましい。煙として感知しにくい加熱式と同様、その「毒性」物質吸引を阻止するには、家屋を密閉状態にしなければならず……

実は小生、世間では無名だが【禁煙嫌煙運動】の分野では日本のみならず、その活動に関わる人々には、同志フォトグラファーとして知られており。

### 水打ってコクリコ坂を緩くせり

横浜に坂道は多いが「コクリコ坂」はアニメ映画での名称。ただ「見尻坂」なるものは

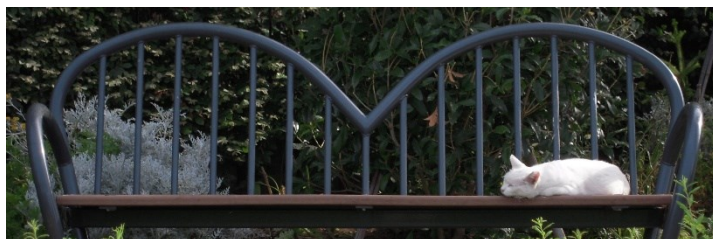


元町にある。前の人のお尻が顔面に迫るほどの急階段。夏の夜、坂の上からこんな稲妻を見た猫もいただろう。

(左奥：横浜ランドマークタワー 右：マリンタワー  
シャッタースピード：1/13秒 加工：なし/他も)

### 横浜にカジノ要らずと五月晴

「ハマのドン」こと藤木幸夫氏は港湾事業者の元締め的存在。カジノを含む統合型リゾート施設の横浜港誘致に異を唱えた我らの強い味方でもあった。彼が発した「IR反対」は「天の声」となる。一方、誘致を推奨した前市長の「猫なで声」は港の波間に消えた。



### いちょうの実ハマのメリーの影拾う

「ヨコハマメリー」とも呼ばれ、全身を真っ白に装っていた。馬車道の老舗レストラン相生（あいおい）には彼女専用だったティーカップ&ソーサーがある。他の客が嫌がるだろうからと彼女自身が用意したものだった。お店も、彼女が穏やかな時間を持てる様にと、隅の窓際テーブルを空けていたらしい。

この片目のニャン、我がご近所さんに保護され、可愛がられている。優しい人々に救われる猫、そして小生もこの家に入ってから十余年。日々の安寧が保たれており、有り難き境遇にある。



## いい日

5部 小池 隆昭 (2023年9月23日)

朝はゆっくり体操をしながら体の声を聴く。豆乳と季節の果物を軽く口に入れてから散歩に出る。住んでいる調布国領には未だ生産緑地が点在する。歩いていると季節の草花や小鳥に心が和み、土の香りに故郷の田畑を思い起こす。散歩道沿いにはサハラ砂漠で採掘された約3億9000万年前のミケリノセラスという直角石類の亜種の化石が展示されており、太古の地球に思いを馳せる。帰宅後にベランダで太極拳の稽古をして、シャワーを浴びてから朝食を用意する。コロナ禍で体調を整えるために始めた朝課である。

近所を散歩するときでも住所・氏名・連絡先を貼り付けたスマホだけは携帯する。何かの拍子に転倒して意識を無くしたとき、通りすがりの人が家人に連絡してくれるかも知れぬと期待してのことなのだが、思えばこれは気休めの域を出ない。どうせ携帯するなら保険証とリビングウィルの方が気が利いているのだろうが、それも面倒である。

スマホと言えば、バッテリー残量が20%や10%になるとアラートが表示されることがある。この残量アラートを今の年齢に当てはめてみると面白い。余命アラートとでも言おうか。例えば72歳のときに20%のアラートが出された人の余命は18年で寿命は90歳、10%のアラートならば余命は8年で寿命は80歳という訳である。しかしスマホならぬ人の寿命なれば、アラートが出されても充電はできない。ある程度は覚悟していても、いざ余命何年と伝えられたら、一日一日を真剣に生きている人ならいざ知らず、自分などは大いに焦る。要は、余命を知って未だ何年あると考えるか、もうこれしかないと考えるかであるが、まあ知らぬが花ということだろう。

4年前の夏に10年来の個人事業を廃業し、年金生活に入って現在に至る。今や第9波に入ったコロナ禍での夫婦2人の生活は、変化には乏しいものの自由時間だけはふんだんにあり、お互いに時間の楽しみ方を知っているので退屈することもなく、仲良く楽しく暮らしている。という訳で、4年前の卒業50年記念誌に投稿した自分の願いは、今のところは思った通りに叶えられている。

さて、自分たちが“いい日”を暮らしているこの今でも、国の内外を問わず、見聞きするに堪えない出来事ばかり続いているようだ。歴史書や報道の真偽が半分半分としても、現生人類の精神性は、地上生活を始めてから大して進歩していないのだろう。

自由時間に読み返した本の中に、90年代に出版された、Abduction to the 9th Planet (著者：ミシェル・デマルケ、邦題：「超巨大宇宙文明の真相」/「惑星ティアウバ：地球人類へのメッセージ」)がある。未だなら読むといい。第9章の“私たちのいわゆる「文明」”に、『地球における本当の危険は、最も重要なものから言うと、第一に“お金”、第二に“政治家”、第三に“ジャーナリストと麻薬”、第四に“宗教”です。これらの危機は核兵器とは無関係です』とある。将にこの通りだと思う。しかし、貨幣システムに埋もれて生きている今の自分には、果たしてどんな解決策があるのだろうか。

## Z世代は新聞を読まないか？

5部 小島 一彦 (2023年10月1日)

「日本は人権侵害にすごく鈍感な国だと思います」。この日記者会見が行われたジャーナリズム事務所の記事や速報を気にしながら、その男子学生は語った。場所は愛知県日進市の名古屋外国語大学・名古屋学芸大学の図書館1階。それは筆者が現在勤めている同大学で始めた「ニュースカフェ」でのことだ。

長年、新聞記者で糊口をしのいできた筆者は7年前から縁あって大学の教員と広報を兼ねる仕事に就いている。大学の通常のルールでは教員は65歳で定年を迎え、その後は1年更新で延長しても満70歳を期に学園を去っていく。65歳を過ぎて、大学に迎えられた筆者は「例外中の例外」といえる。6周目の干支。暮れに満72歳を迎える筆者は諸事情で2024年3月末まで任期が延長されたのだ。

大学、とくに私大では「おじいちゃん、おばあちゃんが孫に教える」光景が常。それは国公立大学を退職後に私大で迎えられる教員が多いことの皮肉でもある。一方では民間企業から大学教員に転職するケースもよくある。もちろん、プロパーの教員が多数派ではあるが、老若先生たちが学生たちと接して日ごろ感じているのは、学生の情報リテラシーの薄弱さだ。現在、日本で、世界で、一体何が起きているのか、無関心な学生が実に多い。かなり偏向レンズが入っているが、自宅（あるいは下宿）を基点に半径500メートルが学生の行動範囲といっても過言ではない。

新聞記者の傍ら、大学で非常勤講師を勤め、新聞などメディアを軸にした授業を続けて10年以上になるが、それでも最初のころは「新聞をよく読む人は？」と尋ねるとパラパラと数人は手を挙げた。現在はこの質問そのものが「愚問、といえる。皆無だ。今どき新聞を手にする学生など化石のような存在だ。

それでも、就職活動が始める3年生になると、キャリアサポートセンターなどが主催する「日経新聞の読み方講座」などを受講し始め、学生たちは恐る恐る新聞を開く。しかし、そこに何が書かれているのか、まず、どうやって読み進めるのかわからず、途方に暮れる姿は決して誇張ではない。

学生たちもニュースに鈍感なわけではなく、左手の一部と化したスマートフォンでニュースに接する。ところが、横書きで表示される見出しと記事がどの程度重要なのかは、判断が付きにくい。朝いちばんに表示された記事がトップニュースだと思っているわけではないが、ニュースの軽重は判断できないのが現状だ。

回りくどくなったが、筆者が同僚の広報担当と「ニュースカフェ」なる「講座」を始めた理由は、もうすぐ社会に飛び立つ学生に、少しでもニュースに対するリテラシーを養ってもらえればという親心、いや爺心。参加学生にはペットボトルと朝刊1部をプレゼントし、ニュースに関する自由な討論を促そうと企画した。しかし、腹の底では「今どきの学生は新聞を使った企画など乗ってくるわけがない」との不安は去らなかった。ところが、冒頭の発言

のように、参加した15人の学生は次々と意見を述べ、新鮮な感覚でさまざまなニュースに対する意見が交わされた。

Z世代などと、何かとレッテル貼りが好きな昨今。彼ら彼女らなりに問題意識を持っていることがわかり、「やはり爺の目は曇っている」と恥じ入るばかりだ。残る大学生活も半年弱。曇った眼をぬぐいながら頑張っている。



「ニュースカフェ」の一コマで中央が私



## 生徒たちと・・・

5部 小松 宏昭 (2023年9月29日)

以前牛正の授業のことを原稿にしたが、その際牛正の研究室で過ごしたことは、自分が教師になって大いに役立ったと書いた。そして教師になったとき、生徒とは牛正がやっていたように付き合おうと思っていた。勤務した先々の学校で、自分の研究室には生徒が出入りできるようにし、彼らの勉強を見てやったり、悩みを聞いてやったりして交流してきた。おかげで卒業してからも行き来がある生徒が何人かいる。今回はそんな生徒たちとの交流を記してみたい。

### その1・・・K君・M君たちとの交流

K君は自分のとなりのクラスの生徒であった。そのクラスは担任の先生が病気で入退院をくりかえしていたため、ルーム長だった彼は、クラスのことや文化祭・合唱コンクールのことなどで自分のところによく相談に来た。授業でも地学で恐竜の張りぼてを作ったりして言葉を交わすようになり、いつの間にか昼休みにM君ら2・3人の友達を引き連れて研究室に来るようになった。陽気な彼らとの会話は楽しく、飽きることがなかった。極めつけは3年のクラスキャンプであろう。担任の先生の体調が悪く、引率ができないということで代役を頼まれてしまった。自分のクラスもキャンプをしたから、その年は都合2回キャンプをしたことになる。40年も前の高校生のキャンプであるから、当然ここには書けないようなことのオンパレードであった。しかしそのおかげで生徒たちにはいたく感謝され、今もってK君とは付き合いがある。卒業してから家業の塗装屋を継ぎ、面倒見もよいので周囲からとても頼りにされ地域になくってはならない人材である。

野球部だったM君はファーストを守り、主力選手として活躍していた。卒業後は顕微鏡を作っている地元の精密企業に就職し、辰野の工場の部長にまで上り詰めた。昨年退職したが、会社から請われて今も会社で活躍しているという。大したものだと思う。

両君とも高校を卒業して40年が過ぎ、還暦を迎える年齢になったが、これからも元気で活躍してほしいと願っている。

### その2・・・Y子たちとの交流

最初の高校から3番目の高校に転勤して5年目のころである。最初のクラスを卒業させ、いささかのんびりとしていた頃、3年生になったY子先頭を4人の生徒が地学研に来るようになった。地学研にはいつも生徒の誰かがいたから別に気にもとめていなかったのだが、いつのまにか毎日いるようになっていた。朝自分が登校すると、Y子先頭に「おはよう」といってやってくる。そしてそのまま備え付けのソファに座りこんで「ハー」と息をはき、ぼんやりとしている。1時間目が終わるとホームルームになるのだが、ソファに座り込んでまったく自分のクラスに行く気配もない。授業には出ていくが、終われば必ず地学

研にくる。担任もいる場所がわかっているのか、「あいつがいない」といって捜す気配もなかった。そのうち、気づくと研究室の本棚に教科書や参考書が並べられ、最後には一番下の段に体育のジャージが置かれているのではないか。さすがに「ここで着替えないように」といったところ、どこかで着替えて授業に行っていたが、ジャージは相変わらず本棚の下の段に置かれていた。こんなこともあった。文化祭が終わった後、「こまっちゃん見て見て!!」というので何かと思ったら、クラブの打ち上げの写真だという。そこには自分が見てはいけない禁断の風景が写っていたので、「早くしまえ。そんなの學校に持ってくるな。」と言ったこともあった。また、授業の始まりのチャイムがなってもソファから動こうとしないので、「早くいけ」といったら「もうちょっとしたらいくよ」という返事。仕方がないので地学教室の授業に行ったらしばらくすると4人がぞろぞろと入ってきた。自分の授業とも知らず、まさに「不覚!」であった。

飼っていたイモリにえさをやったり、授業から帰ってくると「リンゴの砂糖煮」ができていたり、世間で思われているような「生徒と教師」という関係とはおよそ言い難い毎日であった。

そんな彼女たちであったが、家庭環境にはあまり恵まれてはいなかった生徒もいたようだ。両親が不仲であったり、親が仕事で出かけてしまい、食事はいつも一人だったという話を聞くとともに聞いていた。この学校の生徒は学力も高く、みんな恵まれた家庭だと思い込んでいたので、彼女たちの在学中はさして思わなかったのだが、何年かして当時のことを思い出すにつけ、「もしかすると、あいつらにとっては地学研究室にいることの居心地のよさが、ほっとする時間だったのかもしれない」と思うようになった。そう考えると、知らず知らず彼女たちが自分の教師生活の重要な一ページを飾ってくれているように思えてきた。楽しかったY子たちとの時間を思い出すにつけ、4人のこれからの人生に幸多かれと願わずにはいられない。

## 象を撃つ政治指導者たち

5部 細田 俊彰 (2021年1月16日)

今年の1月9日の毎日新聞朝刊を見ていると、「象を撃つ政治指導者たち」という見出しが目に留まった。「おっ」と思ったのは、珍しい見出しの上、「象を撃つ」というジョージ・オーウェルの随筆を高3の時千葉先生の英語の授業で読んだ記憶があるからだ。記事を読んでもとオーウェルの「象を撃つ」を引用しながら、日本のコロナ対策を迷走させている政治家の言動を考えるものだった。

1月7日には一都3県に二度目の緊急事態宣言が出され、コロナの感染は全国で拡大していた。この記事を書いたのは伊藤智永という記者。以下、引用が長くなるが、記事から転記する。「象を撃つ」は、オーウェルが植民地ビルマで警察官だった時の出来事を後日随筆にした作品である。

「ある日、一頭の飼象が市場で暴れ、労働者が一人踏み殺された。ジョージ・オーウェルは狩猟用ライフル銃を手に後を追う。象は静かに草を食べていた。一目で撃つ必要はないと確信したが、いつの間にか2000人を超える群衆が、暗い期待で興奮している。撃ちたくはなかった。だが、白人は植民地で現地人を前におじけつてはならない。撃つしかなかった。

1発。ひざを折るが倒れない。二発目。立ち上がった。3発目。倒れても息はある。さらに2発を撃ち込んで弾は尽きた。群がった群衆が肉をそぎ、象は瞬間に骨と化した。」

「オーウェルは書いている。『ばかに見られたくないというだけの理由で私が象を撃つたと見抜いた者が誰か一人でもいたかどうか、私は何度も思い巡らした。私にははっきりとわかっていた。近づいてみて襲ってきたら撃てばいいし、気にもかけないようなら象使いが帰って来るまで放っておいて大丈夫だ』と。でも、そうしなかった。撃て。そう群衆が無言で命じるのを背中が聞いたからだ。民衆と権力者のその手のやり取りに言葉はいらない。」

「感染爆発によるコロナ死か、人間らしい活動を止める経済死か。各国の政治指導者たちは今、命のかかった政治哲学を自問自答している。」「科学と経済。それぞれの専門家でもわからない。間違えることは多い。ましてその二律背反を手品のように一つにする英知を備えた政治家など稀だ。科学と経済を高みで統合する政治を夢想する俗見は、ディストピア（希望も救いもない世界・ユートピアの反語）への危険な入り口ですらある。迷い、不安に駆られた政治指導者は、撃ちたくない象を撃ち始めるかもしれないからだ。」

そして記者は、このような場面で必要なのは、「象使いが到着するまで、群衆の興奮を静める対話力である」という。「ドイツ首相のメルケル氏にそれができるのは、信頼される言葉を持っているからだろう」と。そして記事をこう結んでいる。「ウツつきと知りな

がらそのウソに目をつむったまま指導者を抱えていると、肝心な時に聞きたい言葉が聞けない。自分たちの選択は、自分たちに返ってくる。」

象を撃つか、撃たないか。撃たないとすれば何をすべきか。政治に限らず職場でも家庭でも絶え間なくこの場面は出現する。誰でも経験し、今でも、これからも直面していこう。その時に必要なのは、起きている事実をきちんと把握する力、解決すべき道筋を根拠を基に考える力、そしてそれをわかりやすく周囲に説明できる力だろう。言うは易しいが行うは難しい。経験からすると、起きている事実を正確に把握することがまず難しい。そして周囲に説明し、理解を得るには、誠実な言葉と共にその人が周囲からどれほどの信頼を得ているかが重要である。信頼されていない人の言葉を我々は信じないだろう。

今年はおとそ気分をゆっくり味わえることもできないほどの新年の始まりだったが、様々な困難に対して自分はどうか立ち向かっていくかを考えさせられた正月の新聞記事であった。

## 再び「その独りを慎む」

5部 細田 俊彰 (2023年9月10日)

2019年に「その独りを慎む」という小文をなみの会へ寄稿した。その概要は、「今は廃校となってしまった落合小学校(富士見町)の校是として受け継がれてきた「慎其独」という言葉。出典は「礼記」の「君子必慎其独也」。君子は必ず自分ひとりしか知らないこと、他人に見られていない言動を慎む、という意。他人には気づかれなくても、自分自身にはしっかり見られている。自身の行いは自身が律しなければいけない。この言葉に出会ってから私はこの言葉に従って行動するよう努めている。しかし、できないことも多い。その時は後味の悪い思いが残ってしまう。」というもの。

今回何か書こうとしていたら、パソコンにこの寄稿文が残っていて改めて読んでみた。人間肝に銘じたつもりでもいつの間にかそれを忘れてしまう。「その独りを慎む」も肝に銘じていたはずなのにいつの間にか飛んでしまっていた。ただ、この銘は飛んでしまっていたが、この数年何かするときふと悪い考えが頭をよぎると「いや、それはいけない」と自分を律することはできていたと思う。小はごみを道端に捨てることから大はコロナの支援金をだまし取る、強盗をはたらくまで近年自分を律することのできないできごとがなんと多いとか。自分を律することのできない人は近年に限ったわけではなく昔からいたとは思いますが、ただ、近年では書を読んで思いを巡らす、という時間が失われているのでは。そのことが思索して自省する行為に影響していないか。スマホを眺める時間が多くなり、下手をするとスマホに向き合って1日が終わるなどという日もある。自分に向き合い自分で考えてみる時間を、そして自分を律することができるかを考える時間をいつも持たなければいけない、と改めて感じている。「その独りを慎む」ことができる人は、たたずまいが美しい。ソウイウヒトニワタシハナリタイ。

## かつて実家は映画館だった

6部 飯田 夏来(2023年9月10日)

高校時代の上諏訪の町中を覚えているだろうか。上諏訪駅からはじまるアーケード街。そしてメイン通りに並行した裏道にはいりゆるやかな坂を登る。狭い路地を通り抜け再び登り坂。けっこうな急勾配(しかし短い)。そして清陵祭にはみんなで山から引いてきた樹木で立派な門構えが作られるが、普段はなににもない入り口を通り校内にはいる。

アーケード通りはけっこう色々な商店があり、にぎやかだった。

上諏訪には映画館が5軒、最大時6軒あった。今で言うミニシアターで、邦画館がほとんど洋画館は2軒程度だったように思う。ビスタサイズからシネマスコープの普及もこの時期にあった。しかしわが高校時代には映画館の多くはなくなっていた。現在は一軒もない。幼少期に唯一だった温泉街の映画館という娯楽施設はTVの普及に伴って観客数が激減し、軒並み廃業へと至っていた。実家も同様である。

ちなみに実家ではTVの購入は遅かった。映画館との競合ということで購入に反対があったと聞く。東京オリンピック(1964の)の時に入手したんだっけ。入手までTVのアニメは、小学校の同級生の家族が経営する飲み屋(!)やその同級生の家に押しかけて見たりしていた。今思うになんと、はた迷惑なことをしていたことか。

中学校の頃までは、実家が家族経営の映画館でもあり、洋画館でもあったので上映される映画は見放題だった。年齢制限なんのその、関係なくよりどりみどりであった。とはいえ小学生に大人用の名作とやらをみても、その機微はわからない。お気に入りにはディズニーアニメや西部劇、戦争物の活劇場面。そういったものがお気に入り、活劇場面以外はパスである。映画館の二階は椅子ではなく畳の棧敷だったので寝っ転がって鑑賞である。

たまに立体映画(ほとんど成人向けである!)などがあり、赤と青のセロファンを貼った眼鏡で見ると、立体的であった。(立体的である以外はなにがなんだか・・・?)

映画館どうしでは同業者ということもあり、顔パスで他館の映画をみることもできた。

アニメでは、「バンビ」「白雪姫」「ピノキオ」、「魔法使いの弟子」邦画の「白蛇伝」、「西遊記」エトセトラ、西部劇では「シェーン」、「駅馬車」、「OK牧場の決闘」エトセトラ、文芸物では「ジェーンエア」、「嵐が丘」、「風とともに去りぬ」、「戦争と平和」・・・けっこうな本数見ている。これを書いているなか、あれも見たっけ、これも見たっけと思出す。(但し見ていたのであって、観ていたわけではない。年相応にしか理解できなかった!)。一方TVではアニメ専門。「鉄腕アトム」、「鉄人28号」、「狼少年ケン」、「ジャングル大帝」、「W3」、「ビッグX」・・・(「ブラックジャック」は、まだなかったな)

小学校の頃マンガ小僧とあだ名され、1950年代の悪書追放運動、なんのそので読みふけていた小僧の面目躍如(?)であった。おっと、背伸びして「夢であいましょう」も時々見ていたっけ。坂本九、九重佑三子なつかしいなあ。

大学時代は普通に映画の話題作を観ていた。TVとはほとんど縁がなかった。貧乏学生

でTVはなし。寅さんシリーズは大学の映画祭で度々。一度名画座かなにかでみた「シベールの日曜日」 どういうわけか嵌まってあちこちの映画館での上映を調べたっけ。残念ながらその時はまた見ることはできなかった。あれって今では危ない(?)映画かも・・・

手塚漫画だけは単行本を折と金があれば買っていた。就職してからも寮生活、そして独身生活中、TVはそれほど見ていなかったように思う。まあそれでも寮の共用TVでときおり初代ガンダムは見ていたか。プラモデルの販売戦略と思いつつ。

独身時代で印象に残るアニメは「風の谷のナウシカ」。新宿あたりの映画館で、当時は入れ替え制ではなかったので朝から晩まで何度も観てしまった。それから「スターウォーズ(エピソード4)」これは映画館に入り直して何度も観てしまった。そうそう、これを書いていて、初めて知ったが、ルーク・スカイウォーカー役のマーク・ファミルって同い年なんだな。キャリー・フィッシャーも年下だが、ほぼ同世代だ。

一方TVはそれほど見ていない。むしろRPGのゲームをよく遊んでいたか。「ウィザードリー」でダンジョンマッピングを方眼紙に描いたりして・・。「ザナドゥ」もあったっけ。そして「ファイナルファンタジー」シリーズの愛好者である。

思えばこれまで映画、アニメ、漫画、TVゲームなどの映像技術の発展とともに生きてきたんだな。技術の進歩により好きな映像をDVD等で入手したり、録画したりして好きなときに観ることができる。ずっと昔の映画、アニメなどもまた観ることができる。今まで生きてきたからこそ理解できることを感じることもできる。

漫画やアニメは、今では日本の優れた(?)コンテンツになってしまった。

こうした発展の根っこの一つに半導体、ひいてはコンピュータの技術進歩がある。

大学入学時に新設されていた「計算機学科」、計算機室にあったパンチカードを使ったFORTRAN言語の実習、半導体理論。いずれもあまり勉強しなかったのだが、就職して物作りに絡むようになってから、付け焼き刃でなんとかしてきたことを思い出す。はやりのデジタルにもなんらか絡んできたということかも。

一時廃れかけた映画館はシネコンの形で復活し、映画館にかわって台頭してきたTVはスマホやパソコンに少しずつ押されてきてはしているもののまだ健在だ。VRやAIはこれからどんな進歩を遂げていけるだろうか。生きてきた70年のうちにここまで来た。

と、順風満帆のようだが、さてこれから先の、今まで生きてきたのと同じくらいの70年の間には、どうなるか? CO2による熱暴走やAIによるシンギュラリティ、偶発的におこる(かもしれない)核戦争・・・。人類という種の衰退。そして地球も火星のように荒れ果てた星になる始まりになるかもしれない。すでに始まっているかも?それからもっともっと未来。地球という星の存在、さらには宇宙の存在。さて、どうなるかを想像することはできても、実際にどうなるかは、現在の私たちには、まあ知ることはできない。

A long time ago in a galaxy far far away

「遠い昔人類と呼ばれる種と地球と呼ばれる星が存在した。でも 今はもう存在しない」 近い未来のうちにそんなことにならないよう、現在できることを・・・。

## 様々な理想を追いモーレツ時代を生き抜いた昭和と一旦手の平に収まった鯉に逃げられた鯉を追い続ける令和

6部 板花 哲夫(2023年9月23日)

風格より現役で若くいたいのが日頃我々の願望の一般化だ。ここ1年、経済的に首が回らなくなった。まず食費。ここ5年で1・5倍から2倍に跳ね上がった。新しいITレジ購入から無人レジシステムの購入による物か、ウクライナショックによる物か。便乗値上げか。電気代、電話代、ガス代、雑費、日用品。ここ10年で2倍は上がっている。今年の1月に電気代を2万円以上取られたのにはびくついた。いわゆる生活費は、支出のうちささいな割合であったのが、今や大半を占めるほどに変わっている。

7月初旬、持病である糖尿病、高血圧には、梅の実を食べるとかなり効力があるというので梅もぎを丹念にしたところ、首を捻ってしまい、今までの腰痛、肩こりが全て首肩痛に集中して首が物理的に回らなくなった。市販の特効薬を呑み続けているが、中々抜けてくれません。

清陵という高校は私にとって誇りの1つです。成績優秀の人が行く高校だからと校歌のイメージの様に深さと歴史、質実剛健、ちょっと他とは違いがあると感じました。同時に圧力も重荷も感じました。勉学の難しさも、自由自治も、当時の私の精神年齢にとっては重い漬物石のように感じたのかも知れません。同学年の過半数の生徒は私と同じ心境だったのではないのでしょうか。

中学の勉強は、たとえば数学なら、ある方程式の同じ様な例題を何度もくり返し学習し、国語の難しい漢字は何回も書いて覚えます。他の問題もパターンは決まっている。だから、私にとって中学までは90点85点80点も減点分はミステーク他の問題であって、100点が当たり前からスタートします。

しかし清陵の場合、100点当たり前は英語のグラマー位な物であり、当時の私の頭脳では不可能だった問題もありました。数学なら数学で生計を立てている人の為の学問とパズル解きであって、 $180度=\pi$  (弧度法) なんて典型的な例で、出題する方は限りなく難しい問題を出せます。学問あるいは大学入試とは限りなく難しく崇高なものでもあり、同時につまらない物でもありえるのです。

この問題なら解けて、この位の大学なら私が入学できるか。それは自分で決定すべき事となります。常用漢字以上の難しい漢字を一回で覚えるコツは私にはありませんでした。アクティブボキャブラリーを最後まで丸暗記する能力も、古典の源平合戦の部分を丸暗記する能力もありませんでした。湯本先生の日本史の授業とテストは、教科書を全部丸暗記せよ、という学問だと思いました。

35年前、私は転職に失敗し、チェーン店の薬局に腰掛けで勤めていました。卒後15

年以上たっていて、清陵時代なんてとうの昔の事、という時期でした。その昔、ずいぶん頭の良い人（テストすれば成績の良い人）人もいたわなあ、と思う年齢です。

大学を出て、厳しい営業をしていた会社を1年でやめて入社してきた男性がいました。同じ清陵出という履歴から私に、「牛正、知ってるか」と尋ねてきました。地学と生物の牛山正雄先生です。生徒の思考レベルはお構いなしで難しい大学レベルの授業をしたかと思うと、湖周マラソンの時はレモンの輪切りを配った場所に「うしまさ坂」の名前まで付いた伝説の名物先生でした。

次に印象に残る先生は、バスケット部監督の矢島トッサ。なんかドスの効いた目つきと無口の「こわさ」で人を動かしているように見えた体育の先生です。

3番目は我が担任、国語の福沢武一先生。頑張っていたなあ。恋女房自慢と枕草子の話、つんのめりそうな直立歩行の武一先生のおかげで、学歴社会もご破算で願います。東大文三卒の立派な先生でしたが、大学進学の際、我が内申書を聞いてみたら、何と小学生扱い。これには、がくっと来ました。

4番目は化学のキューピー先生。分かりやすく、イオン化傾向とベンゼン基準の有機化学の展開を教えて頂けたので、受験にちょうどいい先生でした。同じ化学でも、水素が燃料になるなんて全くわからなかった時代です。

5番目は私ら世代よりずっと古い時代の三沢勝衛先生。直に接したわけではないですが、「学問を根本から知れ」と説いた先生だそうで、私にとっては今さらながら生きる源泉になりうる先生です。

最後に清陵生の合言葉「自ら反りみて直くんば千万人といえども吾往かん」。しょせん自分以外は別の生命体、生きるのは自分の責任上、生き残る気迫がなくちゃいかん「こん畜生」哲学と同じ様なものです。日頃、テレビなんかを見ていますと納得の行かない事だらけ、相手が千万人でも叩き切れじゃ、最近、又はやりの自閉症患者の大量殺人鬼です。嵐寛寿郎（アラカン）が1人でバッサ、バッサ斬っても千人までが限界で無理なお話。せいぜい、セブンイレブンのかわい子ちゃんの瞳の輝きを見て、考え方を直進方向から円運動にでも変えて考え直すきっかけにすることです。

清陵出に悪い人はいない。これは間違いだと思います。清陵出て大学入れたら悪い事を考えたり実行したりしなくても生活ができるミドルのルール上に乗っかる事ができる職業に就く事が可能であって、その大事な規範をぶちこわされたら、いつ何時、健さんに豹変して『許せねえ』となるかわかりません。

なみの会に出席しても、先生や旧学者タイプの人が多数を占めています。政治家、社長、営業職、ビジネスエリートタイプの人ほとんどいません。正直で本質的に堅くて取っ付きにくい人が多い。上手な嘘を言えない、気の利いた馬鹿になれないから、人を傷つけます。



コロナパンデミックでは、日本のお家芸であるはずのワクチン開発・製造のメカニクで、アメリカに遠慮しなくて世界貢献をすべきと思います。

ウクライナ事変では、いろいろな角度から戦争を見直す事が必要でしょう。21世紀にあって、大国が本格的な侵略戦争をするのか。それにしても、コメディアンのゼレンスキーを大統領にすると、ウクライナ人は世の中を知らないのか。ソ連邦の勢いのよかった65年前を頂点にロシアもウクライナも進化してないから、何かと言えば旧西側陣営が良く見える。

ウクライナの農業立国がどんな型をとったらBestなのかを原点として、官僚が考えるべきです。ウクライナはNATOに入っていないし、今後に入ることはないでしょう。そして、プーチンが武器、建物の焼却戦争をしかけてきたら、ゼレンスキー政権はロシア軍を追い払うばかりでなく、ロシアに従属する交渉に出るべきかも考える必要があったのではないのでしょうか。欧米諸国は戦争をあおり、古い武器から送り込んできました。ウクライナにとって最悪のシナリオは、イスラエル、パレスチナ化して世の中の絶縁接点、それは何かというと、毎度、イザコザの花火大会の原点ショーがくりかえされます。プーチンは愚かでない限り核は使いません。核大国として君臨するには、核戦争に持って行くより核の脅威により他国を威圧させる事です。EUの人々にとって絶縁帯が一番の国防につながります。歌を忘れたカナリアはいらなくなって捨てられるより、北の政所に収まった方が賢明な策かと思います。

日本における喫緊の課題は、地方と都市の格差、賃金の格差、心の有り様の格差であり、Unify、Union、Unit、Unite、Unity に対立する所の Individual、Victory、Vital の平衡かと思います。すなわち、Universal、 Universe、 なのです。

## 諏訪清陵高校時代の思い出と今

6部 熊谷 靖樹(2019年9月26日)

私は、中学時代から始めたバスケットボールに心酔していて、高校入学と同時に籠球部に入部したと記憶しています。当時、籠球部は、前年の県大会で優勝（その試合はテレビ放映もされ）してインターハイに出場したベストメンバーの2年生が多数残っていて、その人達が最上級生となり更にスケールアップして活躍していました。私からみれば憧れの人達で、たまに練習に加えさせてもらった時などそのパワー・スピード・機敏な動きは別次元で、今でも忘れられません。でも、残念ながら2年連続優勝してインターハイ出場かとおもわれたチームは、準決勝で長野商に63-47で敗れ、インターハイ連続出場は逃しました。次の年3月、私が1年から2年に上がる前の3月春休み、練習に部員がたった4人しかなくて、とても不安な寂しい時もありました。が、4月1年生が10名程入部して期待膨らむうれしい時代もありました。

しかし、私の2～3年次のチームは今一つで、2年生の時は県大会には進めましたが、1回戦で敗退の状況でした。ただ、この試合は今でも覚えていて、対戦相手は当時県NO1の優勝候補・松本県ヶ丘で、試合開始前に4番エースを抑えてこいと言われ、4番とマッチアップして前半は4ファールを犯しながらも何とか抑えこみロースコアのゲームに持ち込み拮抗したスコアでしたが、私は後半早々5ファールで力尽き、地力が格段の差でしたので、63-32で終わりました。更に私が3年次は弱く、県大会にも進めませんでした。部長としても残念な時代でした。

でも今から思えば、この時期・この瞬間は人生で一番輝いていた時代かもしれません（勉強は全くしていませんでしたが）。

そんな私が、43歳で思うところありまして転職、同時期小学校でミニバスケットボールクラブ設立の動きがあり、当時小学3年生の息子を入部させたこともあり、私も設立から参加することになりました。当初名ばかりのコーチと、審判の人出不足から審判の勉強をする破目になりました。一時は審判の日本公認を目指そうかとも思いましたが、年齢を考えて辞めました。それから二十数年、コーチ業と審判をこの歳まで続けている次第です。コーチや審判の後継者を育ててはいますが、仕事や家庭の事情等で、なかなか続けていただける方が少なく、自分のお子さんの小学校在籍中のみで卒業と同時にクラブを離れてしまいます。難しいですが、後継者を作らないと、なかなかミニバスケットボールクラブから離れられない状況です。が、対外的な遠征練習試合もあり、肉体的にもそろそろコーチも潮時・リタイアかなと本気で思うこの頃です。

（高校時代のバスケットボールの対戦スコア詳細は、山田雄一氏が当時の信濃毎日新聞からデータを拾い出していただき、ご協力いただきました。感謝です、）

## 「清水ヶ丘からⅡ」に寄せて

6部 五味 亮寛 (2023年9月30日)

思えば50余年前、清水ヶ丘に集った頃は青春そのもの。訳もなく『自反而……』と大声を挙げながらファイヤーストームを囲んだり、深志高校との交歓会で松本まで暗夜行したりしたことなどが思い出されます。

先生の記憶と言えば、生物の牛山正雄先生。講義中に時折、学窓を振り向き、“陽は燦燦と輝いている”と言い放つ。このフレーズが出てくると、生徒たちに受けるのです。ご記憶のご同輩は多いのではないのでしょうか。湖周マラソンの際、通称ウシマサ坂で受け取ったハニーレモンに力づけられたことも懐かしく思い出されます。

6部の担任は福沢武一先生でした。大変やさしい、にこやかな先生でしたが、一方で、長野県下一円の方言の研究者でもありました。

その福沢先生が、東京から富士見に戻って隠遁生活を始めた私の実家を突然、訪ねて来られたことがありました。もう方言談議に終始です。そして、発行された『しなの方言集』の上下巻をいただきました。その日以来、福沢先生は私の恩師となりました。

さて、取り止めもありますが、部室が近かったせいか、原水禁に片足を踏み入れたことがありました。見るに耐えない悲惨な写真は、いまだに深く心に残り、原子力は人類が制御できない分野なのだと思うようになりました。もちろん、研究することに異論はありませんが、私にとっては、目をそむけ忌み嫌う放射能ですが、現在、諏訪赤十字病院の核医学センターにて放射線照射治療を受ける身となりました。なんと皮肉なことでしょう。

きょうも病院6階のラウンジからは、右手に清水ヶ丘を仰ぎみることができます。そして、視線を諏訪湖に移すと、朝日のきらめきが鮮やかです。このような光景に感謝するとき、心に浮かぶのは、そう『陽は燦燦と輝いている』なのです。

ああ、理想の花は何処に。

## コロナと農作業

6部 山崎 和彦 (2020年11月23日)

コロナ禍がこれほど長引くとは予想もしていなかった。3月に予定していた海外旅行をキャンセルした時には、秋ごろにまた計画を立て直せばいいかなと軽い気持ちでいたが、とんでもない状況になってしまった。東京オリンピックが1年延期になり、残念ではあったがまあ東京での開催だから仕方ないかなと思っていたが、身近な地元の祭、寺社の例祭、イベント、会議、飲食も軒並み中止となる事態。三密にはならない地区での清掃作業や屋外でのマレットゴルフや拳句の果てには山林の出払い作業までもが中止となるとは思わなかった。予防接種や治療薬の無い新型ウイルスに改めて恐怖を感じる。

終息の見えないこんな状況が続けば延期の東京オリンピックもどうなるか。更に諏訪地方の最大イベントの御柱祭も来年から柱の見立てや伐採が始まる。マスクを付けた木遣りや御柱なしの神事だけの御柱祭なんて考えたくない。

そんな状況の中で今年は農協の役も終わり、地区の回り番役にも捕まらず生活時間に余裕が生まれている。コロナの影響と相まって外出することも大幅に減少し、本業(?)の農作業に一段と精を出した。考えてみるに60歳でリタイアしてからも何だかんだと臨時勤めや地元の役職をこなしていたから、この1年は時間を有効に使うことができている。

自宅待機や巣ごもりも多い輩も多い中、幸か不幸か先祖伝来の田畑を現役時代も何とか耕作を継続してきて、周囲では荒廃農地が増える中でも自分の体力相応での耕作面積を維持し続けている。とはいっても耕地整理の済んでいる茅野や富士見又は諏訪の湖南・中洲のような大型機械の入る四角の広々とした田んぼと違い、こっちは所詮川岸の狭隘な谷間のしかも江戸時代から基本的に形状が変わっていない段々田畑農地でありその補修、維持は簡単なものではない。

春先に田んぼの水を山際から引いて来るにも、以前は関係者の出払い参加でセギの泥揚げや落ち葉の除去を行うが、耕作放棄者が増えて来たため、場所によっては自分ひとり(家族)だけで200mもの距離を引いてこなすてはならないし、大雨や台風の時は土手が抜けはしないか気がきではない。また、鹿や猪よけの電柵や防獣ネットも張り巡らせなければならぬ。だから今年は、今までは大雨やモグラによる水漏れを応急処置で防いでいた土手や畦を、手間をかけて直したり、田んぼの中や土手の途中にある大石(そのために田の形状が直線ではなくカーブしている)をハンマーと鑿でハツって、少しでも農機がスムーズに作業出来るようにもしてみた。

そんな時、ふと手を休め一服しながら田を見ると、頭を垂らし始めた稲穂が風に揺れる姿を見ると、今世界中がコロナに振り回されている事を忘れさせてくれる。ここに居ればマスクもソーシャルディスタンスも関係ない。

そんな努力の甲斐もあり(?)今年の米の収穫は若干ではあるが昨年より増えた。こんな生活が春から秋まで続き、自宅で朝、昼、晩と規則正しく食事を取り午後は昼寝の毎日

であるが、基本的には毎日家にいる自分を女房はウザったい目で見ているようだ。

ともあれ、マスク無しで自由に外出や旅行ができ、仲間と大声を出しながら一杯出来る日々が1日も早く来ることを願いたいものだ。 (令和2年11月23日記)



里の田の代かき (孫とともに)  
自分が孫の頃は周囲に家はな  
かった



山の田 ようやく田  
植えが済んで蛙が鳴  
きだした



紅葉とともに1年の  
収穫が終わり来年の  
春を待つ田



「写真左」 田んぼから見た川岸駅周辺

「写真下」

畑の作業 今年の夏野菜は梅雨の長雨にやられたが、  
夏の天候の回復で秋野菜はまずまずの収穫か



## テレビで見る日本の歴史

6部 山崎 和彦 (2021年1月26日)

最近コロナの影響もあり、この冬は家でテレビを見る時間が増えた。元よりドラマ、バラエティ番組は見るに値せずもっぱらスポーツ、映画が主であった。昨年はその野球や相撲も中途半端であり寂しい限りであった。

そんな中で、最近目を引くのは歴史考証番組がやたらと多くなった気がする。各テレビ局が競って同じ歴史事件、人物を切り口を違いゲストやコメンテーターに意見を伺う構成で、特に昨年から今年にかけては大河ドラマ「麒麟がくる」の影響もあり「信長暗殺の真意はいかに」をテーマにした番組が多かった。ゲストにも歴史家、作家、大学教授、俳優と多士済々である。

歴史家といえば家永三郎や騎馬民族日本征服論の江上波夫ぐらいしか教科書では知らなかったが、最近のテレビに出てくるゲストの名を挙げれば小和田哲男、山本博文、磯田道史、本郷和人、加久幸耕三、千田嘉博(城郭)を始めとして、俳優の高橋英樹や落語家の春風亭昇太までが歴史や城のうんちくを述べている。これらの専門家も今やあちこちの局に引っ張りだこのように諸説や新説を引っさげて登場してはいるが、中にはだいぶタレント化している御仁も増えてきている。

我々が中学や高校で習った内容も現在とは大分様変わりしてきている。理由は考古学や歴史書、古文書等の新たな発見、第1級の資料の発掘があり、教科書も年々変わってきているようだ。

例を上げれば縄文時代は獣の革を着て鹿や猪を狩っていたと習ったが、今は繊維を編んだ衣服を着て栗やどんぐりを植えて定着していた。稲作の始まった弥生時代には硯が発見されすでに文字を使用していたとか。縄文、弥生、古墳時代をどこで線引するのが難しくなっている。

聖徳太子の名称も今は厩戸皇子うまやどのおうじ(聖徳太子)と記載されている教科書もあるようだし、「いい国作ろう鎌倉幕府」の1192年は早まって1185年が変わってきている。

歴史に登場する人物では、信濃にも大きく関係のある武田信玄やその息子勝頼。特に勝頼に関しては長篠の戦いで信長・家康の連合軍に大敗し武田家を滅亡に追い込んだ暗愚の将として伝えられているが、実際は信玄とともに行動しているときは武功も多く、信玄亡き後、長篠の戦いの後にも、信長に奪われた東美濃地方を取り返しているし、家康に奪われた高天神城の戦いでは見事な策略を駆使し奪い返して周囲の武将も勝頼には一目置いている。

江戸時代には生類憐れみの令の犬公方徳川綱吉や、賄賂政治の老中田沼意次らも悪行ばかりでなく福祉医療や財政立て直しに尽力している。忠臣蔵の悪役吉良上野介も当初はお咎めなしで切腹の赤穂浪士に比し命拾いをしたが、結局は江戸町民からの批判もあり結局は浪士に討ち取られている。しかし地元では(吉良町)では新田開発や灌漑用水路の普請で名君と慕われている。なお、上野介の子息(嫡男にして養子)義周よしちかは討ち入りの際は果敢に

戦ったが親父の一件もあり最後は諏訪に流刑となり、その3年後に21歳の若さで寂しく亡くなった。今は諏訪市の法華寺に墓がありそこで静かに眠っている。

幕末の英雄坂本龍馬も明治維新の立役者として人気があるが、薩長同盟締結は部下の小松帯刀がすべてお膳立てしているし、亀山社中では外国から輸入した武器販売の悪徳商人（言い過ぎかな?）。またまた明治国家体制の基本方針となった船中八策の起草も原本がなくフィクションであるとの説もあるくらいだ。

等々、特に戦国武将の評価は様々に変わってきている。これも天下を取った徳川に有利に歴史書が編纂されたり、江戸時代の歌舞伎などに取り上げられる演目が当時の町民に受けを良くしたり大げさに演じられたこともある。我々が今まで持っていた英雄や武将のイメージが悪く崩れるのは寂しいものがあるがまた逆もあるということだ。

テレビで見る歴史番組はディレクターの意図や解説者の思い込みもあり、事実と多少相違することもあるだろうが全体の流れはわかる。それと書籍等でじっくり学んだりインターネットで断片的に調べることも良いが、昨今のテレビ番組は動画やCGも駆使しビジュアルで解りやすいし記憶にも残る。

何れにせよ授業で習ってきた表面的あるいは受験勉強のための丸暗記だった日本の歴史も、一つの事件、事象を周囲の人物や時代背景を深く掘り下げて見ると色んな新しいことを発見できて面白い。

これからの余生、何事も一方的あるいは表面的に判断することは避けたいと思うと共に、気楽に歴史を学ぶ事を楽しみとして今後も生涯学習の一つとしていきたい。そんな事を学んだコロナ禍での今日この頃である。

(令和3年1月26日記)



たかてんじんじょう  
高天神城跡 (静岡県掛川市)



きらよしちか  
吉良義周の墓  
(諏訪市中洲神宮寺法華)

## ジャズ喫茶開店顛末記

7部 川島 弘 (2023年10月2日)

### 思い出す友

同窓の何人かの方はつとにご存じかと思いますが、私は高校の国語教師を58歳まで勤めた後、自宅隣町の箕輪町でJAZZ&ART CAFÉ PLATという小さなライブハウスを兼ねた喫茶店を営んでいます。今年12月には一応開店12周年を迎えることとなりますが、ここで「一応」と書いたのには訳があり、この足掛け4年ほど、コロナ禍を口実に事実上閉店状態が続き、ようやくこの半年ほど前からライブなどのある週末の営業をぼちぼち再開したばかりというところだからです。

そんなわけで、もう何年も前のことになってしまいましたが、同窓の山田雄一君(2部)や坂井明英君(7部)などにも来店していただいたことがあります。また、ジャズ・ベーシストの向山博志君(5部)には何度も店のライブで演奏していただいています。他にも近隣に住む同窓生には時折来ていただいていたのですが、そんな中でも武井孝博君(故人・5部)が前触れなく訪れてくれ、中日新聞の記者時代の話、闘病中の話、そしてそれを綴った著書の話など親しく語ってくれたことを思い出します。病の後遺症であったのか、それから一年余り経って彼の訃報を耳にしました。葬儀に参列させていただいた時には、店で語り合ったあの日のことが脳裏によみがえり、遺影を前に思わず落涙を禁じえませんでした。遺作となってしまった彼の著書に目を通すたび、不自由な体でなおかつ記者魂を失わず、必死にリハビリに励んでいた武井君の姿にあらためて心動かされ、カウンター越しの笑顔が昨日のこのように思い出されます。

そしてもう一人思い出すのは平林清準君(故人・6部)です。亡くなる二年ほど前だったと思います。店で開催するライブの情報を新聞で見たとあって予約の電話を彼からもらいました。前後二回ほどだったと思いますが、御父上と思いき方いつも二人で来てくれました。ライブの時はこちらもバタバタしていて、ゆっくり話をすることもできなかったのですが、ある日こんな電話を彼からもらいました。それは「俺は今、寺子屋という塾を始めた。寺子屋としたのは、読み・書き・そろばんといった学びの基本、とりわけ子どもには読み書きが最も大切である。それを基本とした塾だから寺子屋とした」そして私が元国語教師だと知っていたからでしょう、「ぜひ寺子屋を手伝ってほしい。箕輪にも作ってほしい」という内容でした。

平林君がそれまでどんな仕事をされていたのか私は知らなかったのですが、おそらく教育とは関係のないことをされていたと思われる彼から、このような話がもたらされるとは予想もしていなかった私は意外に思いましたが、同時に彼の熱っぽい話しぶりに心を動かされ、「それじゃあ、また会ってゆっくり話を聞かせてくれ」ということでその時は電話を切りました。ところがその後、気にはしていたものの私も何かと用事に追われ、平林君との再会が果たせぬままに一年ほど経ってしまったある日、彼が亡くなっていたことを知



ったのです。思いがけぬことに驚かされたのと同時に、あの日の電話の声がよみがえり、私はしばし茫然としました。亡くなってから大分日が経ってしまっていたので、葬儀にも伺えずじまいで、とても心残りです。

今ここに武井君、平林君二人のことを書きましたが、実は両君とも清陵時代にはまったく接点がありませんでした。そんな二人なのですが、私が店を開いていたことが縁となって親しく語り合うことが出来ました。しかし、お互いに第二の人生を踏み出そうというその矢先に二人は先立って行ってしまいました。両人ともに無念であったことでしょうし、私自身、新しい友人と言っても良かった二人との友情を深める時間を永遠に失ってしまったことが本当に残念でなりません。言い古された言葉ですが、「一期一会」ということの意味をあらためて痛感した次第です。

### 喫茶店を開く — 「風呂屋の番台」が第一希望だったのに

さて、冒頭から寂しい話題で申し訳ありませんでした。この後は少しくだけて、私が喫茶店を開いた経緯についてお話ししましょう。

冒頭に書いた通り、私は大学卒業後県立高校の教師となって58歳の時、定年まで少し残して早期退職しました。その理由は「自身の能力不足」と「校長への不信・反感」にあったのですが、当該の元校長が存命中でもあることから、その詳細についてはまたの機会に譲ることとし、その後のことを書くことにします。

サラリーマンだった人ならおそらく誰でも、50代も半ばを過ぎ定年が近づいてくる頃になれば、退職後の生活について何となくあれこれ思い浮かべるものだと思います。私にとっては、それにはいくつかの候補があった中で、その上位三つが①風呂屋の番台、②古本屋のオヤジ、そして③ジャズ喫茶のマスターだったわけです。

第一希望の①は残念ながらほぼ絶滅した職業、②も「BOOKOFF」など新手的な大型古書店が幅を利かせるようになってからはとても個人店の営業は難しい、というわけで③を選択したのです。

箕輪町のR153バイパス沿いに店を構えたのが2011年の12月でしたが、開店を決意するまでには若干の経緯がありました。まずは当然のことながら資金の問題。これは退職金が入ったことと家族や妹、叔母など周囲からの援助もあって何とか見通しでした。次に経営の見通し、要するにやっていけるかどうかということですが、これについては正直な話、その時の私は「イケイケモード」に入ってしまったから冷静さを欠いていたのだと思います、あまり深くも考えず「何とかなるさ」というくらいの気持ちでした。そんなアバウトな状態でジャズ喫茶の開店を決意してしまったわけです。聡明にして冷静沈着な皆さんからすればまことに笑止千万な話でしょう。事実、まもなく開店12周年になりますが、店は毎日火の車です(-\_-;)。

## 渋谷道玄坂『喫茶ライオン』での体験

退職したのは2010年の秋でした。それからの一年ほどは充電期間といいますが、これといったことをするでもなくのんびりと過ごしながらか、これから開く店の参考になりそうな喫茶店やカフェなどを時折巡り歩いたりしていました。

そんな日々を過ごしていた翌年春のある日、私はたまたま上京していました。当時東京には出版社勤めの娘と大学生の長男が住んでいました。平日だったので娘は仕事、春休みで暇だった息子を誘い出して渋谷あたりのカフェ巡りでもしようと思って宿を出たのですが、しばらく前にインフルエンザに罹ってまだ本調子でなかった息子はおやじの誘いに乗り気ではなかったのですが、飯を食わせてやるということでしぶしぶ出てきました。渋谷駅で待ち合わせ、昼を挟んで三時間ほど歩き回って目ぼしいカフェなど覗いて歩いたのですが、どこもおしゃれ過ぎて自分の抱くイメージに合うような店は渋谷の表通りには見つかりません。

不案内で道に迷ったりしているうちにくたびれてしまって、どこかで一休みしようと思って入ったのが、道玄坂脇を少し入ったところにある『喫茶ライオン』という店でした。ご存じの方もいるかと思いますが、この店は都内でも有名な老舗の名曲喫茶で、昭和モダンの典型と言ってよい内外観の建物に、巨大かつユニークなスピーカーと膨大なレコードを備えたクラシック専門の音楽喫茶です。その店は音楽を静かに愉しむことをコンセプトとしており、「会話禁止」がルールとなっています。席もスピーカーに向かって一方向に置かれています。たとえどんなにおしゃべり好きの女性たちもラブラブの恋人同士でもここでは黙って音楽に耳を傾け喫茶するしかないのです。

私たち二人も通路を挟んで別々に座って、私はコーヒー、息子はココアかなんかを注文し、それに無言で一口二口、口をつけていたその時でした。体に大きな揺れを感じ、目を転じると吹き抜け天井を支えている丸柱がぐらぐらと、その動きがはっきりわかるほど揺れています。これまで経験したことのない揺れ具合でした。建物は古い木造ですから揺れにともなってギシギシと音を立てます。そんな大きな揺れが何秒間も続くのです。

皆さんも学校で毎年やっていた「避難訓練」を覚えていると思いますが、それ地震だ！という時には、すぐに机の下にもぐりこむ、というのが鉄則でした。図体が大きくなった高校生が机の下にもぐりこむなんてことは現実的とも思えないし、事実高校ではそんなことは訓練でもやりませんでした。それでも、その時は「どこかに逃げなくては」という思いは生じたのですが、咄嗟に体は動きません。しかし、恐怖で身がすくんでしまったというわけではありません。今思えば不思議ですが、その時は建物と一緒に自分の体も大きく揺れる中で「や、これは倒れるかな？」「いや、じきに収まるんじゃないかな」「木造だからどんな風につぶれるのかな」などとほんの一瞬の間だったと思いますが、そんなことを考えていて、肝心の「逃げる」とか「何かで身を防ぐ」という（避難訓練での教え）ことは全くしなかったのです。

私たちが店から逃げ出したのは、間もなく襲った二度目の揺れが来た時でした。最初の

揺れがどうにか収まって、やれやれとコーヒーカップにあらためて口をつけた刹那、再び大きな揺れが来ました。今度は違いました。私の前の席に座っていた男性があわてて外に飛び出すのと同時に、「親父！やばいぜ」という息子の声とともに私たちも外へ逃げだしたのです。言うまでもなく、これは2011年3月11日午後2時46分からのことでした。

### ジャズ喫茶開店に踏み切る ―被災者の無念が後押しに

その後の経緯や渋谷界限、都内の様子についてはいろいろ書き残したい思いはありますが、これも後日に譲ることとして、この震災の体験と私が店の開店に踏み切ったこととの関連について最後に述べて終わりたいと思います。

震災当日以降、その被害の状況が次第に明らかになるにつれ、私の胸にはある感懐がわきあがってきました。その一つは、たまたま上京して渋谷に息子と二人でいる時にあの大震災に見舞われたという偶然、そして、よく無事でいられたという僥倖。もしあの日東京に行っていなかったとしたら、おそらくあの出来事に対する私の思いはちょっと違っていただかもしれないと思うのです。

そして、被災された人たちの悲惨な状況がつぎつぎと明らかに知らされるたび、私にはまた新たな思いが胸に生じてきました。それは、思いもよらぬ災禍に見舞われ、尊い命を、大切な家族を、友人を、財産も夢も希望も、一瞬のうちにすべて失ってしまった人たちが何万人もいる。その人たちの悲しみ、無念さはいかばかりであろうか。中には私など比較にならぬほどの苦労や努力を積み重ね、必死に生きて来た人たちもどれほど多かったことだろう。あの震災はその人たちのすべてを奪ってしまった。自分は今こうして無事に生きている。もしあの時『喫茶ライオン』が倒壊し、その下敷きになっていたら自分も息子もおそらくこの世に永らえてはいなかっただろう。そう考えた時に、「俺は幸いまだ夢をいざなうことができる。何もかも失ってしまった人のことを思えば俺にはチャンスが残されているじゃないか」という思いが湧き上がって来たのです。

今、個人喫茶店の経営はどこもみんな苦しいです。とりわけ客層の限られるジャズ喫茶など「飲食業界の絶滅危惧種」と言われるありさまです。それを承知の上で私があえてジャズ喫茶を開店したのは、「あこがれ」や「その場の勢い」ということも勿論ありましたが、あの震災時の経験や被災した方々への思い、といったものが大きな後押しとなっていたことも事実です。私が店を開店したのは震災から9か月後、その年の暮れも押し迫った12月22日でした。

長々と書いてしまいましたが、私の第二の人生の選択にかかわるこの話が皆さんにも何らかのご参考になってくれれば幸いです。最後に一言、「ぜひ一度 CAFÉ PLAT にお出かけください」ただし、事前のお電話（090-3343-4151・0265-93-1005）をお忘れなく。営業が不定期ですから(-\_-;)

## “赤秋”を謳歌する

7部 田中 俊廣 (2023年9月24日)

現役で仕事（高校教員）をしている間は、時間的にも金銭的にも余裕がなく、やりたいと思いつつもできないまま過ぎてしまったことがたくさんあった。仕事の方はそれなりに充実していたが、定年を過ぎ、再任用期間も終わって退職をするときには、これからはやりたいことができる、少しワクワクしたものだ。退職の挨拶の時には、「これからは青春を謳歌したい」というようなことを言おうとした。心身ともに若さを保ちつつ、青年のような好奇心、チャレンジ精神を持ちながら、いろいろなことを楽しみたい、といった気持からである。

しかしさすがに“青春”という言葉を使うのには少し抵抗があった。活力に満ちた、前向きなイメージを持つと同時に、少し棘々しいものをもって突き進むような危うさもはらんでいる。60代、70代は、そんなに青臭くはない。“春”に芽吹き、開花したものを、充実の“夏”につなげられるだろうか。残された時間はそう長くはない。サミュエル・ウルマンは、あの有名な詩「青春」の中で、“青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ・・・(後略)”と書き、70の青春もあると説いている。私も斯くありたいと大いに勇気づけられる詩である。しかし原題は「YOUTH」であって、漢字表記の「青春」とは微妙にニュアンスの違いがあるように思うのだ。

そんなことを考えていた時に、ある新聞の対談記事で、俳優仲代達也氏が、面白いことを言っているのを見つけた。老年期に入ってなおはつらつと活動するこの時期を“赤秋”と呼びたい、というのだ。同氏の奥様の造語だという。長い人生の中で積み重ねた様々な経験が実を結び、次の世代につながる種となる。それは収穫の“秋”に通じる。そして秋と言えばもみじの紅葉を連想し、“赤”はまさに秋の色である。“錦秋”という言葉はあるが、これではきらびやかすぎてそぐわない。私はこの“赤秋”という言葉がとても気に入って、退職の挨拶の時に「これから“赤秋”を謳歌したい」というような話をした。

さてそんな思いで迎えた退職後の日々であるが、それなりにいろいろなしぐらみがあって、思えどもなかなかできないことも多い。しかし時間的自由度は格段に大きくなった。平日であっても当日の空模様を見て、カメラを持って飛び出すなんてこともできるようになった。最近よく行くところは霧ヶ峰である。地元にある自然景観の大変素晴らしい場所とはいえ、子どものころは気軽に行ける場所ではなく、就職してからは時間もなく、訪れる機会はなかった。あのビーナスラインの建設計画と自然保護運動とで揺れている時期にも、全くかかわることはなかった。しかし、今なら行ける。高原を歩きながら、雪解けから始まって花の季節を迎え、やがて草もみじの草原になる、そんな季節の移ろいを見たい、と思った。そして、自分でも楽しみつつ、自然の保護や環境保全などについても考え、少しでも力になればと思い、霧ヶ峰パークボランティアの活動にも参加している。

霧ヶ峰も山歩きではあるが、時にはもうすこし手ごたえのある山歩きも楽しみたいと思う。実は若いころから登山をしたいとの思いはあったのだが、なかなかその機会はなく、基礎的訓練を受けることもなかった。50代も後半に入ってから、山岳部の顧問をすることになった。地学をやっているのならば、山を歩くことはできるだろうと。山岳部の場合は引率の副顧問といえども、生徒と同じ装備をもって山道を歩かねばならない。大変ではあったが、念願の本格的登山でもあり、実に楽しかった。槍ヶ岳、奥穂高岳、北岳、などにも登ることができた。この経験が、山へのあこがれをより強くしたように思う。今は単独での日帰り登山しかできないが、八ヶ岳はちょうどいい“ホームマウンテン”である。高山植物の可憐な花を見つけると、らんまんの万太郎ではないが、“この厳しいところでよく咲いているなあ、今年も会いに来たぞ”などと声をかけたくなる。6月の第1日曜日、今年も赤岳山頂の開山祭に参加することができた。



山歩きを楽しむためには、日常的な体力維持は欠かせない。そんなこともあってほぼ毎日ウォーキングをしているが、時には軽いランニングもしている。その延長線上に諏訪湖マラソンがある。かつて諏訪湖畔を通勤で通っていた時に、諏訪湖マラソンの看板を見ながら、話のタネに一度は走ってみたいと思っていた。2008年第20回大会に娘が走るというのに合わせて初めて参加し、以後数回参加した。高校時代の諏訪湖1周マラソンでも特別に速かったわけではない。特に何かのスポーツをやってきたわけでもない。そんな人間が、壮老年期に入って、何を好き好んでマラソンなどをやるんだと思われるかもしれない。自分の目指すのは順位やタイムではなく、とにかく完走すること。ゴールまで走り切るという意味と、途中歩くことなく走り通す、という意味で。単調で、苦しさに耐えているだけのように見えるランニングも、実は結構自身の体と心に向き合い、対話をする時間となっている。それはまた明日への活力にもつながっていくように思う。



なみの会「古希の集い」の翌日、もう一度「完走」を目指してみようと思っている。

## “生きている”実感

7部 林 元夫 (2023年9月29日)

同期の横沢教夫君が9月に逝った。最近、町議会の傍聴に来て、言葉を交わしたばかりだったので、驚きとともに大変なショックであった。彼は、私が下諏訪町の町会議員になったとき税務課長で、バリバリ仕事をしている。まじめを絵にかいたような君であった。彼は模範的な下諏訪町民であったと思っている。私はというと、13年目の議員で居座っている。出来不出来の評価は後世に委ねるとして、一生懸命に町のためには、生きている。

いよいよ72歳となって、過去を振り返る機会が多くなった。終活の時期に来ていると、つくづく実感する。人それぞれに、趣味に生きている君もいれば、区長などの役やボランティアで頑張っている君も多い。

“生きている”実感は、私にとっても大切なことだ。議員として一般質問するときの高揚感、その準備段階での調査と研究、そして結論付けされた議員提案を見出した時の喜びは、何にも増してうれしいと感じる。だから、今が「いとおいしい」と感じるのかもしれない。

生きるためだけに生きていた時代は、妻や子供と共に過ごす時間が少なかった。今でも愚痴っぽく「あの時はいなかった」と言われる。がむしゃらに働いた時期も過ぎ、妻と語らう時間も増えた。もう46年間も一緒にいる。友達には「会社がだめになったときも、よく別れなかったね」と言われる。我慢強い妻だ。私を自由に生きさせてくれた。議員になるときも真っ先に賛同してくれた。感謝しかない。

さて諏訪清陵高校。コロナ過の中で、同窓会も開けなくて先輩たちとも疎遠になってきていたが、今年4年ぶりで下諏訪支部総会を再開した。“金色の民イザヤイザ……”である。変わらぬ先輩達の「清陵愛」には感服する。大学よりも愛着を感じている風である。皆さんたくさん集まって頂いた。下諏訪商工会議所会頭の小林秀年氏(79回生)の講演も開催。同窓生の学習意欲は衰えていない。死ぬまで勉強だな(笑)

## 雑感(18年ぶりの ARE 達成に寄せて)

7部 原 恵二 (2023年9月20日)

私は60数年来の阪神タイガースファンである。2005年以来優勝はなく、18年ぶり6度目の優勝が、やっと今年2023年に達成されたのである。9月14日の甲子園球場、巨人戦に勝利して、悲願の優勝である。TV観戦でその瞬間を見届け、感激で目頭が熱くなった。そのまま、カミさんと2人で祝杯をあげ、TVを見ながら優勝の歓喜に酔いしれた。

以前、TV中継で、ある17歳・高校生の「生まれてから阪神の優勝を見たことがない」というコメントが紹介されていたが、18年ぶりというのはそういうことである。阪神タイガースは関西の人気球団で、通常であれば年間200万人超の観客が甲子園球場を訪れる。熱狂的なファンも多く、甲子園球場は連日4万人超の観客で満員となる。「優勝しなくても、優勝争いをすればOK」と一部の球団首脳は考えていたようであるが、流石にセリーグ6球団で18年も優勝がないというのは尋常ではなく、昨年末にその球団首脳が交代となり、岡田彰布監督が誕生。令和5年、ようやく悲願達成となったのである。それにしても、勝利に向けた岡田監督の采配は的確で、シーズンを通して実に見事であった。岡田監督には、心からの感謝と最高の賛辞を贈りたい。

私が子供の頃、野球といえば巨人で、全盛時の王・長嶋を中心に、川上監督率いる最強軍団が1965年からは9連覇も達成。向かうところ敵なしの状態であった。そんな中、1959年に阪神に入団した村山実投手は、その巨人軍に常に真正面から全身全霊で挑み続け、剛速球と伝家の宝刀フォークボールで敢然と立ち向かう「炎のエース」と称された。次男坊で反骨精神旺盛な私にとって、そんな村山投手の勇姿は正にヒーローであり、憧れの存在であった。私が熱狂的な阪神ファンとなった所以である。現役14年間通算で、222勝、防御率2.09の成績は、右手故障をかかえながらの立派な成績である。

私にとって打者としての憧れは、1968年入団の田淵幸一捕手である。巨人ファンであった田淵選手は、巨人以外に行かないと公言していたが、ドラフトで阪神に指名され、渋ったが熟慮の末、阪神に涙の入団。初年度、22本塁打を打って新人王を獲得。1975年には、43本塁打で本塁打王を獲得、王貞治の本塁打王を連続13年で止めたのである。田淵の魅力は、滞空時間の長い美しい本塁打である。「ホームランアーチスト」と称された天才打者。その田淵も在籍10年で西武にトレードされ、現役16年通算474本塁打の実績を残した。

最近の阪神で最も注目している選手は、佐藤輝明選手である。入団から3年連続20本以上の本塁打を達成(7人目であるが左打者ではプロ野球史上初の快挙)。佐藤選手の最も衝撃的なシーンは、2021年4月9日の横浜球場でライトスタンドの場外まで飛ばした本塁打をTV観戦した時である。驚異的な弾丸ライナーの本塁打も、真に魅力的である。

とりとめもなく書き綴った文章であるが、これも『18年ぶりの ARE 達成』の感激によるものであることをご理解頂きたい。

## この歳になって思うこと

7部 山田 思鶴 (2023年9月24日)

正直、この歳まで生きていられるなんて、若い頃は思ってもみなかった。記念誌に原稿を書いて、と頼まれても、特に人に伝えたい事は何もないし、恐らくこうした歳になると志とか社会貢献などと難しい事はあまり考えなくなり、この心地よい日常をどこまで続けられるか、要は自分の健康と家族の健康が一番の関心事になっているのではないかと思う。

今、高原の麓に住んでいる。四季折々の自然の変わり様や、家の近くに湖があって、鯉が浮かんでいるのを見たり、折につけ、安全祈願で神社にお参りしたり、毎朝シェットランドシープの散歩をしたりと穏やかな日々を過ごしている。プールに行き始め5年になるが、最近は週に5回位1時間ウォーキングをしている。いろいろな年齢の友達ができ、とても楽しくてしょうがない。

思えば、小さい頃から大学に入るまで勉強ばかりしていたので、普通の生活をするとか、仲間とおしゃべりをするとか、一緒にどこかへ出かけるとかの経験をしてこなかった。だから、プールで出会う友達とたわいもない話をしたり、色々な人が、いろいろな生活と人生を送っているのを見て、そうしたことが自分にとってはびっくりするほど楽しいことで、この年で毎日楽しい生活を送っていると感じている。おまけに近くに温泉がいくつかあるので、朝の6時半ごろ30分位で温泉に出かけ、風呂の中から近くに聳える山や川を眺めたりして、普通はこうした生活はできないので、自分にとっては今の環境が最高と思って暮らしている。

さて、前回の記念誌に、自分が海外の仕事ができるかどうかとても迷っていると書いた。幸いなことに、とても良いご縁をいただき、ミャンマーやインドネシア、スリランカの人々と知り合いになり、こうした仕事も地についてきたので、やはりやって良かったと思っている。

これで自分の宿題は終わりかなあと思った瞬間、学童保育をやってみないかという話が舞い込んだ。実は15年位前から、学校の授業が終わった子供たちに関わる仕事をやってみたいと思っていた。親が仕事を終えて迎えに来るまで子供が楽しく過ごして、その時間の中で子供たちが賢く、未来に向かって育っていきけるような関わりをしてみたいと思っていたのだが、15年以上も経ってから話が突然舞い込んで、またまた迷ってしまっている。なかなか経営面で難しく、赤字となる仕事なので、自分がやるべきなのか、手を出すべき



なのか、やめた方が良いのか、また頭を悩ませている。そうするとまた、自分の存在と社会的意義はなどと難しいことを考え始めてしまうので、どうもこの日常普通に暮らすという事と社会的意義のある仕事をするべきというプレッシャーのループから永遠に脱出できないのかなあという気にもなってくる。どうしたものか2週間位のうちに決めなければならぬことなのでまたまた頭が痛い。

今年やり残した事は、あと1つ。11月の沢田研二のコンサートに4年ぶりに行きたい。これもコロナのことを考えると、行くべきか行くべきでないか、ずっと思いをめぐらせるばかりで結論が出ない。

終わりに、皆さんには、「みんな、ずっと元気でいようね」と伝えたい。

## 65 歳から日本百名山踏破に挑戦中

7 部 横内 孝文 (2023 年 9 月 24 日)

高校時代に山岳部の連中(天木正春、宮坂春樹ら)が、顧問の先生と八ヶ岳へ登ってウイスキーを飲んだなんて話しているのを小耳に挟んだり、社会人になってからは職場の仲間が、休日に登山に行ってきたことを楽し気に話しているのを聞き、何となく山登りに憧れを抱いていた。

2015 年 63 歳の時に会社 OB 会のトレッキング同好会に入会し、月 1 回のトレッキングが始まった。5 月例会の山梨県王岳でデビュー、幸運にも 7 月に甲武信ヶ岳(こぶしがたけ)、8 月に四阿山(あずまやさん)と百名山 2 座に連れて行って貰うことができた。段々欲が出て、65 歳退職の際の関係者への挨拶で、「日本百名山踏破」と「四国霊場八十八カ所歩き遍路」を目標に掲げた。

2016 年 11 月に退職し 2017 年から本格的に取り組んだ。車も軽の N ボックスから車中泊が可能なフリード+に替え、北は福島県、南は屋久島まで、ほとんどは単独行で時には仲間と登ってきた。2023 年 8 月時点では 77 座(2015 年 2 座、2016 年 5 座、2017 年 15 座、2018 年 17 座、2019 年 12 座、2020 年 11 座、2021 年 12 座、2022 年 3 座、2023 年 0 座)である。3000m 峰は 21 座中 17 座終わった。

山小屋の宿泊費を節約するため標準コースタイムが 1 泊 2 日なら日帰り、2 泊 3 日なら 1 泊 2 日で済ませてきた。山が近い場合は、1 日に 2 座登ったこともある。車中泊で 6 座連続が最多。

諏訪地域の地の利を生かして北アルプス 15 座は終わっているが、南アルプス 4 座、北海道 9 座、東北 9 座、草津白根山が残っている。コロナの影響で 2020 年からは予定が狂ってしまった。コロナ前は天気予報を見て良さそうなら、山小屋の予約なしで行けたのだが、今は完全予約制でインナーシートか寝袋持参と荷物も増えた。この歳でテント泊はザックが重くなりちょっとキツイ。更に、公益財団法人や地域の役員の仕事が増え、自由時間が減ってきてしまい思うように行動できなくなっている。

エベレストを見たくて、2019 年にエベレスト街道トレッキングでネパールのクンデピーク 4200m(住んでいる所自体の標高が高いので現地の人にとっては丘)へ行ってきた。長野県青木村出身の故宮原巍(たかし)さんが建てた世界で一番エベレストに近い豪華ホテル「ホテル・エベレスト・ビュー(3880m)」にも泊った。ヒマラヤは真っ白く高い峰々が続く素晴らしい眺めだった。宮原さん経営の旅行会社を使ったが、奇しくも下界へ戻る日に宮原さんが亡くなられた。翌 2020 年更に高いエベレスト・ベースキャンプに近いパラカター

ル 5545m へ行こうとしたら、コロナでネパールに入国できなくなってしまった。何とか近いうちに行って見たい。

高さに関係なく、どんな山でも頂に立った時の達成感と展望は格別だ。泊まりなら日の入り日の出、満天の星が美しい。登山道にはきれいな高山植物もいっぱい咲いていて癒される。雷鳥には何回も遭遇した。登山は事前に計画を立てたり登山中に判断をしたりと、体だけでなく頭も使い、老化防止にととても良い。最近は山の事故のニュースが多い。72 歳になるのでニュースにならないよう安全第一で、数年の内には達成しようと取り組んでいる。

<印象に残っている山>

○横尾→槍ヶ岳→大キレット→奥穂高岳→前穂高岳→岳沢（長野県・岐阜県）2019 年 9 月 2 泊 3 日で三大キレットの一つ大キレットにチャレンジした。長谷川ピーク、飛騨泣きといった難所を越えたが、最後の北穂高岳から涸沢岳へ登る斜面の方がきつく感じられた（2 日目の最後で疲れていたせいかも知れない）。

○日光白根山（栃木県・群馬県）2019 年 10 月

朝方は強い雨、1 日延ばそうか車中で悩んでいたら、台風通過直後の雲間に青空が見えたので登り始めた。しかし、途中から台風の吹き返しで猛烈な雨風となり、何とか頂上に辿り着いて証拠写真を撮り、一目散に下山した。恐らく山にいたのは私ひとり、命の危険を感じた。天気が良ければ簡単な山である。悪天候時の山は怖い。

○黒部五郎岳（富山県・岐阜県）2020 年 9 月

登山歴 6 年で、百名山北アルプス 15 座終了、通算 55 座踏破。偶然にも五郎、15、55 のゴーゴーとなった。山頂には私一人で貸し切りだった。

○宮之浦岳（鹿児島県屋久島）2021 年 10 月

せめて曇りを期待して行ったが、山頂は風雨が強く急いで下山した。有名な縄文杉や白谷雲水峡も見てきたが、1 年に 366 日雨が降るの噂通りとは言え、ただ百名山日本最南端まで行ってきただけの感あり。天気の良い時に再度行って見たい。その翌々日の霧島山から、延期になった H2 A ロケット打ち上げを見られたのはラッキーだった。

○石鎚山（愛媛県）2021 年 10 月

仲間と行った 1 回目は雨降り。頂上神社から先は猛烈な風雨で視界ゼロのため最高点の天狗岳は諦めた。屋久島と九州の山へ登った帰路に再チャレンジ、天候に恵まれクサリ場も全てこなし天狗岳にも登り念願が叶った。

○皇海山（栃木県・群馬県）2019年10月

国道から登山口までの道路が悪路で狭くかつ12kmと長い。山頂からの眺めも良くなく二度と行きたくない。深田久弥さんは何故百名山に選んだのだろうか？



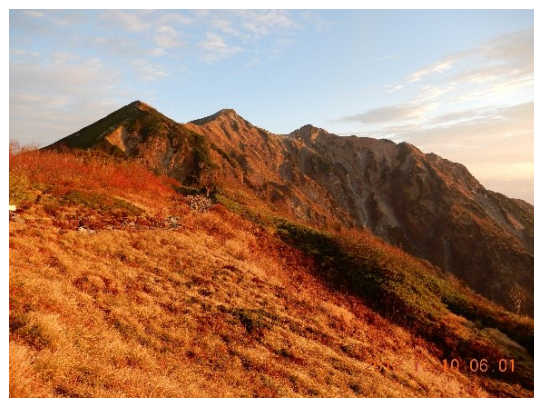
奥穂高岳 2017.9.14  
左の尖りが槍ヶ岳



槍ヶ岳 2018.8.6  
山頂は狭く MAX10 人位



剣岳 2018.9.19  
巷で言われるほど大変ではなかった



朝日に染まる鹿島槍ヶ岳 2018.10.10  
Beautiful



雷鳥（爺ヶ岳） 2018.10.9  
5~6羽いて1m位まで近寄ってきた



クンデピーク 4200M（ネパール）  
2019.11.22

## 四国霊場八十八カ所歩き遍路「結願」

7部 横内 孝文 (2023年9月24日)

特別な目的があった訳でもないが、四国を歩いて一周することに興味を持ち、66歳から四国霊場八十八カ所歩き遍路に挑戦した。たまたま宗派は弘法大師を開祖とする真言宗だが、お経は法事のときのみで信心深いわけではない。

四国のお遍路は、八十八ヶ所の霊場(寺)を回ったあと最初の霊場に戻り、最後にお大師様がいる高野山を参詣して終わる。ほとんどの人は1番から右回りの順打ちをする。2回目3回目で88番から左回りの逆打ちをする人もいるが、遍路道の標識は順打ち向けに整備されているため、逆打ち用の標識は少なく順打ちより大変である。一度に全部を回る通し打ちと県ごとに分けて回る区切り打ちがあるが、決まりはなく何番から始めてもどのように回っても良い。歩き遍路が道に迷わないように遍路道の案内標識が整備されているが、お遍路さんに対する思いの強さにより、すごく充実している地域とおぎなりな地域の両方があった。

2018年から1年に1県、4年かけて四国4県を回ることにしたが、結果として2020年はコロナ禍でお寺や遍路宿が閉鎖されてお遍路ができず、実質3年間で回った。

2018年3月26日に徳島県の第一番札所霊山寺(りょうぜんじ)で必要な備品を購入し身支度を整え、一抹の不安を抱えながら巡礼を開始した。都合4回で徳島県23ヶ寺、高知県16ヶ寺、愛媛県26ヶ寺、香川県23ヶ寺をすべて歩いて回った。2021年4月1日に八十八番大窪寺で「結願(けちがん)」の証書(発行料2千円)を頂き、第一番霊場へ戻りお礼参りをした。その足で徳島港からフェリーで和歌山港へ渡り、南海電鉄九度山駅から町石道を高野山大門まで歩き、4月4日に奥之院の弘法大師御廟に参詣し完結した。

結果として、やり切ったという充実感が得られた。その他は何も変わっていない。総歩行距離1251km、歩行日数44日、平均1日約29km、最長1日41kmであった。

歩きやすいトレッキングウェアの上下に、背中に「南無大師遍照金剛」の文字が入った白衣(びやくえ)を着て、菅笠を被り、金剛杖を持ち納経帳や着替え等を入れたリュックを背負った。毎日朝6時から7時の間に出発し、ガイドブックの地図や遍路道の案内標識を頼りにお寺を回り、午後4時から5時くらいに宿に到着するの繰り返しである。長距離を歩く日は朝6時前に出発したこともあるし、到着が午後8時過ぎになったこともある。当然雨降りの日もあった。着替えは毎日宿で洗濯をする。大体洗濯機は無料だが乾燥機は有料である。

霊場にお参りした際には作法がある。ローソクと線香を供え、賽銭と住所氏名を記入し

た納札（おさめふだ）を納め、お経（般若心経、他）を唱える。これを本堂と大師堂の2カ所で行い最後に納経帳にご朱印を貰うので、真面目にやると20～30分はかかる。納経所が開いているのは午前7時から午後5時までで、時間外に行っても御朱印を貰えない。霊場間の距離が一番長いのは37～38番の81km、次は23～24番の75km、2日間ただひたすら歩くだけである。一番近いのは72～73番の0.6km。菅笠や納札にある「同行二人（どうぎょうににん）」は、常にお大師さんと二人連れ一人じゃないよの意味である。

最初の徳島県へはスニーカーで出かけたが、山登りが趣味の私でも山道が多く大変だった。その経験から次の高知県では登山靴にしたところ、今度は登山靴には不向きな平坦な舗装道路を長時間歩くコースであった。そのため足を傷めて歩けなくなり、途中で断念し帰宅する失敗もあった。山の中を歩くのか海岸端を歩くのか下調べが不十分であった。

歩き遍路は大体同じペースなので同じ人と同じ宿に泊まることが多く、情報交換を通じて色々な人と知り合いになり、今でもSNSで連絡をとっている人が5人ほどいる。日本語で般若心経を唱える外国人のお遍路さんもいた。また、2日連続で宿が一緒だった私より少し年上のイタリア人は、2ヶ月の歩き遍路ののち日本全国を回ってから鉄道でロシアを横断して、モスクワからミラノへ戻ると話してくれた。旅の楽しみ方のスケールが日本人と違うなと感じた。

働いてお金が溜まるとお遍路に出るといふ仙人のような風貌の人にも出会った。新潟から来た20代の青年は会社を辞めたばかりだった。色々な生き方がある。お遍路から帰るとまたお遍路に出かけたくなる病気を「お四国病」といい、その病にかかると一生治らないそうだが患者は大勢いるらしい。この度で知り合った5人の中にも一人いた。幸い私はまだかかっていない。

個人や休憩所でお遍路さんに飲み物や果物を無償で提供してくれる「お接待」を何回も受けた。到着が遅くなり暗い雨の中を心配して途中まで迎えに来てくれ、洗濯までしてくれた親切な宿もあった。そこかしこで四国の人のお遍路さんに対する優しさや情けを感じた。2021年に予約を入れたら、コロナ禍と高齢化のため廃業してしまった遍路宿がいくつもあった。これからは益々遍路宿が減って、歩き遍路は今までより大変になると思う。

お遍路は完全に四国のビジネスであり、お寺さんも商業ベースであるがやむを得まい。ツアーも沢山あり、コース地図や遍路宿が載った案内本、歩き遍路用の動画も多い。

車やバスより歩き、順打ちより逆打ちの方がご利益があると言われるが、車で回る人、公的交通手段で回る人、歩いて回る人、それぞれ事情があるので手段は何でも良いし、ご利益は同じだと思う。要はその人の「心」次第である。私はお遍路の中でも最も気力体力費用を要する「歩き」を選択したが、手段に拘らず機会があれば八十八カ所を回ってみることをお勧めする。

< 歩行データ >

年	出発日	終了日	日数	寺番号	寺数	距離	距離/日
2018	3/26	3/31	5.5	1~22 番	22	145	26.3
2019	3/26	4/1	7	22~30 番	8	204	29.2
	5/21	6/5	16	30~51 番	21	484	30.3
2021	3/21	4/1	12	51~88 番	37	347	28.9
	4/1	4/2	1.5	88→1 番		42	28.2
霊場回り合計			40.5	1→88 番	88	1,180	29.1
			42	1→88→1 番	89	1,223	29.1
2021	4/3	4/3	1	九度山駅→慈尊院→高野山大門		19	
	4/4	4/4	1	大門→徳川家霊台→奥之院→大門		9	
高野山合計			2			28	
総合計			44			1,251	



第一番霊場 霊山寺 2018.3.26  
身支度を整えスタート



第八十八番霊場 大窪寺 2021.4.1  
4年越しで無事結願



結願証書 2021.4.1  
自己申告 発行料 2000 円



高野山奥之院御廟橋 2021.4.4  
奥が御廟（この先撮影禁止）お遍路完結

## 記 録

- 1 卒後30年の集い：1999年(平成11年)7月18日、ぬのはんにて
- 2 卒後40年の集い：2009年(平成21年)7月4日、RAKO華乃井にて
- 3 還暦の集い：2012年(平成24年)7月7日、仙岳にて
- 4 卒後45年の集い：2014年(平成26年)7月5日、鷺乃湯にて
- 5 65歳の集い：2017年(平成29年)7月1日、浜の湯にて
- 6 卒後50年の集い：2019年(令和元年)7月6日、ぬのはんにて
- 7 今どうしてる?なみの会オンラインの集い：2021年(令和3年)10月23日
- 8 小林正和(万十)君を偲ぶ会：2021年(令和3年)11月1日
- 9 なみの会オンラインの集い：2022年(令和4年)11月5日
- 10 鳥羽研二医師講演会：2023年(令和5年)10月21日、すわっちゃオにて
- 11 古希の集い：2023年(令和5年)10月21日、鷺乃湯にて

### 亡き仲間たちの顔・顔・顔

「古希の集い」へ元気に足を運ぶ同期生たちの一方で、惜しまれながら他界した仲間たちがいます。なみの会の事務局で永眠が把握できているのは次の39人の皆さんです。今回の集い案内を通じては、矢島健二君(4部)、岩波清信君(7部)、藤森重一君(7部)の逝去がわかりました。懐かしい生前の笑顔がそれぞれ思い起こされます。10月21日の集いの席では、今は亡き仲間たちの冥福を祈り、謹んで黙とうを捧げたいと思います。

(敬称略。カッコ内は出身中学校名)

- 【1部】 鮎沢 秀明(岡谷南部)、永井 孝(岡谷南部)、山口 次夫(下諏訪)
- 【2部】 小口 佳広(下諏訪)、林 英美(岡谷南部)、山口 和夫(下諏訪)、横沢 教夫(下諏訪)、横山 和夫(下諏訪)
- 【3部】 北沢 博之(諏訪)、小林 正和(岡谷西部)、瀬戸 守男(辰野)、宮坂 寛美(諏訪)、矢崎 和久(永明)、横内 寛人(岡谷西部)
- 【4部】 林 正昭(下諏訪)、晝間 清文(下諏訪)、矢島 健二(諏訪西)、山田 泰(岡谷西部)
- 【5部】 小林(小池) 恵子(岡谷東部)、小平 治郎(上諏訪)、高木 昭(下諏訪)、武井 一俊(岡谷北部)、武井 孝博(岡谷東部)、平泉 永幸(辰野)、宮沢 良男(辰野)、両角 清隆(茅野北部)、脇坂 友雅(岡谷西部)
- 【6部】 牛山 純男(長峰)、洞沢(名和) 孝二(岡谷南部)、平林 清準(諏訪西)、柳沢 公正(長峰)、湯田坂 一利(茅野北部)
- 【7部】 岩波 清信(諏訪西)、小口 賢治郎(下諏訪)、小池 廣和(永明)、田中 和彦(両小野)、平谷 豊(両小野)、藤森 重一(諏訪)、山田 晃(下諏訪)



## 卒後 50 年記念誌「清水ヶ丘から」の製作



清水ヶ丘から←

諏訪清陵高等学校 73 回生「なみの会」卒後 50 年記念誌

1967 年（昭和 42 年）4 月に諏訪清陵高等学校へ入学し、70 年（昭和 45 年）3 月に卒業した、われわれ 273 人の 73 回生は、今年度、清水ヶ丘を巣立ってから 50 年目という大きな区切りの年を迎えました。この節目に、みんなで集まって会食・懇談するだけでなく、何か形を残そう、という声が 2 年前に起こり、記念誌づくりの計画を立てました。常設の幹事会が中心となって製作委員会を設け、出版経験が豊富な河西朝雄君（3 部）を中心に編集作業を重ねてきました。

「40～50 人に書いてもらえたら御の字か」「何を言ってる。70～80 人にしないと格好がつかないぞ」「大丈夫かなあ」……。

準備段階では、そんなやりとりが幹事連の間で交わされていました。物故者などを除き、連絡の取れる 230 人に寄稿を呼び掛けた今年 3 月の原稿受付スタート時は、不安が先立ちましたが、同期の仲間内で次第に記念誌づくりの機運が盛り上がったらしく、徐々に提出ペースが上向いた結果、最終の締め切り時には全く予期していなかった 100 人超えが実現し、結局は「2 人に 1 人」に近づく 103 人の参加をみたのでした。感謝に堪えません。

大人への脱皮を図るべく自己形成を進めた多感な清陵 3 年間と各自との関係性を綴った第 I 部、若い世代へ届けるメッセージを意識して「50 年後の談論会」と銘打った第 II 部、そして、残しておきたい記録類を集めた第 III 部の 3 部構成。ハイティーン頃の頃ならではの生真面目さ、高揚感、強がり、哀しみ、悩み、失敗などが、それぞれ自然体のタッチで味わい深く描かれています。笑いあり、涙あり。60 代後半の今だからこそ可能になったと思われる「魂の告白」も少なくない。令和の時代に昭和が浮かび上がりました。

中には、“青春の勇み足”、あるいは、“やんちゃな武勇伝”を振り返った記述も散見され、颯感（ひんしゆく）を買う恐れ無きにしもあらずか、と思われませんが、あれから半世紀を経て高齢者グループ入りしている面々の回顧話として、ご容赦いただければ幸いです。

同期の仲間たちのみならず、この冊子を手にしていただいた方々の胸に、筆者たちの思いが何かしら響くとすれば、こんな幸せはないと思っています。

2019 年（令和元年）7 月 6 日  
諏訪清陵高等学校 73 回生「なみの会」会長  
卒後 50 年記念誌製作委員会委員長  
松木 敏博（1 部）



諏訪清陵高等学校73回生同窓会 卒後30周年の集い

H・11・7・18 於 諏訪湖畔 めのはん

■清陵73回生卒後30年の集いの記念写真（敬称略）

1999年（平成11年）7月18日、於・ぬのはん

【最上段左から】遠藤茂(3)、山口和夫(2)、古村功(3)、五味喜代幸(6)、平塚唯史(1)、中村安志(3)、両角庄太郎(6)、山田文雄(4)、柳澤洋介(1)、晝間清文(4)、牛山則雄(7)、吉川悟(6)、山田有造(7)、宮坂美千博(1)、宮坂平(7)、井上和彦(6)、長田茂(2)、岩波清信(7)、熊谷靖樹(6)、北原勝(7)

【4段目】窪田敏(5)、小口信治(4)、小松宏昭(5)、瀨隆二(5)、北原光比(2)、浜正也(6)、名取康彦(6)、池上昭彦(1)、三澤伸二(3)、小澤龍太郎(4)、三浦一洋(2)、赤羽博巳(4)、原聰(4)、横内孝文(7)、中山明彦(5)、宮坂博之(6)、津金敏三(3)、山田芳文(6)、矢崎和久(3)、柳田恒男(2)、牛山秀彦(1)、川島弘(7)

【3段目】小松秀男(7)、林重男(3)、伊藤俊卷(3)、小山泰男(3)、河西朝雄(3)、小池隆昭(5)、両角誠(7)、鈴木雅久(4)、中島毅(3)、小池浩一(6)、林亮一(7)、原恵二(7)、小口泰介(7)、松田光明(3)、小林正和(3)、小林茂和(1)、伊藤養一(5)、小池文市(4)、宮坂和生(1)、畑野敏文(2)、向山博志(5)、帯川利之(3)

【2列目】小松大蔵(4)、鳥羽研二(4)、北川和彦(3)、藤森英幸(2)、矢ヶ崎崇(3)、中澤清人(2)、二ツ木(伊東)淳子(3)、柳沢(藤森)真知子(3)、北村(柳沢)加代子(3)、阿部光康(1)、飯田夏来(6)、坂井明英(7)、山崎和彦(6)、渡邊博保(4)、小松賢三(1)、小島一彦(5)、丸山芳高(1)、林春幸(1)、武井孝博(5)、有賀博行(1)、宮坂和行(5)、原田和郎(6)、洞沢(名和)孝二(6)、加藤規泰(4)、松木敏博(1)

【1列目】マデューン(今泉)啓子(3)、飯岡(春日)一文(1)、伊藤(五味)成子(5)、和泉(櫻井)桂子(4)、小林(小池)恵子(5)、赤羽(浜)清子(7)、林(笠原)俊子(1)、岩下光雄先生、伊藤邦雄先生、矢島良幸先生、伊藤誠一先生(2)、本山綱規先生(7)、白沢寛人先生(4)、林(根橋)秀幸(4)、宮坂春樹(7)、平林清準(6)、西村厚志(4)、竹村純一(4)、岩本光正(2)、山田雄一(2)、小池忠男(2)

## 2 卒後40年の集い:2009年7月4日、華乃井にて:松木敏博君(1部)撮影

集いに先駆けて母校で校歌(第1、第2)額の贈呈式を行ないました。かつて清陵の書道担当教諭だった小宮山雪陽先生に書をお願いしました。

### 記念撮影



### 本山先生挨拶



### 森代表幹事挨拶



除幕：林さん、和泉さん

額と制作者：小宮山雪陽先生





校歌斉唱



### 3 還暦の集い:2012年7月7日、仙岳にて:窪田敏君(5部)撮影

卒後30年の第1回から始まった同期会は5年刻みで実施されてきた。しかしながら、5年周期とはずれるが、人生の節目である「還暦」を迎え、とにかく皆で集まろうと開催された。「老後をいかに生きるか語ろう??」と思ったかどうかは不明である。11年前の姿である。今と比べてみてどうでしょうか?窪田敏君が撮ってくれたスナップです。記録として残り感謝です。

#### 記念撮影

狭い部屋での撮影となったが、どうにか全員顔が入る状況で並ぶことが出来た。後ろの人の顔は小さくなってしまい申し訳ない。



### 山田事務局長の司会で始まり、松木会長挨拶

山田君、どこから探してきたのでしょうか？個人的には、私は絶対嫌だと拒否し赤(エンジ色)のベストで済ませた。かなりの人が、「赤いちゃんちゃんこ」を着てお祝いをしたのでしょうか？還暦には生まれ直しという意味があり、「赤ちゃんに戻る」ということで、赤いちゃんちゃんこを着るという慣習がある。赤には魔除けの意味があるとか。さて、山田君は生まれ直して、どんな第二の人生を送るのだろうか。

松木君、すこしお腹がでてきましたが、今に比べればこの頃はまだスリムな方。陸上競技部の長距離ランナーであったことを思いだして、諏訪湖マラソンに挑戦してください。



### 物故者への黙祷

還暦を前に亡くなられた方のご冥福をお祈りします。





## 白澤先生のご挨拶

4部担任の白澤先生にご挨拶をいただきました。この頃はお元気でしたが、白澤先生は平成28年11月に76歳で永眠されました。



## 歓談

歓談前の「待て」の状態。神妙に松木会長の挨拶を聞いていますが、年とともに「待て」ができなくなってきたのでは。「挨拶とスカートは短い方が良い」と今でも言うのかな？ 以前は言われていた。心掛けます。



## 校歌

諏訪清陵高校には、第一校歌「東に高き」と第二校歌「ああ博浪（ばくろう）の」があり、いつも続けて歌われます。歌う際には、生徒代表の「セーノッ」の声で始まり、さらにピアノ伴奏ではなく手拍子と和太鼓でリズムをとります。







最後はマルの木遣り

マルと言えば木遣り。木遣りと言えばマル。特技がある人は素晴らしい。2016年（平成28年）の御柱祭の木遣り日本一コンクールで念願叶い最優秀賞の栄誉を受けました。



## 金色の民

地方会単位。クラブ単位、クラス単位でよく「金色の民」をどこでも所構わずにやっています。卒業してからも、事あるごとにやっている輩が多いです。



## 二人の銀座

「♪ 待ち合わせて 歩く  
銀座・・・ ♪」  
3部：北川先生と  
啓子ちゃんの  
デュエット



4 卒後45年の集い：2014年7月5日、鷺乃湯にて：松木敏博君(1部)撮影

記念撮影



白澤先生挨拶



本山先生乾杯



山田事務局長校歌音頭



校歌





エール

万歳



5 65歳の集い:2017年7月1日、浜の湯にて:平林重夫君(4部)撮影

記念撮影



受付

小池君と藤森君（トリ）は仕事しているようだけど、山崎君は瞑想中？





### 3人娘

3人娘でデビュー。後ろのおじさんは後援会長？それとも変なおじさん？



### 仲間たち







## 校歌

山田事務局長の音頭で、恒例の校歌歌唱。



## 木遣り

東の横綱宮坂君（マル）、西の横綱横内君、芸達者がそろいました。



6 卒後50年の集い:2019年7月6日ぬのはんにて:平林重夫君(4部)撮影

記念撮影



諏訪清陵高等学校 73 回生「なみの会」卒後 50 年の集い 2019 年(令和元年)7月6日 於:上諏訪温泉ぬのはん

受付

受付前の幹事打ち合わせ。



## 司会

山田事務局長の司会で始まる。



## 挨拶

松木会長の挨拶。鳥羽君の乾杯。啓子さんより女性部について。河西編集長より記念誌の御礼。



## 開宴

題字は山田事務局長。

写真は1部（15名）、2部（15名）、3部（19名）、4部（15名）、5部（11名）、6部（10名）、7部（13名）の順。最後は幹事。カッコ内は出席者数。

当日最大派閥の3部は19名の出席ですが、写真には16名しか映っていません。残る3名は行方不明で、どっかのグループで飲んでいただと思われます。



## 1部



2部



3部





4 部



5 部



6部



7部



幹事



## ビデオ上映

今井柳平君所蔵の高校2年当時の映像。ビデオに写っているのは伊藤（ノウ氏）先生。



## 校歌

山田事務局長の音頭で、恒例の校歌歌唱。太鼓は小池君。



## 木遣り

恒例のマルの木遣り。



## 二次会

一次会では見せられなかった、お宝映像を上映しました。解説は柳平君。



## 7 今どうしてる?なみの会オンラインの集い:2021年10月23日

なみの会事務局 山田 雄一

こんばんは。昨日の「今どうしてる?なみの会オンラインの集い」は、初めての Zoom 活用による試みでしたが、約 30 人の参加を得て、予定の時間を上回る 2 時間あまりのトーク談笑で成功裏に終えることができました。参加してもらった皆さん、都合をつけて熱心に加わってもらい、ありがとうございます。また予定していながら所用で断念せざるを得なかった方たちを含め、次の機会での再会を楽しみにしています。

今回、コロナ禍で広まったオンラインの Zoom システム利用に対し、「やったことがない」「面倒だ」などとネガティブな反応も少なくなかったですが、それでも 1 週間前の「お試しコース」や昨日の本番前にも 30 分間の試行タイムを設けたことで、参加を決意してもらえたケースもあり、すでに熟知している面々と合わせ、思った以上にスムーズに展開できたのではないかと受け止めています。

一部の幹事間では、すでに、来年の早い時期に第 2 弾を企画したらどうか、という声も出始めています。そのタイミングとえば、ずばり話題は御柱。個人的には山出し前の 1～3 月のうちに「語り合おう御柱祭 2022」といった開催イメージがふくらみつつあり、今後、幹事会で諮っていきたいと思います。

そのうえで、6 月下旬の本部同窓会総会・懇親会の 2 次会で「ミニ同期会」に充てるプランに次いで、1 年延期となる 11 月 5 日（土）の「古希の集い」（於：浜の湯）の開催、といった今年是不発だった計画につなげていければと思っています。今回の中止・延期で実現できなかった 鳥羽 研二 君（4 部）による認知症・フレイルに関する講演も 1 年後に改めて予定しています。「11 月 5 日（土）」の予定表への明記をお願いします。

また、昨日のオンライン冒頭では、一昨年 7 月の「卒後 50 年の集い」以降に亡くなった 6 人の顔ぶれを共有するとともに、これで計 34 人となった亡き同期生を悼み、黙祷しました。この 2 年間に他界したのは、小林 正和 君、矢崎 和久 君（以上 3 部）、晝間 清文 君（4 部）、平林 清準 君（6 部）、小池 廣和 君（7 部）です。

ここで、皆さんにお願いです。前述の通り、「コロナ禍でもできるオンラインの企画」に再び取り組みたい意向があります。昨日のメンバーは、参加した人ならではの感想や意見、次に向けた注文や提言などを、このメールへの返信で寄せてもらえるとありがたいです。参加できなかった人も、それぞれの受け止め方や、次の開催には参加したい希望があるかどうかなど貴重なメッセージを届けていただくと助かります。付記が 2 つあります。異色のトライが実現できたことで、地域紙の「わたしたちの同窓会」コーナーに寄稿することを考えています。単に自己満足でなく、今の時代ならではの状況の中で工夫を凝らしたイベントとして社会に報告するだけの価値があると考えています。もう一つは個人的な件になります。オンラインの口火を切る意味で幹事たちがまず近況を述べた中で、

私・山田が今年7月から地域紙「長野日報」で隔週連載のスポーツコラム「語ろうスポーツ」を執筆していることを話したところ、「その記事を読みたい」とのありがたい反響がありました。そこで、希望される方には、掲載記事をメールで送ることを考えています（次回は11月5日付）。関心のある方は、その旨、お知らせください。もちろん、無理強いするものではありません。以上、よろしくお願いいたします。



## 8 小林正和(万十)君を偲ぶ会:2021年11月1日

今井柳平君の呼びかけで小林正和(万十)君を偲ぶ会を2021年(令和3年)11月1日に諏訪市の雫石で行いました。参加者は今井柳平君(3部)、津金敏三君(3部)、北川和彦君(3部)、林重男君(3部)、原大君(2部)、山田雄一君(2部)。河西朝雄君(3部)はZoomでオンライン参加。以下は柳平君の呼びかけの文章です。

『皆で、万十との思い出を語り合うことで遅れ遅れの供養をしたいと思います。高校時代は3年、実質深く関わったのは1年~1年半程度なのに、古希を迎えても鮮明に記憶ありますね。何時も笑顔でニコニコと、たまに場末の飲み屋のネエチャンがどうのこうのと騒いでいた万十が突然「訃報」メール一本の連絡、何もできず本日に至り、供養しましょう。皆が好きだった小林正和君でした。「なみの会」のあった平成31年3月~昨年初までの1年間のメールやり取りから彼が何を思い、何を考えていたかをこのメールの行間から読み取ってもらえると幸いと思い、このメールを送ります(偲ぶ会参加者のみ)。会社を任され、あれこれ夢中で挑戦し、頑張っていた姿を私は感じていました。』



## 9 なみの会オンラインの集い:2022年11月5日

なみの会事務局 山田 雄一

清陵 73 回生・なみの会の皆さんへ

こんばんは。いつも会の運営に協力していただき、ありがとうございます。

きょうは、標題の通り、残念なお知らせと、その関連で新たな提案のメールです。希望の方にはBCCでお送りしています。

### 【1】「古希の集い」の再延期について

当初計画の昨年 10 月 23 日(土)から今年の 11 月 5 日(土)にコロナ延期した「集い」について、先日のオンライン幹事会で検討の結果、「大人数での宴会は時期尚早」との結論に達しました。楽しみにしてくださっていた方も多いと思いますが、やむを得ない判断とご理解ください。ついては、再延期とし、来年の 10 月 21 日(土)を新たな期日と決めました。会場は同じく上諏訪温泉・浜の湯です。午後 4 時開始予定の宴会に先立ち、老年医学専門医の鳥羽研二君(4部)を講師に、フレイルと認知症をテーマとした講演会を当初計画通り第 1 部として併催することとし、日程についても鳥羽君の了解を得ました。午後 2 時から 1 時間半を見込んでいます。われわれ同期勢に加え、一般公開(入場無料、一般の方からは資料代をいただくか)で参加を募り、地域貢献につなげる想定です。1 年後、コロナが落ち着き、「3 度目の正直」の実現を願っています。

## 【2】「オンラインの集い」の参加募集とZoom(ズーム)練習日の開催について

11月5日(土)を白紙にしてしまうのは忍びないので、昨年につきオンラインによるトークの場を設けます。時間は午後2時～4時。昨年は30人の参加があり、初めてにしては盛り上がったと思います。参加希望の方は、このメールへの返信にて山田まで申し込んでください。参加される方には、事前にURLをお知らせします。クリックすると、難なく入室できる仕組みです。具体的な進め方については、昨年の経験をもとに事務局で詰めていきますが、アイデアがあればお寄せください。

コロナ禍でオンラインの会議や対話は普及しましたが、未経験の方も少なくないと思います。昨年、好評だった事前の初心者向け練習日を本番1週間前の「10月29日(土)午後4時～5時」の日程で開きます。メカに強く、今回も設定のホスト役となる河西朝雄君(3部)がコーチ役を務めます。これまで縁のなかった人もZoomデビューの好機としてください。こちら参加希望の方は返信メールで承ります。





## 10 鳥羽研二医師講演会：2023年10月21日

古希の集いに先立って行われる講演会の案内チラシ。700部印刷して配布。

### 諏訪ゆかりの専門医による講演会

## 認知症とは？ フレイルとは？



### フレイル研究の第一人者

東京都健康長寿医療センター理事長

鳥羽 研二 医師

(東京大学医学部卒、杏林大学教授、  
国立長寿医療研究センター総長など歴任)

『今日から役立つフレイルの知識と  
ケアのポイント』

『ウィズ・エイジング』など著書多数

※講演会場で販売します

「人生100年時代」が夢ではなくなりました。大切なのは、元気で長生きするための最大の壁となる認知症とフレイルに関する正確な理解と予防・共生です。講演では、諏訪地域で育った著名な老年医学の専門医が認知症と最近話題のフレイルをわかりやすく解説し、最新の予防法と治療法、共生に役立つ技術、仲間の貴さを語ります。

日時：2023年 **10月21日(土)**

14:00~15:30 (開場 13:30)

会場：**すわっチャオ、入場無料**

会場：諏訪市駅前交流テラス・3階「すわっチャオ」(諏訪市諏訪1-6-1)

※駐車の場合、駅前の市営駐車場(3時間無料)が便利

講師：鳥羽 研二・東京都健康長寿医療センター理事長

(医学博士、諏訪清陵高校73回卒業生・東京大学医学部卒)

定員：300人(一般公開、入場無料)

主催：諏訪清陵高校73回生・なみの会

後援：諏訪清陵高校同窓会

お問い合わせ：090-3080-3090(なみの会事務局・山田)



### 講演内容のあらまし

認知症とフレイルには共通点が多い。

- ①加齢とともに徐々に症状が出てくる。  
そのため、年齢のせい、とされやすい。  
なにげない生活上の変化を見逃さないことが大切。
- ②生活習慣病や生活習慣など80%以上が共通の危険因子  
持病や感覚器の持つ意味を知ることが大事。
- ③技術革新を診断に活かす。
- ④予防のカギは、運動、食事、睡眠といった毎日の生活の中にある。
- ⑤新薬の特徴を把握する。注意点は何か？
- ⑥暮らしやすい街づくり、支えるのは専門職だけでよいのか。

## 人生100年時代に 知っておきたいこと



### 講師略歴

1951年4月、松本市生まれ  
岡谷市に転居し、中央小学校、北部中学校、諏訪清陵高校卒業（1970年、73回生）  
東京大学理科Ⅲ類、医学部卒業（1978年）  
東大病院、警察病院で研修後、東大助手、助教授を経て2000年、杏林大学医学部教授  
2010年、国立長寿医療研究センター病院長、のち総長  
2019年、東京都健康長寿医療センター理事長

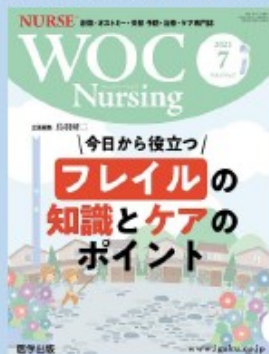
杏林大学教授時代に日本で初の「物忘れセンター」を設立し、認知症の早期発見と予防、全人的ケアのシステムを構築。音楽療法、運動療法、作業療法、認知症短期集中リハビリに取り組む。東京都健康長寿医療センターでは、認知症未来社会創造センター、フレイル予防センターなどを立ち上げ、現在に至る。

内閣府認知症施策推進有識者会議座長、厚生労働省長寿科学／認知症科学研究費委員会委員長、国際アルツハイマー協会医療科学諮問委員会委員などを歴任。



### 主な著書

『今日から役立つフレイルの知識とケアのポイント』（医学出版）、『認知症なんでも相談室』（メディカルビュー社）、『ウィズ・エイジング 何歳になっても光り輝くために』（グリーン・プレス）、『間違いだらけのアンチエイジング』（朝日新書、現在は電子書籍のみ）、『これからの在宅医療』（グリーン・プレス）、『こちら葛飾区亀有公園前派出所 両さんの人体大探検』（集英社、監修担当）



## 古希に思う

編集長 河西 朝雄

古希（古稀）は杜甫の詩の一節である「人生七十古来稀なり」に由来している。「稀」は常用漢字でないので現在は「古希」と書くのが一般的である。杜甫の詩のように昔は古希を迎える人は少なかったが、今や古希を過ぎた年寄りがゴロゴロしている。「人生 100 年時代」では古希の後の新しいライフスタイルやライフプランが求められる。

今回の記念誌は「言いたいこと、伝えたいこと」をテーマに投稿してもらった。古希を挟んで 2019（令和元）年～2023（令和5）年の5年間の長丁場の原稿集めであった。幹事の皆さんにまず原稿を書いてもらい、徐々に輪を広げていった。表紙は松木敏博君（1部）にお願いした。前作「清水ヶ丘から」の103名の投稿には及ばないが、今回は一人で複数件の投稿をしてもらい、その結果62名93件の投稿を頂いた（山田事務局長の精力的なお願いが効いた）。それぞれの古希の生き方、これからに続く夢が語られていた。まさに清陵第二校歌（作詞 中島喜久平）の最後の一節の「理想の花の咲かむまで」である。この言葉は前作と今作の表紙の中に埋め込まれている。青臭い十代に熱き思いで歌ったこの言葉を古希を過ぎた老兵はまた別の意味で胸に刻むのである。

さて次の節目は喜寿（77歳）であるが、なんとか元気に生きながらえて皆と「理想の花の咲かむまで」を歌いたいものである。

## 寄稿者62人と「熱い司令塔」に感謝

事務局長 山田 雄一

掲げた目標を達成するには困難が伴う。しかも1度ならず2度。容易でない道のりを登り切った古希記念誌「清水ヶ丘からII」の刊行に、頂上を極めた気分だ。事務局担当として、2019年の卒後50年記念誌「清水ヶ丘から」とは異なる喜びに包まれている。

62人の寄稿者にはひたすら感謝です。ありがたい能動派がいれば、懇願に応じてもらった人もいる。それぞれ事情を抱える中で幅広い協力が得られ、記念誌は形になった。

4年前の記念誌が103人の寄稿で出来上がってから、なみの会幹事会で「第2弾を」という話が出た。しかし、「続編は無理じゃないか」という意見も複数あった。同期たちに聞くと、「書き尽くした。もう勘弁して」の声も耳にした。幹事会は、イコール記念誌製作委員会。事務局の立場では「ハードル、高いな。どうしたものか」と思いをめぐらせた。

しかし、編集長の河西朝雄君は違った。「前回では、やり切れていない」「70代だからこそ書きたい話があるはずだ」と譲らない。結局、彼の一途さが通り、刊行方針決定。ならば、この経験豊富な編集長と再び歩調を合わせ、やり遂げようじゃないか。そう覚悟した。熱い司令塔の信念が同期勢の共感につながったからこそ、「2つ目の頂上」に立てた。

ここはもう「仲間褒め」に尽きるが、辣腕のキーマンに、ただただ拍手である。

## 清水ヶ丘からⅡ

～ 言いたいこと、伝えたいこと ～

諏訪清陵高等学校73回生「なみの会」

古希記念誌「清水ヶ丘からⅡ」製作委員会

委員長	松木 敏博（1部）	
事務局長	山田 雄一（2部）	
会計	藤森 英幸（2部）	
編集長	河西 朝雄（3部）	
編集委員	宮坂 和生（1部）	小池 忠男（2部）
	北川 和彦（3部）	平林 重夫（4部）
	伊藤 正陽（5部）	山崎 和彦（6部）
	横内 孝文（7部）	

表紙(表・裏)デザイン 松木 敏博（1部）

記念誌の電子版は以下の Web ページからダウンロードすることができます。

<https://kasailab.jp/nami/hiroba.html>



発行日 2023年（令和5年）10月21日

編集・発行者

諏訪清陵高等学校73回生「なみの会」

古希記念誌「清水ヶ丘からⅡ」製作委員会

なみの会事務局・山田 雄一

電話：090-3080-3090 Eメール：yamada-y6@po32.lcv.ne.jp

印刷・製本 株式会社 プリントバック（印刷通販プリント・バック）